

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第42集

たけ ひさ がわ か りゅう いき じょう り
武久川下流域条里遺跡

2004

財団法人山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター



1 調査区遠景（東から）



2 遺跡調査区全景（南から）

巻頭図版 2



1 一括出土した土器



2 線刻文様のある土器

序

本書は、山口県の委託を受けて、財団法人山口県教育財団が実施した都市計画街路幡生綾羅木線地方特定道路整備工事に伴う武久川下流域条里遺跡の発掘調査の記録です。

遺跡の所在する下関市は、本州の西端に立地し、関門海峡に面する地理的環境にあり、古くから、九州をはじめ、中国・四国・近畿地方や朝鮮半島・中国大陸との交流を伝える遺跡が、数多く残されています。

このたび調査した遺跡は、下関市の南西部を響灘に向けて流れる武久川の中・下流域に広がる平野部に点在する弥生時代・古墳時代・古代にかけての遺跡群の一画にあたります。

調査の結果、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器群が一括して出土し、下関市地域や山口県内におけるこの時期の土器編年や人々の生活の様式・習俗を知る上で良好な資料を提示することとなりました。

本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究の資料や郷土の歴史を学ぶ資料として、幅広く活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご指導・ご協力いただきました関係各位に対し、深くお礼申し上げます。

平成16年3月

財団法人山口県教育財団

理事長 牛見正彦

例 言

- 1 本書は、山口県下関市^{はたぶみや}幡生宮^{したちよう}の下町に所在する武久川^{たけひきがわ}下流域^{かりゅういきじょうり}条里遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、都市計画街路幡生綾羅木線地方特定道路整備工事に伴い、財団法人山口県教育財団が、山口県下関土木建築事務所の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は、次の通りである。

調査主体	財団法人山口県教育財団	山口県埋蔵文化財センター
調査担当	指導主事	上山佳彦
	指導主事	西尾健司
	指導主事	城島史朗
- 4 調査にあたっては、山口県下関土木建築事務所、下関市教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「小倉」・「安岡」を、第2図は、山口県下関土木建築事務所提供の1000分の1地形図をそれぞれ複製使用したものである。
- 6 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 7 出土遺物については、山口大学埋蔵文化財資料館 田畑直彦氏からご教示を受けた。
- 8 本書に使用した土色の色調表記 Munsell 方式による。

農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）	『新版標準土色帖』
----------------------	-----------
- 9 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 10 出土遺物実測図中の断面については、黒塗りが須恵器を、白抜きがその他の土器を表わす。
- 11 本書で使用した遺構略号は、次の通りである。

SB：建物跡	SK：土坑	SD：溝	SP：柱穴・杭穴
--------	-------	------	----------
- 12 本書の作成には、上山・西尾・城島が共同で当たり、本文執筆、編集は上山が行った。

本文目次

I 位置と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1
II 調査の経緯と概要	4
1 調査に至る経緯	4
2 調査の経過と概要	4
III 遺構	7
1 調査区の概要	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺構	8
2 1地区	8
3 2地区	8
(1) 土器溜まり	8
(2) 土坑	13
(3) 溝	13
(4) 灰オリーブ色粘質土層	13
4 3地区	14
5 4地区	14
6 5地区	14
IV 遺物	19
1 出土遺物の概要	19
2 2地区南西隅土器溜まり出土遺物	19
(1) 甕	19
(2) 壺	27
(3) 高杯	30
(4) 器台	31
(5) 鉢	31
(6) ミニチュア土器	35
3 2地区灰オリーブ色粘質土層等出土遺物	35
V まとめ	41
1 調査成果の概要	41
2 遺構について	41
3 遺物について	43

図 版 目 次

巻頭図版 1	1 調査区遠景（東から）		
	2 遺跡調査区全景（南から）		
巻頭図版 2	1 一括出土した土器		
	2 線刻文様のある土器		
図版 1	1 調査区遠景①（北西から）	2	2 地区南西隅土器溜まりのトレンチ
	2 調査区遠景②（西から）		A-B区出土状況（西から）
図版 2	1 調査区全景①	図版10	1 2地区南西隅土器溜まりのトレンチ
	2 調査区全景②		A-B区出土状況（南から）
図版 3	1 1地区発掘状況（南から）	2	2地区南西隅土器溜まりのトレンチ
	2 1地区遺構検出状況（南から）		A-B区出土状況（北から）
図版 4	1 3地区発掘状況（東から）	図版11	1 2地区南西隅土器溜まりのトレンチ
	2 3地区遺構検出状況（東から）		A-B区およびB-C区出土状況（南から）
図版 5	1 4地区全景（西から）	2	2地区南西隅土器溜まりのトレンチ
	2 4地区全景（東から）		A-B区南側出土状況（北から）
	3 4地区遺構検出状況（西から）	図版12	1 2地区南西隅土器溜まりのトレンチ
	4 4地区遺構検出状況（北西から）		C-D区出土状況（南から）
	5 4地区掘立柱建物跡 SB401（西から）	2	2地区南西隅土器溜まりのトレンチ
図版 6	1 5地区全景（西から）		C-D区南側出土状況（南から）
	2 5地区遺構検出状況（西から）	図版13	出土遺物①（甕）
	3 5地区遺構検出状況（北から）	図版14	出土遺物②（甕）
	4 5地区遺構検出状況（東から）	図版15	出土遺物③（甕）
	5 5地区掘立柱建物跡 SB501（南から）	図版16	出土遺物④（甕）
図版 7	1 2地区全景（西から）	図版17	出土遺物⑤（甕）
	2 2地区全景（東から）	図版18	出土遺物⑥（壺）
	3 2地区遺構検出状況（東から）	図版19	出土遺物⑦（壺）
	4 2地区土坑 SK225（北東から）	図版20	出土遺物⑧（壺）
	5 2地区遺構検出状況（東から）	図版21	出土遺物⑨（高杯）
図版 8	1 2地区南西隅土器溜まりの全体出土状況	図版22	出土遺物⑩（高杯）
	（東から）	図版23	出土遺物⑪（器台・高杯）
	2 2地区南西隅土器溜まりの全体出土状況	図版24	出土遺物⑫（鉢・ミニチュア土器）
	（北西から）	図版25	出土遺物⑬（須恵器・土師器・土製品・石製品）
図版 9	1 2地区南西隅土器溜まりの全体出土状況		
	（北から）		

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	第16図	遺物実測図⑥（甕）
第2図	調査区設定図	第17図	遺物実測図⑦（甕）
第3図	基本層序図	第18図	遺物実測図⑧（甕）
第4図	遺構配置図	第19図	遺物実測図⑨（壺）
第5図	2地区南西隅土器溜まりの出土状況実測図	第20図	遺物実測図⑩（壺）
第6図	トレンチ A・B・C・D 土層断面図	第21図	遺物実測図⑪（壺）
第7図	土坑（SK225）実測図	第22図	遺物実測図⑫（高杯）
第8図	溝（SD224）土層断面図	第23図	遺物実測図⑬（高杯）
第9図	灰オリーブ色粘質土層の土層断面図	第24図	遺物実測図⑭（器台）
第10図	掘立柱建物跡実測図	第25図	遺物実測図⑮（鉢）
第11図	遺物実測図①（甕）	第26図	遺物実測図⑯（ミニチュア土器）
第12図	遺物実測図②（甕）	第27図	遺物実測図⑰（須恵器・土師器・土製品・石製品）
第13図	遺物実測図③（甕）	第28図	2地区南西隅土器溜まりの土器出土位置図
第14図	遺物実測図④（甕）	第29図	出土土器型式分類図
第15図	遺物実測図⑤（甕）		

表 目 次

第1表	遺構一覧表	第3表	遺物観察一覧表
第2表	掘立柱建物跡一覧表		

I 位置と環境

1 地理的環境

武久川下流域条里遺跡は、下関市幡生宮の下町に所在する。遺跡の所在する下関市は、本州の西端に位置し、三方を海に囲まれている。西側は日本海につながる響灘に接し、南側は瀬戸内海につながる周防灘に面し、南西側は関門海峡によって九州と分けられている。

遺跡は、旧市街地の北側、J R 幡生駅から約500m東側の武久川中流域左岸に位置する。この一帯の表層地質は、古第三紀の幡生層と呼ばれる風化礫岩を基盤としている。武久川は、標高126mの鳥越山の東側谷部に源流を持ち、丘陵を南北に開析しながら響灘に面した武久浜へと緩やかに東から西に流れ、流域には平野部が広がっている。遺跡の現地表面での標高は約10.5～7.7mである。

武久川中流域から下流域にかけての平野部は、近世には水田地帯として開発されていたものと考えられる。現在は、近代以降の開発による土地埋め立てにより、旧地形よりも2m以上高くなっている。かつては海岸の入り江もかなり内陸部まで入り込んでいたものと推定され、調査区の近辺に海岸線が迫っていた時期もあったと考えられる。また、現在のJ R 幡生駅周辺も、埋め立て以前は、低湿地帯が広がっていたことが、遺構分布調査で確認されている。

一方、武久川右岸の山の田地区の丘陵部を隔てて、北側には東から西へと響灘へ向けて綾羅木川が流れ、沖積平野が開けている。この一帯は、武久川の流域に比べ、広い平野部が形成され、弥生時代以来の水田開発の跡や集落跡・墳墓など歴史を物語る遺跡が、数多く点在する地域として知られている。

2 歴史的環境

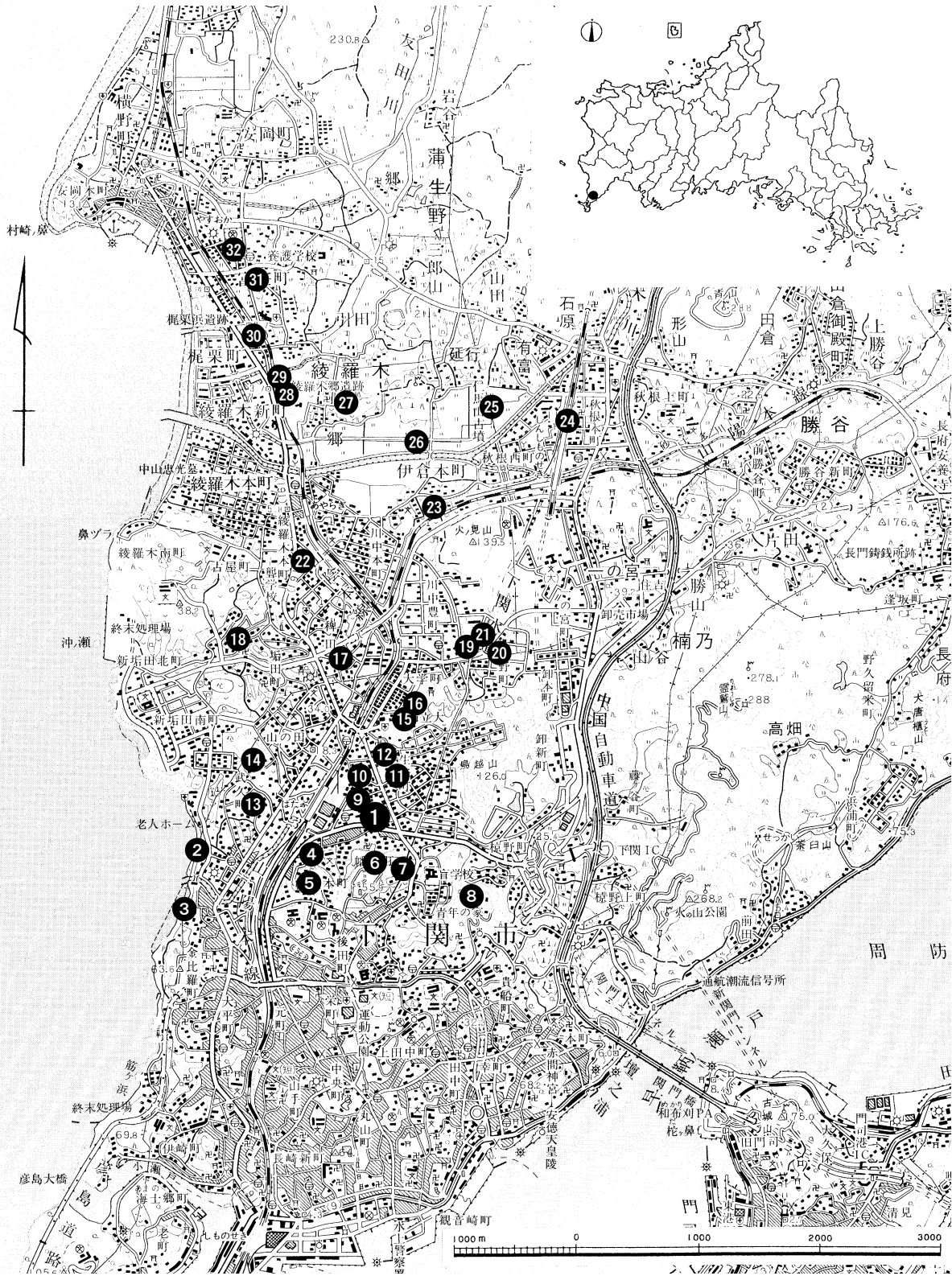
武久川中流・下流域を中心とした低地部一帯は、近代以降の埋め立てによる土地開発のため、表面採集などによる遺跡分布の状況は十分には把握されていない。

J R 幡生駅から調査対象区域にかけての地域には「志の坪」というような条里制のなごりを思わせる小字名が残っている。このため、小規模ながら条里制の施行を推定する見解も出されているが、範囲や時期などの詳細については不明である。今回調査対象となった地区は、この武久川中流・下流域に想定される条里制にかかわる遺跡として「武久川下流域条里遺跡」の名称で呼ばれている範囲に含まれている。

この周辺地域の人々の営みは、古くは旧石器時代終末期とみられる有舌尖頭器を出土した武久笹山遺跡（13）にその形跡がうかがわれる。

縄文時代の遺跡は、海岸線の洪積段丘や砂丘に立地するものが多い。綾羅木川河口の北部沿岸部の潮待貝塚（31）では磨消縄文などの縄文時代後期の土器と溝状遺構が確認されている。隣接する神田遺跡（32）では、打製石斧が出土し、後期の大型の土坑が検出されている。

弥生時代以降になると、水田開発に伴い、河川水系を中心に集落が形成されるようになる。この地域では、綾羅木川水系と武久川水系の2つの河川流域に遺跡の分布が顕著に見られる。



- | | | | |
|--------------|-----------|------------|-----------|
| 1 武久川下流域条里遺跡 | 9 宮の下遺跡 | 17 稗田地蔵堂遺跡 | 25 仁馬山古墳 |
| 2 武久浜墳墓群 | 10 宮山古墳 | 18 垢田遺跡群 | 26 延行条里遺跡 |
| 3 海老田土坑墓 | 11 女郎ヶ迫古墳 | 19 熊野古墳 | 27 上の山古墳 |
| 4 後山古墳 | 12 二の倉古墳 | 20 岩名古墳群 | 28 綾羅木郷遺跡 |
| 5 幡生遺跡 | 13 武久笹山遺跡 | 21 熊野原遺跡 | 29 若宮古墳 |
| 6 千丈ヶ原古墳 | 14 武久西原遺跡 | 22 稗田遺跡 | 30 梶栗浜遺跡 |
| 7 椎ノ木原古墳 | 15 権現山遺跡 | 23 伊倉遺跡 | 31 潮待貝塚 |
| 8 幡生城跡 | 16 熊野生山遺跡 | 24 秋根遺跡 | 32 神田遺跡 |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

武久川水系右岸では、宮の下遺跡（9）で磨製石斧が採集され、弥生時代の集落が営まれていたことが推定される。隣接する低い台地上には、横穴式石室を持つ全長約33mの小型前方後円墳である宮山古墳（10）をはじめ、女郎ヶ迫古墳（11）、二の倉古墳（12）が立地している。いずれも横穴式石室を主体部に持ち、宮山古墳の被葬者はこの流域の首長墓とみられる。鳥越山と火見山に囲まれた盆地の熊野地区でも、熊野生山遺跡（16）で弥生時代の人々の営みがうかがわれ、続いて熊野古墳（19）、岩名古墳群（20）などが築かれている。

一方、武久川左岸には、北側に張り出す出入りと起伏の多い丘陵地があり、弥生時代の集落跡である幡生遺跡（5）が知られる。古墳時代には後山古墳（4）、千丈ヶ原古墳（6）、椎の木原古墳（7）などが造営されている。千丈ヶ原古墳は横穴式石室を持つ円墳6基で構成されていたといわれるが、現在は消滅して残っていない。また、武久川河口の海浜砂丘には、箱式石棺墓群11基などが見つかるとともに、半両銭が出土した武久浜墳墓群（2）や海老田土坑墓（3）など弥生時代の墳墓遺跡が立地している。

一方、武久川とは北側の丘陵で隔てられる綾羅木川水系には、武久川流域に比べて広い平野部が広がり、弥生時代を中心に、古墳時代から古代に至るこの地域の中心的集落跡や墳墓遺跡が点在している。弥生時代の遺跡として、国指定史跡の綾羅木郷遺跡（28）があり、前期中頃～中期前半の1000基を超える貯蔵穴と環濠が確認されている。また、多鈕細文鏡と細形銅剣を副葬した前期末の箱式石棺が見つかった梶栗浜遺跡（30）、伊倉遺跡（23）、稗田遺跡（22）などがあり、南の丘陵部には、連弧文銘帯鏡と蓋弓帽が出土した稗田地蔵堂遺跡（17）、熊野原遺跡（21）、西側の海岸部には垢田遺跡群（18）などが点在している。

古墳時代に入ると、首長層の墳墓として、仁馬山古墳（25）、若宮古墳（29）、上の山古墳（27）と3基の前方後円墳が北側の丘陵に築造されている。若宮古墳の内部主体には、弥生時代以来の伝統をもつ箱式石棺が採用され、追葬が行われたことが確認されている。後期の円墳は各地に点在する。

古代以降にかかわる遺跡の分布は武久川流域では希薄となり、綾羅木川流域では官衙跡の可能性が指摘されている秋根遺跡（24）が知られる。また、延行条里遺跡（26）は、古い時代の遺構・遺物を出土しているが、その名のとおり、条里制にかかわる遺構の所在が確認されている。熊野地区では、経筒が出土した権現山遺跡（15）が知られている。

中世以降の武久川流域では、山城として幡生城跡（8）が、左岸に隣接する山頂に築かれている。室町時代から江戸時代にかけては、沿岸低地部の武久西原遺跡（14）で集落跡・祭祀跡が検出されており、近世までのこの地域の人々の生活の足跡をたどることができる。

（参考文献）

- 1 下関市市史編集委員会 『下関市史 原始～古代』 1965年
- 2 三浦 肇 「山口県下における条里遺構について」(『歴史地理学』第115号 1981年)
- 3 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 『武久浜墳墓群』 2002年
- 4 下関市教育委員会 『武久西原遺跡』 1995年
- 5 下関市教育委員会 『伊倉遺跡』 2001年
- 6 水島稔夫編 『綾羅木川下流域の地域開発史』 下関市教育委員会 1990年

Ⅱ 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

都市計画街路幡生綾羅木線地方特定道路整備工事に先立ち、山口県教育委員会は、平成14年12月に埋蔵文化財の有無などを確認するため、事前の試掘調査をおこなった。その結果、遺構の埋存が確認された道路拡幅予定地については、関係機関と協議を行い、発掘調査を行うことになった。

調査は、山口県下関土木建築事務所の委託を受けて、財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センターが実施することになった。なお、遺構は現地表面下2mを超える深い位置に所在しており、事前に土壁崩落防止のために鋼矢板で調査区周囲を取り囲むなどの十分な安全対策を山口県下関土木建築事務所側で講じた後、山口県埋蔵文化財センターが、現場での発掘調査に当たることが事前協議で確認された。

2 調査の経過と概要

平成15年10月上旬、発掘調査を開始するにあたって、山口県下関土木建築事務所との間で、調査日程・方法について事前協議を行った。その結果、調査対象区域が道路に沿っており、営業店の出入通路の必要性や安全対策として鋼矢板を打つ機械の作業スペース確保などのために、細切れに5地区に区画して調査に当たらざるをえないことになった。東側から西側に向かって、1地区、2地区、3地区、4地区、5地区と呼ぶことにした(第2図)。このうち、1、3地区については、面積も狭く、本格的に鋼矢板を周囲に打つ作業は行わず、重機により安全な法面を設けて遺構面まで掘り下げた後、検出された遺構の掘り込みと実測・記録を調査員により迅速に行うことにした。2地区、4地区、5地区については、土壁崩落防止のために鋼矢板で調査区周囲を取り囲むなどの十分な安全対策を事前に講じた後、地下での発掘調査に当たることになった。なお、こうした矢板工法により土壁崩落防止の安全対策を講じた後、地下深く掘り下げて本格的発掘調査を実施するのは、山口県内では最初の事例となった。

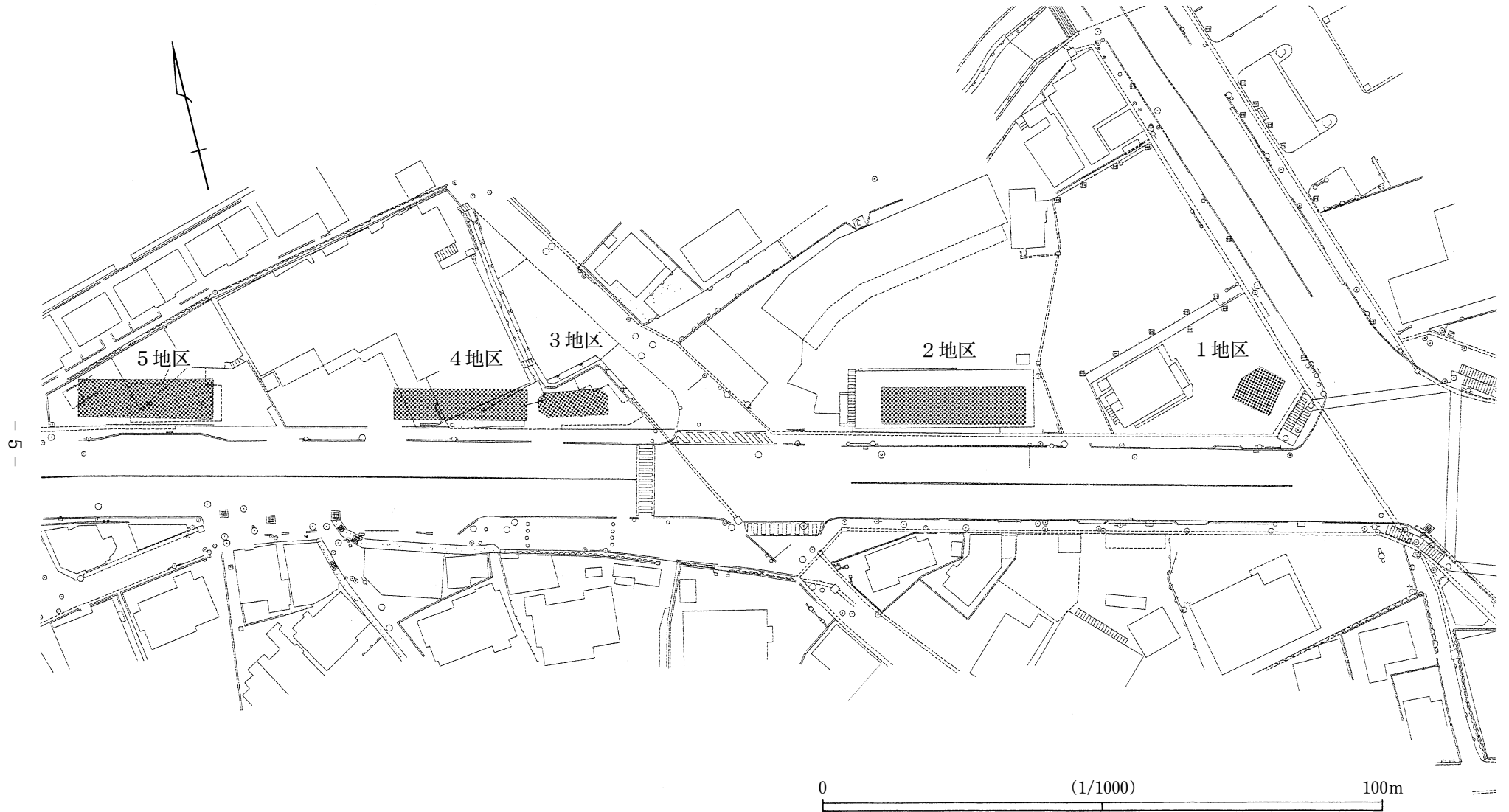
10月21日、まず1地区について、重機で埋め立て用の瓦礫の客土を取り除いて、地下約2.5mの灰オリーブ色粘質土面まで掘り下げて遺構(柱穴)を確認した。遺構の掘り込み後、図面実測、写真記録を行った。同日、4地区の遺構面の確認と安全対策の鋼矢板を打つ深さを確認するため、重機による試掘調査を実施した。10月24日には5地区についても4地区と同様な試掘調査を行った。この結果、2地区を含めて、4・5地区とも現地表面下約220~250cmの地下に遺構面が広がることが予測され、安全対策のため調査区を鋼矢板で取り囲む工事が進められることとなった。

10月30日、3地区について、重機で瓦礫を多く含む埋め立て用客土を取り除き、地下約2.5mの灰オリーブ色粘質土面まで掘り下げ、遺構(柱穴)を検出した。遺構の掘り込み後、図面実測、写真記録を行った。

11月上旬から中旬にかけて、2、4、5地区の調査区



重機による表工除去作業



第2図 調査区設定図

周囲に安全対策の鋼矢板を打ち込む工事が専門業者によって行われた。その後、11月17日から、5地区を手始めに、鋼矢板で囲まれた調査区内の表土を重機で取り除いて遺構面を検出する作業と鋼矢板を突っ張って支える鉄鋼材（切り梁・腹おこし）を設置する作業が併行して進められた。地下深く狭い調査区内で、安全対策に最大の配慮を行いながら、遺構面まで掘り下げる手順となるため、オープンスペースでの調査に比べて、効率的にも調査精度の面でもやむを得ず制約を受ける点が多々あり、調査に困難をきたした。続いて4地区、2地区の順で同様な表土除去と安全対策工事が併行して進められ、12月1日にはこれら一連の準備作業を一通り終えた。

一方、重機による表土除去作業が終わった地区について、11月25日から順次、発掘作業員の人力による遺構検出と掘り込み作業を開始した。なお、地下深く狭い空間での作業となるため、調査現場に入るに当たっては、酸素欠乏症や硫化水素などの有毒ガス中毒症の防止対策として、酸素・硫化水素濃度の測定を必ず実施するとともに、



発掘作業風景

、随時送風機による換気を行って、安全面での作業環境の整備に留意した。また、掘り込みによって出た廃土は、調査区の端に小型クレーンを設置して地下から引き上げて調査区外に搬出することにした。湧水については、排水ポンプで汲み上げ、沈砂池を設けてろ過した水を排水路に流した。

西側の海岸により近く標高の最も低い5地区では、地表面下約2.2mにある標高5.5m前後の灰オリーブ色粘質土・黄褐色粘質土の地山面に柱穴・土坑・掘立柱建物跡などの遺構が確認されたが、全体的に遺構の密度は希薄で、遺物も数少なかった。中間の4地区も5地区と同様の状況が確認された。

一方、2地区では、地表面下約2.5mの南西隅で一括廃棄と見られる弥生時代終末期から古墳時代初頭期の土器溜まりが黒褐色粘質土層で検出され、今回の調査の重要な成果となった。



掘り込み作業

12月上旬から中旬にかけて、5、4、2地区の遺構掘り込みを行うとともに、この間、測量基準となる国土座標杭の設置を業者に委託して実施した。掘り込みの進捗状況に合わせて各地区の遺構実測・写真記録を行った。

12月10日には、調査区の立地環境と調査区全景を収める空中写真撮影を業者に委託して実施した。各地区の完掘状況のグリッド実測を済ませ、山口県下関土木建築事務所担当者への発掘調査終了の現地立会を経て、12月24日に、現地での発掘調査業務をすべて完了した。

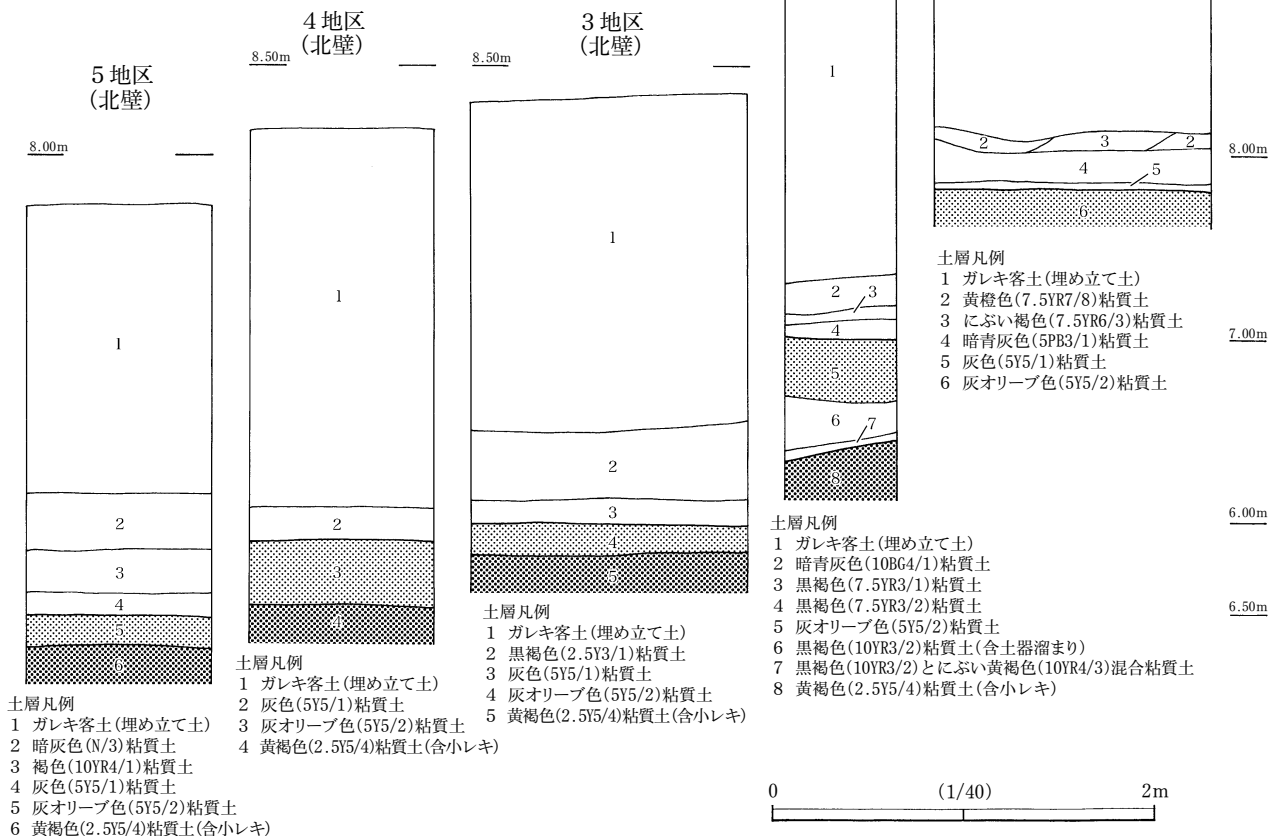
その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元と実測、写真撮影を行い、この報告書を刊行するに至った。

Ⅲ 遺 構

1 調査区の概要

(1) 基本層序 (第3図)

矢板を打たず、法面を設けて調査に当たった1、3地区については、遺構面の調査面積が限られ、安全上可能な範囲で実測できた土層断面図を示す。鋼矢板を打って側面地盤の崩落を防いだ2、4、5地区については安全工法上、土層断面を残して、実測する調査方法を取ることができなかつたため、試掘調査や本調査で確認できた範囲で、基本層序を示す(第3図)。これらによると、現地表面から2m前後は、埋め立て用の瓦礫などの客土で構成される。直下に暗青灰色などの粘質土層が見られ、旧水田(泥湿地)が広がっていたものと考えられる。聞き取り調査によれば、埋め立て以前は、水田・蓮田などが広がっていたという。その下に灰オリーブ色を基本とする安定した粘質土層が約15~30cmの厚さに堆積している。2地区調査の所見からは、この灰オリーブ色粘質土中には、ごく少量ながら古代・中世の遺物を含む。その下層に小礫を含む黄褐色粘質土層(基盤地山)がある。2地区南西隅では、この灰オリーブ粘質土層と黄褐色粘質土層の間に挟まった黒褐色粘質土層中に、一括廃棄とみられる



第3図 基本層序図

大量の土器溜まりが検出された。

遺構面のレベルは東から西にかけてそれぞれ1地区7.8m、2地区6.4～7.2m、3地区5.9～6.0m、4地区5.6～6.1m、5地区5.0～5.6mとなり、瓦礫などの客土を除いた旧地表面（自然地形の地山面）は、海岸線に向けて東から西に緩やかに傾斜していたことが想定される。

（2）遺構

5つの調査区全体で検出された遺構は、土器溜まり1箇所、掘立柱建物跡2棟、土坑3基、溝1条、柱穴・杭穴126個である。遺構や遺物の状況からみて、遺構面の標高が高い2地区周辺を中心に、弥生時代終末期から古墳時代初頭期のいわゆる庄内式併行期の集落跡が広がっていたものと推定され、標高が低くなる4・5地区周辺は、この時期の遺構は確認されていない。一方、遺物が乏しく、時期決定の資料に乏しいが、灰オリーブ色粘質土層面で確認された掘立柱建物跡や柱穴などの遺構は、層序的にみて古代から中世のものと見られる。なお、条里制に直接関連すると見られる遺構は、今回の調査範囲では確認されなかった。

2 1地区（第4図、図版3）

1地区は、道路の北側に面する調査対象となった5箇所の地区の一番東側に位置する。地下の調査遺構面は、重機による掘削検出のため、平面形が長さ約2.5m、幅約2mの不整形を呈する。現地表面下2.7m、標高7.8mの灰オリーブ色粘質土層面上に柱穴1個（直径21cm、深さ16cm）が検出された。古代～中世の時期と見られる。さらに下層面の掘り下げ確認は、側壁崩落の危険があるため断念した。

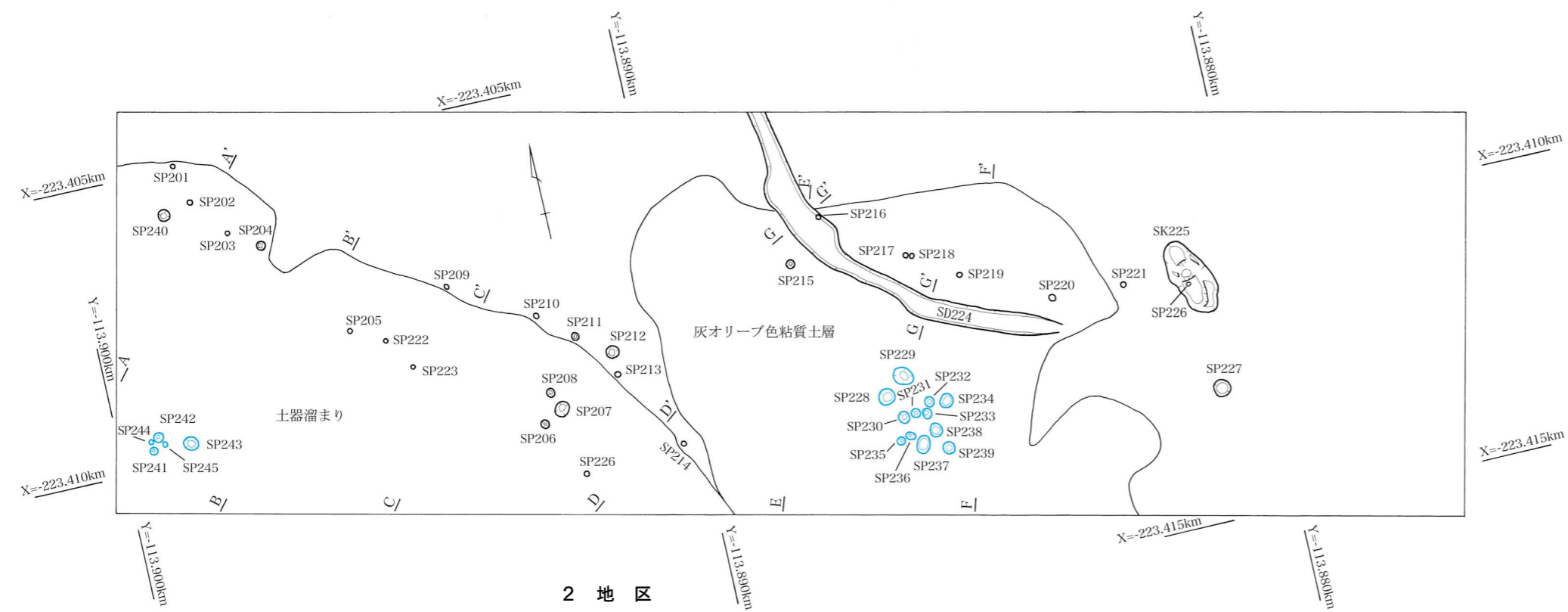
3 2地区（第4図、図版7～12）

2地区は、長さ23.5m、幅7.0mの東西方向の長方形を呈する。遺構が検出された自然地形の地山面は、現地表面下2.7～3.0mの深さの地点で確認され、標高7.2mの東側から標高6.4mの西側にかけて緩やかに傾斜している。また、調査区南西隅側では、黄褐色粘質土の地山が緩やかに南西方向に傾斜して落ち込んでおり（南西隅の黄褐色粘質土地山標高6.4m）、その直上面に弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器を大量に含む黒褐色粘質土が堆積している。この黒褐色粘質土の上には、灰オリーブ色粘質土の堆積があり、ごく少量ながら古代・中世の須恵器・土師器・滑石製品などを含んでいる。

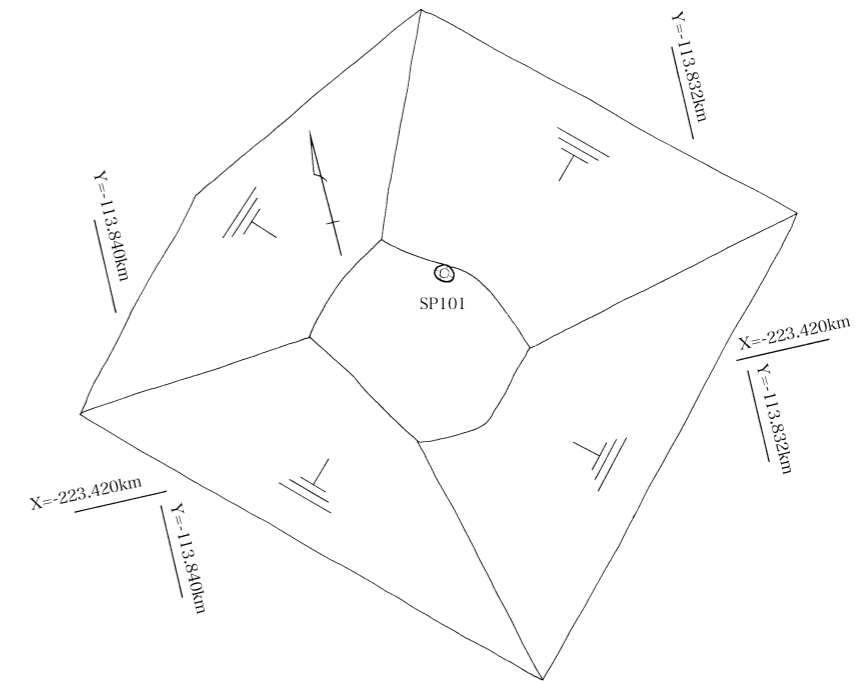
確認された遺構は、土器溜まり1箇所、土坑1基、溝1条、柱穴25個、杭穴18個である。

（1）土器溜まり（第5～6図、図版8～12）

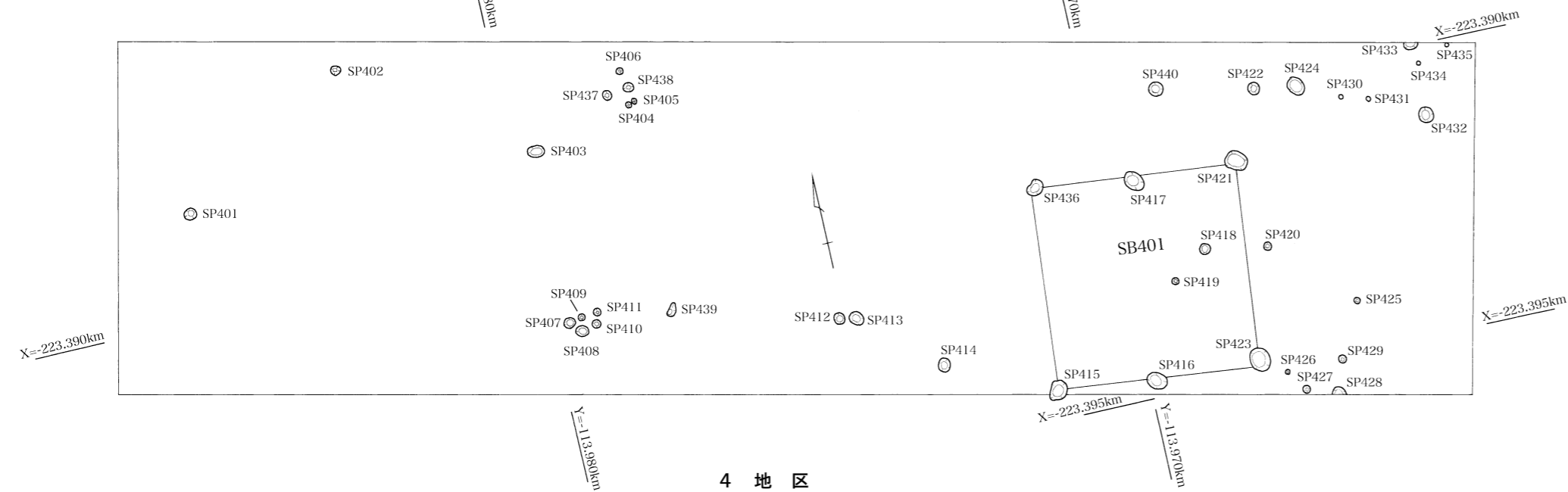
2地区南西隅には、長さ11m、幅6mの三角形状を呈する範囲で黒褐色粘質土層が広がり、大量の土器が含まれている。トレンチA・B・C・Dの土層観察によれば、厚さは10～20cmで、層序的に時期を画するような明確な分層は確認されず、遺物は比較的上層10cm程度に堆積し、南側の範囲にいくつものブロック状をなして集積している。それぞれの遺物破片は、原形を留める大きな破片や磨滅せず近隣の破片と接合可能なものが多く、廃棄された状態をそのまま留めたものが多いことがうかがわれる。また、南西方向に緩やかに傾斜しながら落ち込む自然地山面（黄褐色粘質土）の上に堆積した黒褐色粘質土層の上層に傾斜線に沿うような状態でまとまって遺物が出土している。以上から、これらの遺物は、ほぼ同時期に傾斜線に沿うような形で北東方向から南西方向に一括廃棄された土器と考え



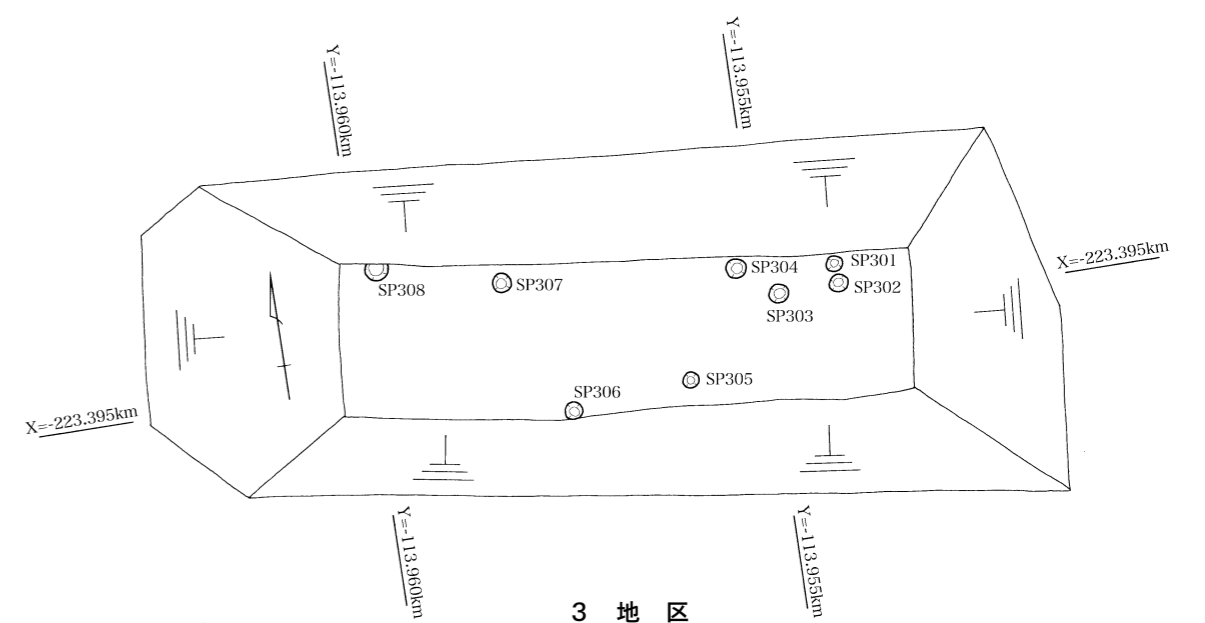
2 地区



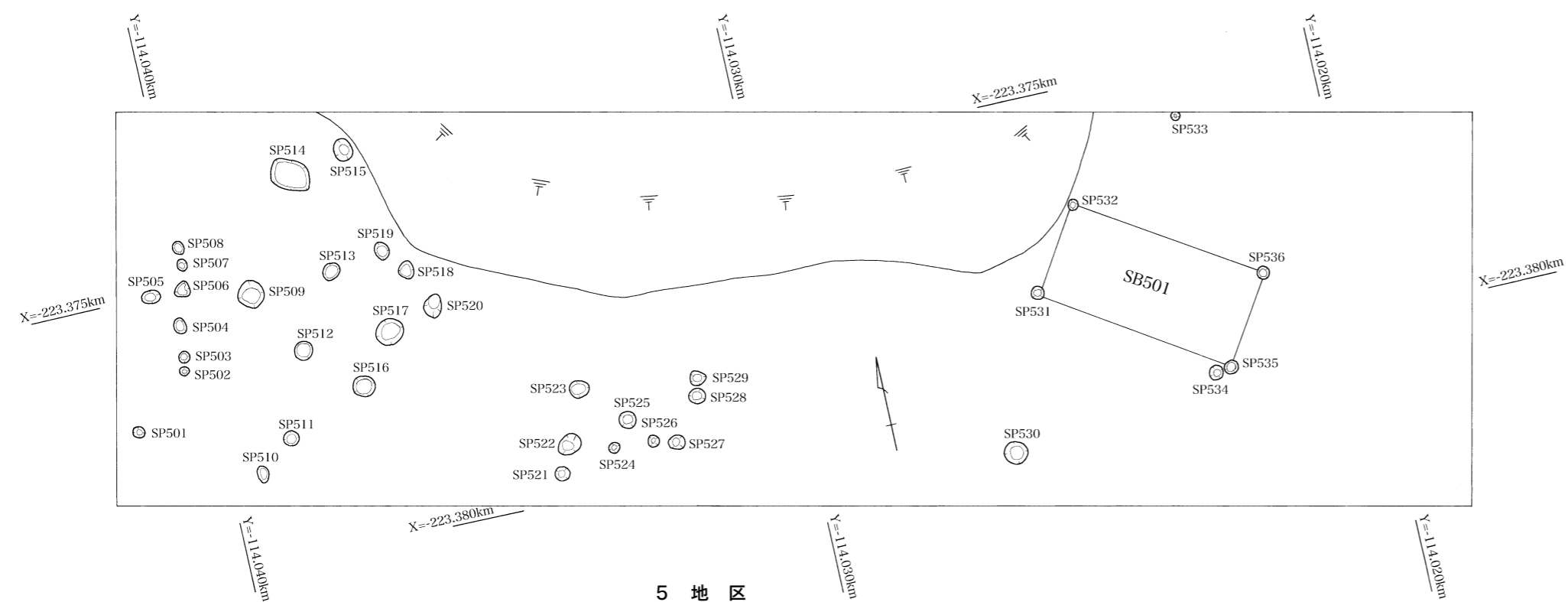
1 地区



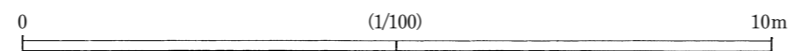
4 地区



3 地区



5 地区



第4図 遺構配置図

遺構略号凡例

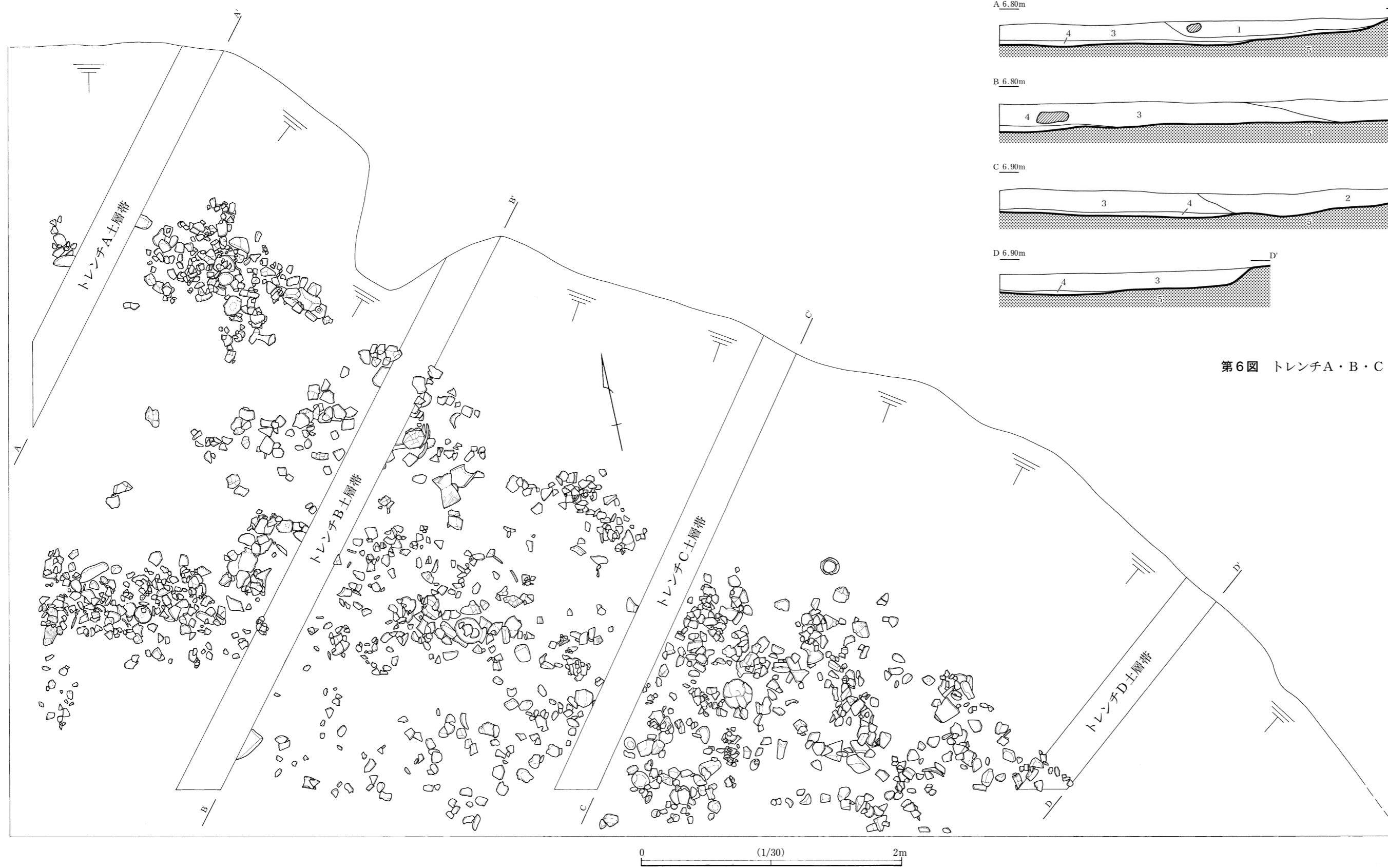
SB：建物跡

SK：土坑

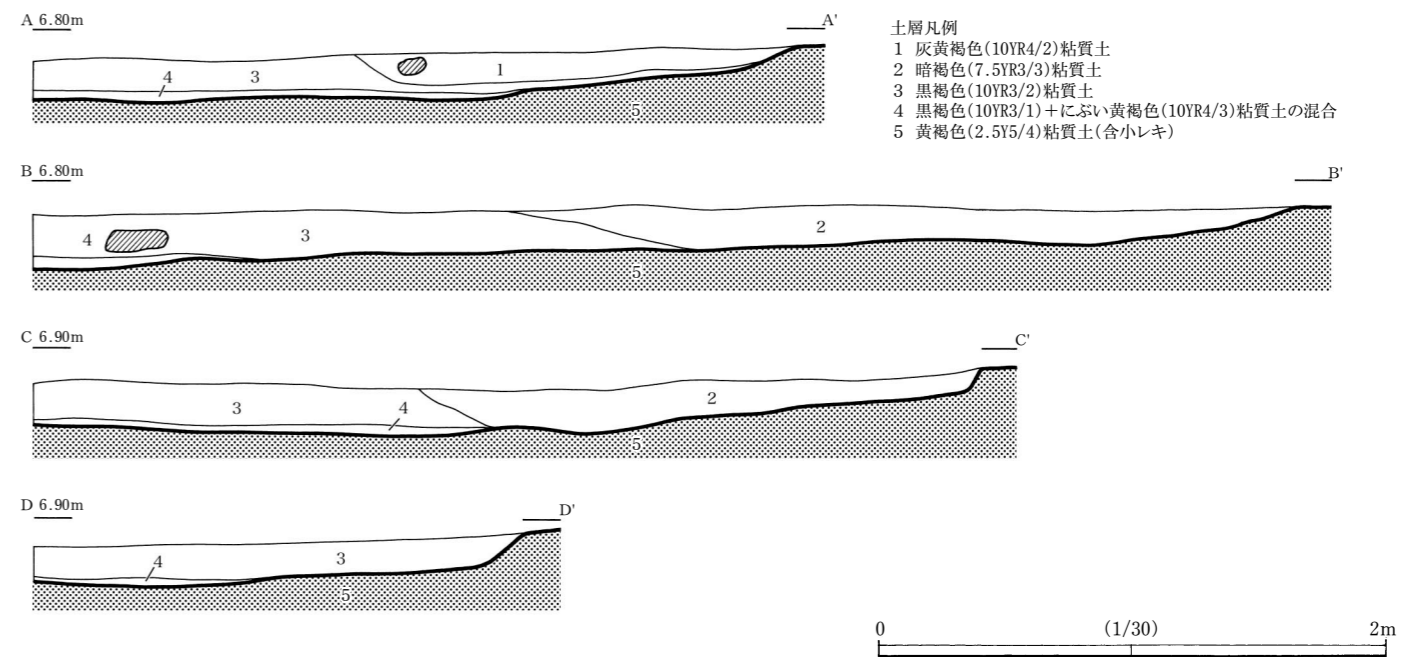
SD：溝

SP：柱穴・杭穴

※青色は、下層の遺構

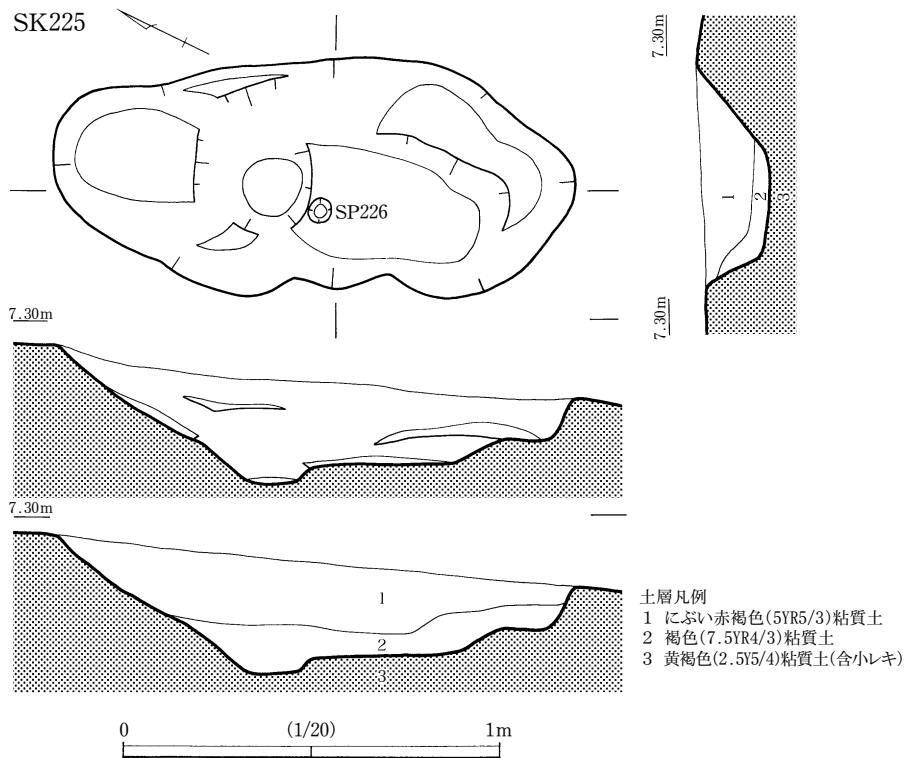


第5図 2地区南西隅土器溜まりの出土状況実測図



第6図 トレンチA・B・C・D土層断面図

るのが妥当と判断する。出土土器の器種としては、甕（1～61）が多くを占め、壺（62～95）、高杯（96～129）、器台（130～138）、鉢（139～151）、ミニチュア土器（152～153）などがある。高杯、器台などの出土点数と割合が高く、近隣での祭祀などに使用された後、これらの遺物はまとめて廃棄されたものである可能性が高いと考えられる。



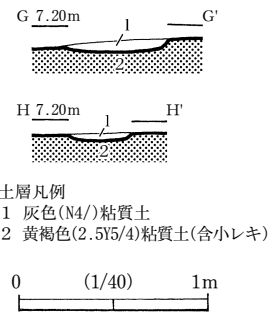
第7図 土坑(SK225)実測図

(2) 土坑(第7図、図版7-4)

SK225(第7図、図版7-4) 2地区東側の中央部に位置する。楕円形を呈する。規模は、長さ138cm、幅60cm、深さ28cm。中央部北寄りがやや深くなっている。にぶい赤褐色の埋土中から遺物は出土していないため、時期や性格は不明である。

(3) 溝(第8図、図版7-5)

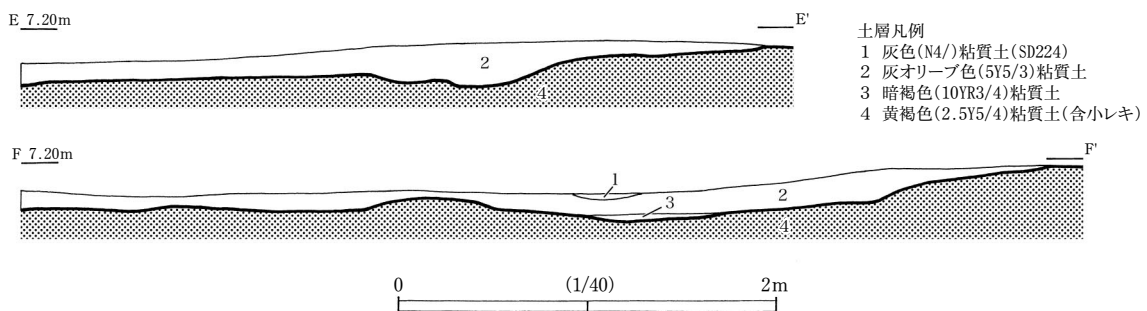
SD224(第8図、図版7-5) 2地区東側中央部から北側中央部調査区外にかけて走る溝である。上面が削平されて底部しか残っていないが、長さ710cm、現存最大幅56cm、深さ8cmである。時期を判断する遺物の出土はないが、下層の遺構とは異なる灰色粘質の埋土や旧水田直下層面に位置することなどから、近世以降の溝と考えられる。



第8図 溝(SD224)土層断面図

(4) 灰オリーブ色粘質土層(第9図)

2地区の中央部付近に灰オリーブ色粘質土層が広がる。層序的には、風化礫を含む黄褐色粘質土の自然地盤(地山)の上に堆積して形成された層で、2地区南西隅の土器溜まりが見つかった黒褐色粘質土の上層に位置する。2地区南西隅では、土器溜まりを検出するため、黒褐色粘質土層の上層にあ



第9図 灰オリーブ色粘質土層の土層断面図

るこの灰オリーブ色粘質土はほとんど遺物を含まない状況であったことから、重機による表土除去の際に取り除いた。中央部付近では、SD224が検出されたことなどから、黄褐色粘質土の地山面の上に灰オリーブ色粘質土を一部厚めに残した。土層断面（第9図）を確認した後、人力で掘り込んだ。厚さは8～24cm。出土遺物のごくわずかではあるが、須恵器（154～158）、土師器（159～161）、滑石製品（163）など古代から中世にかけての時代のものを含む。層序と遺物の点から、灰オリーブ色粘質土層は、土器溜まりが検出された黒褐色粘質土層の上に武久川によって運ばれた粘質土が自然堆積して形成された古代以降の時期の層であると考えられる。

4 3地区（第4図、図版4）

3地区は、重機により、安全上の法面傾斜をつけて掘削したため、長さ7.6m、幅2.0mの東西方向の長方形を呈する比較的狭い面積の調査区となった。現地表面下2.3m、標高5.9～6.0mの灰オリーブ色粘質土の遺構面上で、柱穴8個が検出された。直径18～28cm、深さ5～11cmの柱穴で、上面は削平を受けているため、残りは浅い。遺物を伴わず、明確な時期は不明である。

5 4地区（第4図、図版5）

4地区は、長さ24.0m、幅6.2mの東西方向の長方形を呈する。遺構が検出された自然地形の地山面は、現地表面下2.1～2.3mの深さの地点で確認され、標高6.1mの東側から標高5.6mの西側にかけて緩やかに傾斜している。

確認された遺構は、掘立柱建物跡1棟、柱穴30個、杭穴10個である。

SB401（第10図、図版5－5） 4地区東側の南寄りに位置する。規模は2間×1間で、桁行3.62（1.72・1.90）m、梁行3.54m。床面積12.81㎡。棟方向はN85°W。柱穴の現存規模は、直径21～42cm、深さ14～34cmで、上部は削平されている。柱穴出土遺物や層序等から、古代～中世の時期の建物と見られる。

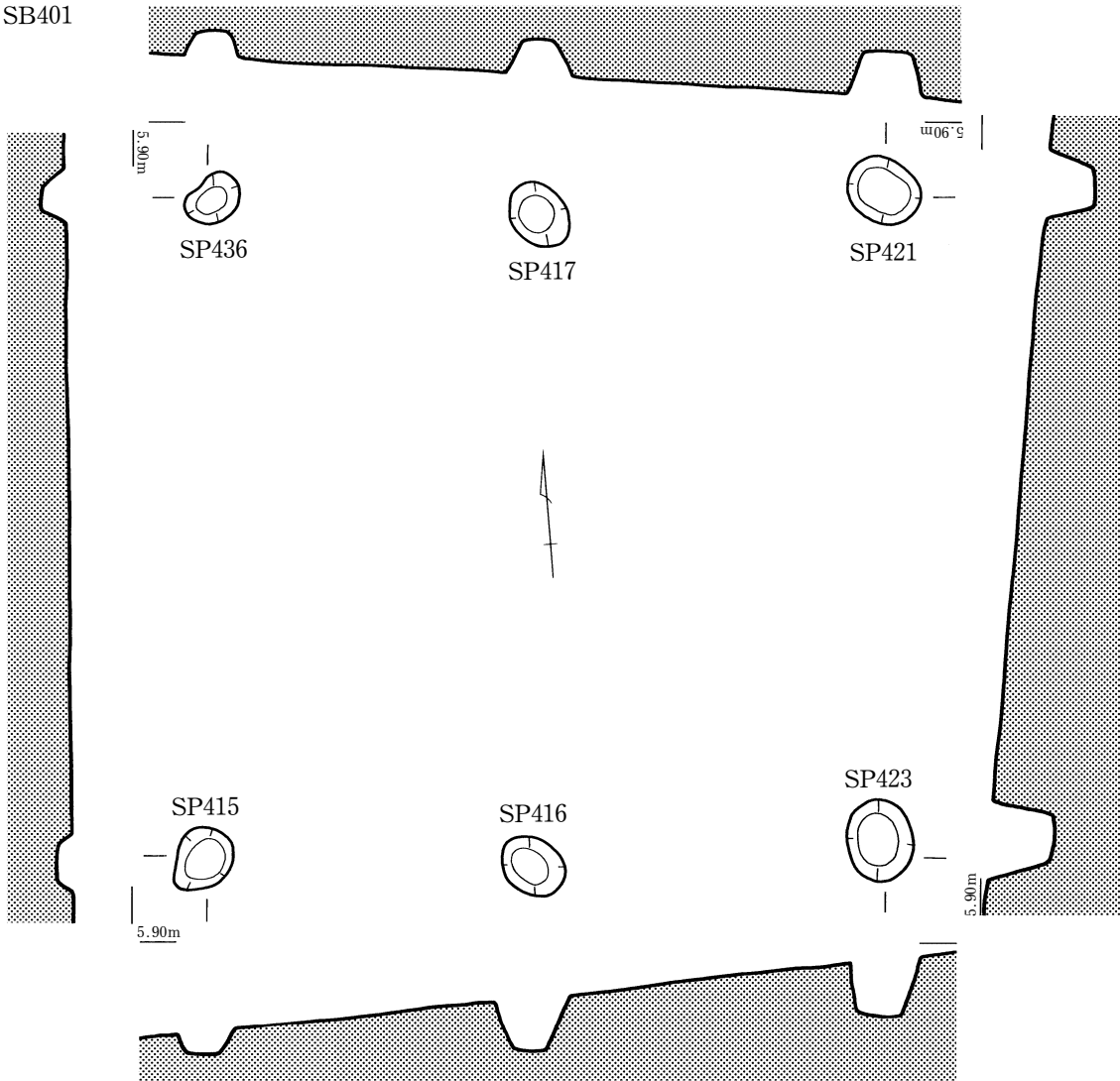
6 5地区（第4図、図版6）

5地区は、長さ23.7m、幅6.8mの東西方向の長方形を呈する。中央部北側は、建造物のコンクリート基礎工事で基礎地盤の損壊が大きく遺構がない点と、鋼矢板打ち込みの深さが十分確保しにくく安全上の観点から鋼矢板を支える土盛りとして残すこととし、遺構面までの掘削を見合わせた。遺構が検出された自然地形の地山面は、現地表面下2.1～2.4mの深さの地点で確認され、標高5.6mの東側から標高5.0mの西側にかけて緩やかに傾斜している。

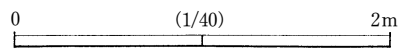
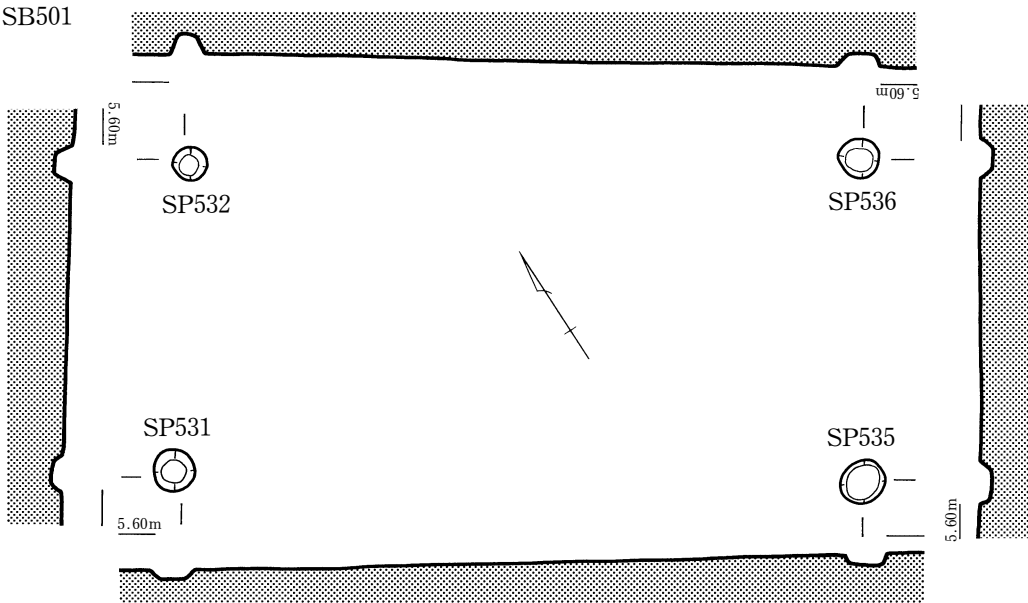
確認された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、柱穴35個である。

SB501（第10図、図版6－5） 5地区の調査区東側中央に位置する。規模は1間×1間で、桁行3.56m、梁行1.68m。床面積5.98㎡。棟方向はN57°W。柱穴の現存規模は、直径13～24cm、深さ4～8cmで、上位を削平されている。小屋程度の建物と見られる。柱穴に出土遺物を伴わないため、建物の時期は不明である。

SB401



SB501



第10図 掘立柱建物跡実測図

第1表 遺構一覧表

番号	地区	遺構番号	平面形	規模 (cm)			埋 土	出土遺物	備 考
				長さ (直径)	幅	深さ			
1	1	SP101	円	21		16		土師器片	
2	2	SP201	円	7		4	黒褐色(10YR3/2)粘質		杭穴
3	2	SP202	円	8		4	黒褐色(10YR3/2)粘質		杭穴
4	2	SP203	円	7		7	黒褐色(10YR3/2)粘質		杭穴
5	2	SP204	円	12		5	黒褐色(10YR3/2)粘質		
6	2	SP205	円	5		5	黒褐色(10YR3/2)粘質		杭穴
7	2	SP206	円	11		7	黒褐色(10YR2/2)粘質		
8	2	SP207	楕円	27	22	7	黒褐色(10YR2/2)粘質		
9	2	SP208	円	11		10	黒褐色(10YR2/2)粘質		
10	2	SP209	円	9		6	黒褐色(10YR3/2)粘質		
11	2	SP210	楕円	4	8	5	黒褐色(10YR2/2)粘質		杭穴
12	2	SP211	楕円	12	9	7	オリーブ灰色(10Y4/2)粘質		
13	2	SP212	円	19		10	黒褐色(10YR2/2)粘質		
14	2	SP213	円	6		10	黒褐色(10YR2/2)粘質		杭穴
15	2	SP214	楕円	9	7	3	黒褐色(10YR2/2)粘質		杭穴
16	2	SP215	円	13		3	黒褐色(10YR3/2)粘質		杭残存
17	2	SP216	円	8			黒褐色(10YR3/2)粘質		杭残存
18	2	SP217	円	9			黒褐色(10YR3/2)粘質		杭残存
19	2	SP218	円	9			黒褐色(10YR3/2)粘質		杭残存
20	2	SP219	円	7			黒褐色(10YR3/2)粘質		杭残存
21	2	SP220	円	8			黒褐色(10YR3/2)粘質		杭残存
22	2	SP221	円	9			黒褐色(10YR3/2)粘質		杭残存
23	2	SP222	円	7		2	黒褐色(10YR3/2)粘質		杭穴
24	2	SP223	円	6		3	黒褐色(10YR3/2)粘質		杭穴
25	2	SD224		710	56	8	灰色(N4/)粘質		
26	2	SK225	楕円	138	60	28	にぶい赤褐色(5YR5/3)粘質 褐色(7.5YR4/3)粘質		
27	2	SP226	円	28		10	黒褐色(10YR3/2)粘質		杭穴
28	2	SP227	円	26		3	黒褐色(10YR3/2)粘質		
29	2	SP228	円	28		10	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
30	2	SP229	楕円	36	28	13	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
31	2	SP230	円	19		6	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
32	2	SP231	円	15		10	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
33	2	SP232	円	16		17	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
34	2	SP233	円	18		15	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
35	2	SP234	楕円	26	19	6	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
36	2	SP235	円	11		6	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
37	2	SP236	楕円	14	12	8	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
38	2	SP237	楕円	30	22	10	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
39	2	SP238	円	20		7	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
40	2	SP239	円	20		6	灰黄褐色(10YR4/2)粘質		
41	2	SP240	円	6		2	黒褐色粘質(10YR3/2)粘質		
42	2	SP241	円	12		4	黒褐色粘質(10YR2/2)粘質		
43	2	SP242	円	16		4	黒褐色粘質(10YR2/2)粘質		
44	2	SP243	円	22		7	黒褐色粘質(10YR2/2)粘質		
45	2	SP244	円	8		6	黒褐色粘質(10YR2/2)粘質		
46	2	SP245	円	8		4	黒褐色粘質(10YR2/2)粘質		
47	3	SP301	円	20		6			
48	3	SP302	円	22		11			
49	3	SP303	円	22		10			
50	3	SP304	円	24		10			

番号	地区	遺構番号	平面形	規模 (cm)			埋 土	出土遺物	備 考
				長さ (直径)	幅	深さ			
51	3	SP305	円	18		6			
52	3	SP306	円	22		5			
53	3	SP307	円	21		10			
54	3	SP308	円	28		10			
55	4	SP401	円	19		8	オリーブ灰色(2.5GY6/1)砂礫		
56	4	SP402	楕円	20	16	6	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
57	4	SP403	楕円	28	20	4	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
58	4	SP404	楕円	10	7	3	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		杭穴
59	4	SP405	円	5		3	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		杭穴
60	4	SP406	円	8		3	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		杭穴
61	4	SP407	円	16		4	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
62	4	SP408	楕円	21	18	5	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
63	4	SP409	円	10		3	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
64	4	SP410	円	14		4	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
65	4	SP411	円	11		3	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
66	4	SP412	円	20		5	黒褐色(7.5YR3/1)強粘質		
67	4	SP413	楕円	23	20	4	黒褐色(7.5YR3/1)強粘質		
68	4	SP414	楕円	20	17	3	黄灰色(2.5Y5/1)粘質		
69	4	SP415	楕円	37	31	15	黒褐色(7.5YR3/1)強粘質		SB401の柱穴(1/4残存)
70	4	SP416	楕円	36	29	26	黒褐色(7.5YR3/1)強粘質		SB401の柱穴
71	4	SP417	楕円	34	28	20	黒褐色(7.5YR3/1)粘質	土器片	SB401の柱穴
72	4	SP418	円	18		6	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
73	4	SP419	円	12		4	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
74	4	SP420	円	13		5	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
75	4	SP421	楕円	37	30	27	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		SB401の柱穴
76	4	SP422	円	15		7	灰黄褐色(10YR4/2)(礫含む)		詰め石
77	4	SP423	楕円	42	34	34	暗褐色(7.5YR3/3)粘質	土器片	SB401の柱穴、炭を含む
78	4	SP424	楕円	32	25	7	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		詰め石
79	4	SP425	円	9		5	灰黄褐色(10YR4/2)(礫含む)		杭穴
80	4	SP426	円	7		6	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		杭穴
81	4	SP427	円	11		10	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
82	4	SP428	推定円	推定24		10	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		1/2残存
83	4	SP429	円	9		5	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		杭穴
84	4	SP430	円	5					杭(径6cm)残存
85	4	SP431	円	6					杭(径6cm)残存
86	4	SP432	楕円	26	23	6	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
87	4	SP433	楕円	20	17	6	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
88	4	SP434	円	6					杭(径4cm)残存
89	4	SP435	円	6					杭(径5cm)残存
90	4	SP436	不整形	29	2	114	黒褐色(7.5YR3/1)粘質		SB401の柱穴
91	4	SP437	楕円	16	14	6	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
92	4	SP438	楕円	17	15	19	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
93	4	SP439	不整形	22	10	17			
94	4	SP440	円	22		7			
95	5	SP501	円	18		12	褐灰色(5YR5/1)強粘質		
96	5	SP502	楕円	17	13	6	褐灰色(5YR5/1)強粘質		
97	5	SP503	円	19		8	褐灰色(5YR5/1)強粘質		
98	5	SP504	楕円	32	24	12	褐灰色(5YR5/1)強粘質		
99	5	SP505	楕円	30	22	9	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
100	5	SP506	楕円	28	22	10	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		

番号	地区	遺構番号	平面形	規模 (cm)			埋 土	出土遺物	備 考
				長さ (直径)	幅	深さ			
101	5	SP507	楕円	20	16	9	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
102	5	SP508	円	22		10	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
103	5	SP509	円	45		13	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
104	5	SP510	楕円	28	20	8	褐灰色(5YR5/1)強粘質(礫含む)		
105	5	SP511	円	26		12	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
106	5	SP512	円	33		15	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
107	5	SP513	円	28		12	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
108	5	SK514	隅丸長方形	66	52	10	オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質(礫含む)		
109	5	SP515	円	36		15	褐灰色(5YR5/1)強粘質		
110	5	SP516	円	33		15	灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘質(礫含む)		
111	5	SP517	楕円	52	45	17	オリーブ黒色(5Y3/2)強粘質		
112	5	SP518	円	30		12	灰褐色(7.5YR4/2)強粘質		
113	5	SP519	楕円	32	23	20	オリーブ黒色(5Y3/2)強粘質		
114	5	SP520	楕円	47	26	33	暗黄灰色(2.5Y4/2)砂質(礫含む)		
115	5	SP521	円	22		20	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
116	5	SP522	楕円	36	23	5	褐灰色(5YR5/1)強粘質		
117	5	SP523	楕円	32	28	13	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		
118	5	SP524	楕円	20	16	5	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
119	5	SP525	円	24		9	灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘質(礫含む)		
120	5	SP526	円	15		13	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
121	5	SP527	楕円	28	22	10	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
122	5	SP528	円	26		13	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
123	5	SP529	楕円	28	23	12	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
124	5	SP530	円	38		15	黄褐色(10YR5/6)粘質 褐灰色(5YR5/1)強粘質		
125	5	SP531	円	21		5	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		SB501の柱穴
126	5	SP532	円	18		8	暗褐色(7.5YR3/3)粘質		SB501の柱穴
127	5	SP533	楕円	16	11	20	褐色(10YR4/4)粘質		
128	5	SP534	円	23		10	褐色(10YR4/4)粘質		
129	5	SP535	円	24		4	褐色(10YR4/4)粘質		SB501の柱穴
130	5	SP536	円	18		6	褐色(10YR4/4)粘質		SB501の柱穴

第2表 掘立柱建物跡一覧表

番号	地区	遺構番号	規模(間)	棟方向	柱 間		出土遺物	備 考
					桁 行	梁 行		
					建物の南西隅から(m)			
1	4	SB401	2×1	N85°W	3.62(1.72・1.90)			
2	5	SB501	1×1	N57°W	3.56			

IV 遺物

1 出土遺物の概要

今回の調査では、2地区南西隅の黒褐色粘質土層の土器溜まりからの一括出土土器が、主要な遺物である。2地区灰オリーブ色粘質土からは古代・中世の須恵器・土師器・石製品などが出土した。他の調査地区では、遺物の出土はごく少量で、遺構に伴うものはなく、図化掲載できるものはない。

2地区南西隅土器溜まりは、出土状況から、ほぼ同時期に一括廃棄されたものと考えられ、セット関係で捉えられる。弥生時代後期終末から古墳時代初頭に相当するいわゆる庄内式併行期の型式的特点をもった土器群の一括資料といえるものである。器種としては、甕・壺・高杯・器台・鉢・ミニチュア土器がある。中でも甕の占める割合が高く、個体数では5割以上を占める。高杯の割合も高い。器面調整では、内外面とも、ハケ調整を施したものが多い。タタキやケズリの痕跡が残る個体数は少ない。ミガキは高杯などに一部見られる。

外部からの直接搬入土器と見られるものはなく、在地系の土器が中心で、畿内系、九州系、山陰系土器の形態的特徴や製作技法の影響を受けて製作したと考えられるタイプの土器も含まれる。

なお、各遺物の法量や調整・特徴などについては、章末の遺物観察一覧表に一括して掲載した。

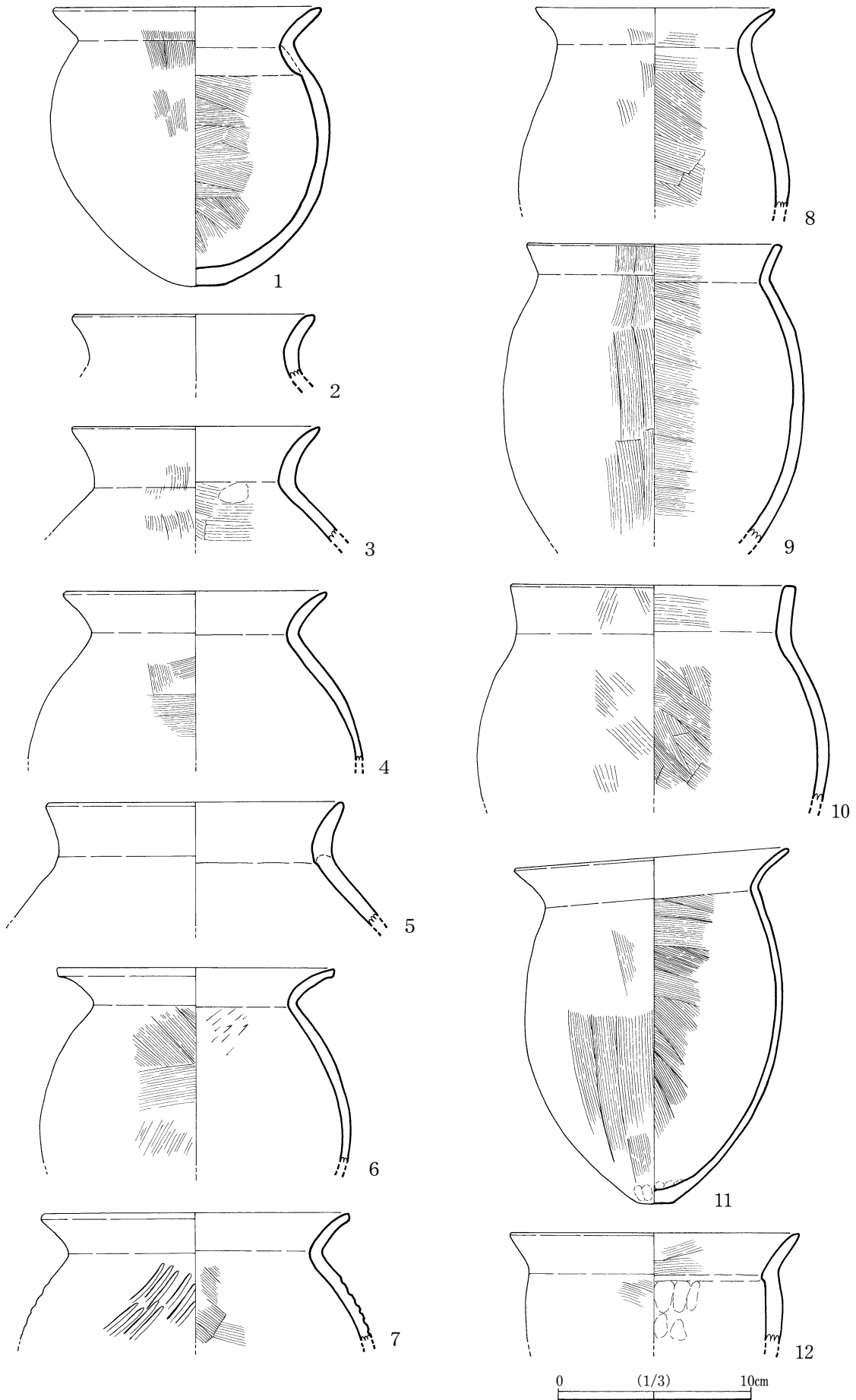
2 2地区南西隅土器溜まり出土遺物（第11～26図、図版13～24）

出土土器の器種分類にあたっては、『矢部遺跡』などの土器の分類を参照・基準にした。個体全体を復元できないものが多く、甕・壺については、口縁・頸部の形態・屈曲の度合いなどで判断に迷うもの、底部のみの破片で甕・壺・鉢の判断がつきにくいものもある。器形の各部位の角度・被熱状況・調整技法などの要素を総合して、一応、一つの器種に分類してあるが、他の器種に分類し得る土器もある点をことわっておきたい。

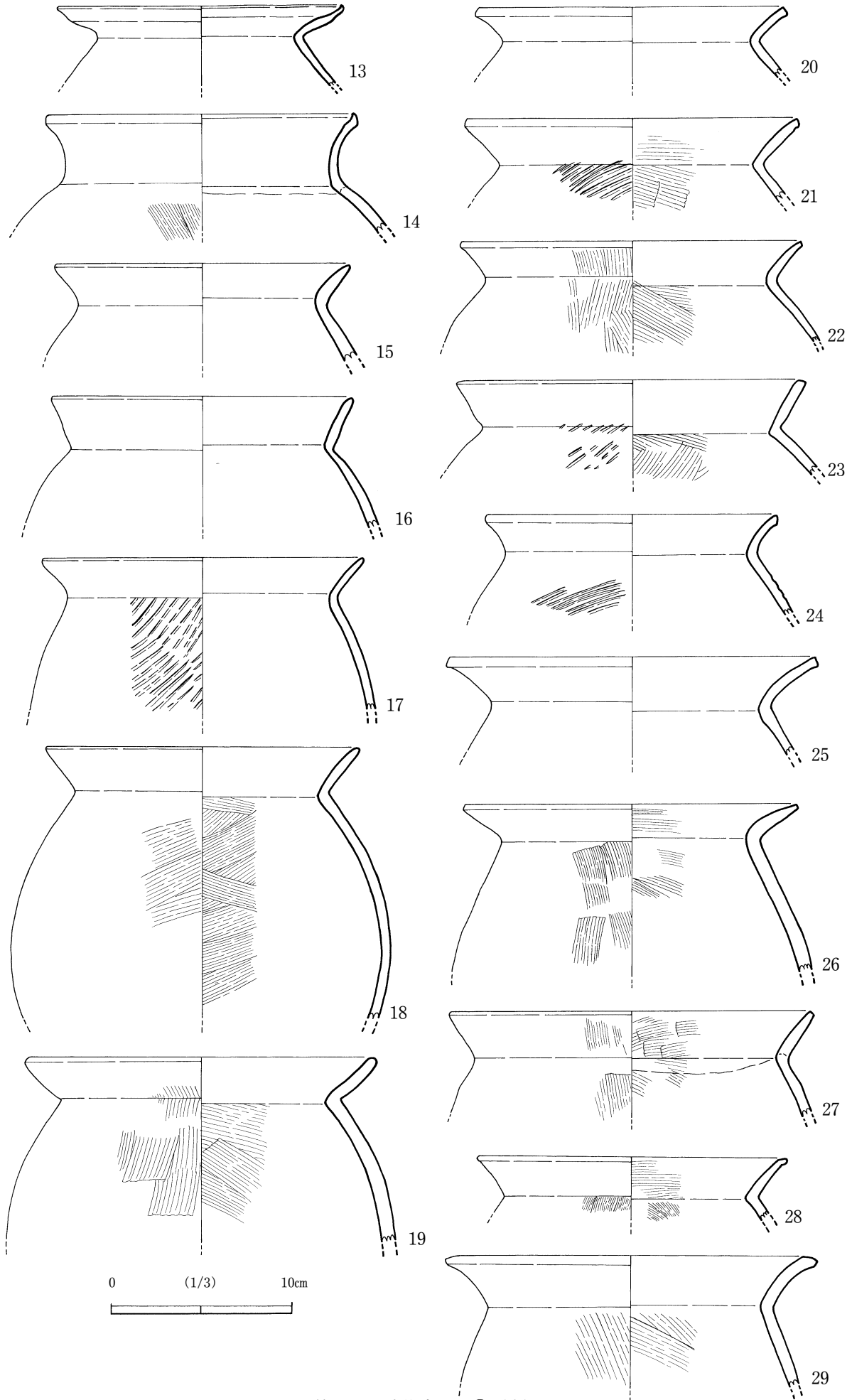
(1) 甕（第11～18図、図版13～17）

甕は、①大きさ（口径、胴径、器高）—小型・中型・大型、②全体形（球形、長胴形）、③口縁部形態、④底部形態の要素にしたがって、大まかに形態分類して掲載した。個体全体を復元できる資料は限られているので、大きさについては、口径によって便宜的に小型（直径15cm未満）、中型（直径15cm以上20cm未満）、大型（直径20cm以上）に分類した。次に、口縁部形態の特徴により、口縁端部の終わり方（丸く収める、面を持つ、はね上げるなど）、「く」の字状の屈曲の角度などの特徴を基準にした。さらに、全体形が球形に近いか長胴形かを判断して分類した。なお、底部から胴部にかけてのみの資料は一括し、平底と丸底にわけて掲載した。

1～12は、小型に分類した甕である。1～7は口径より胴径が大きく、口径より器高値が少し大きく全体の器形が球形に近いタイプである。1は口径13.8cm、胴径14.4cm、器高14.7cmで、球形に近い器形である。頸部で「く」の字状に屈曲して口縁部が長くまっすぐ伸び、端部は尖り気味に丸く収める。底径は2.2cmで丸底化の傾向が著しい。頸部内面には、胴部と口縁部の粘土帯接合痕がよく残る。内外面はハケ調整。器壁は5mmを超え厚い。2～5は1と同様に口縁端部を丸く収めるが、胴部はやや張



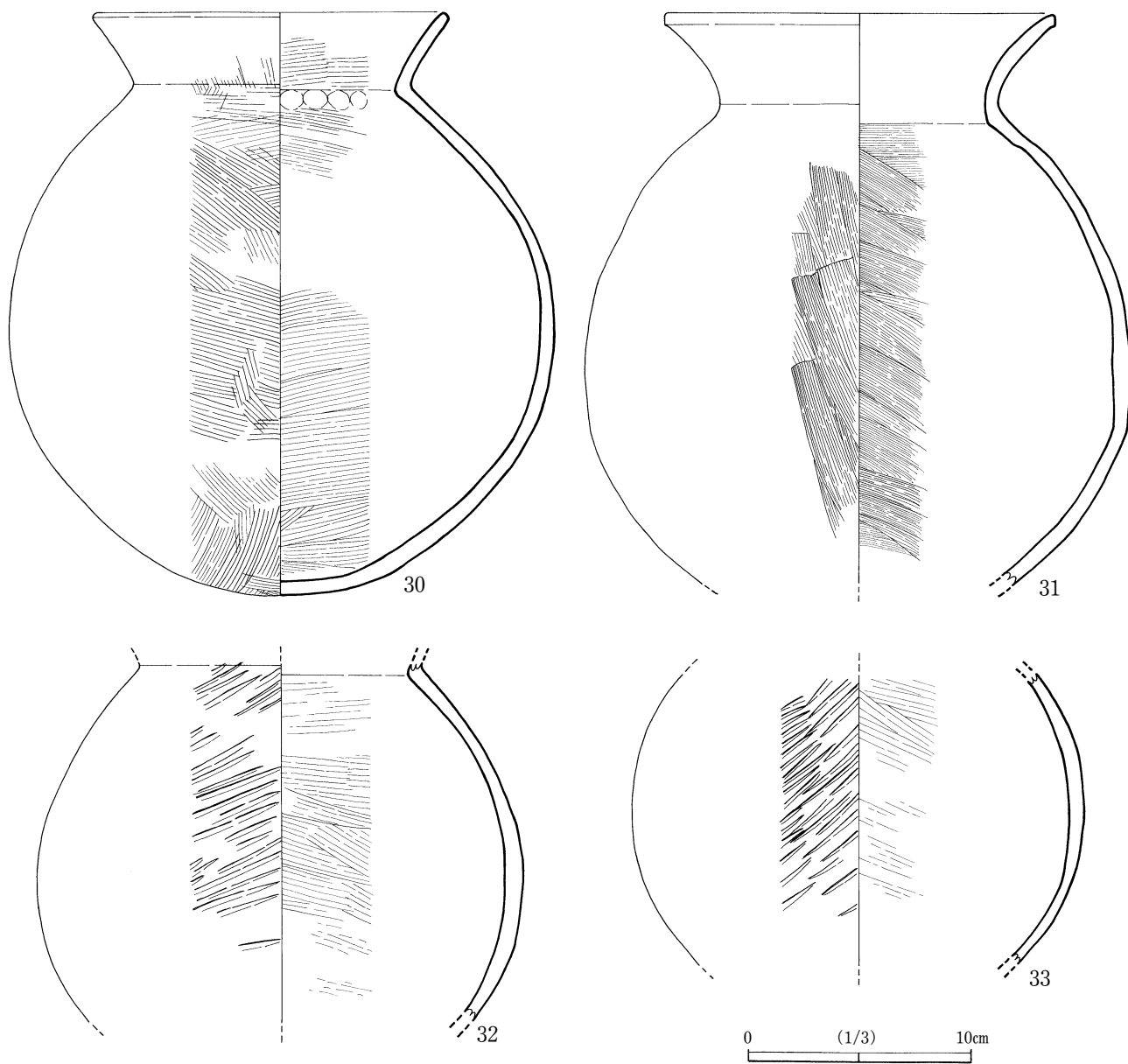
第11図 遺物実測図① (甕)



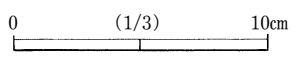
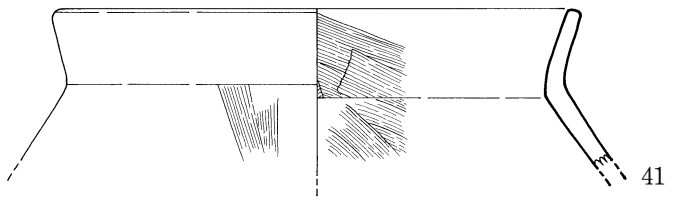
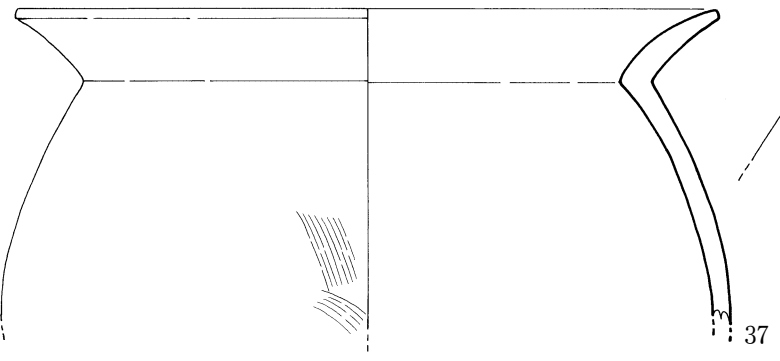
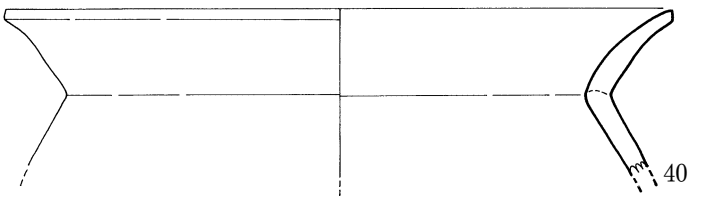
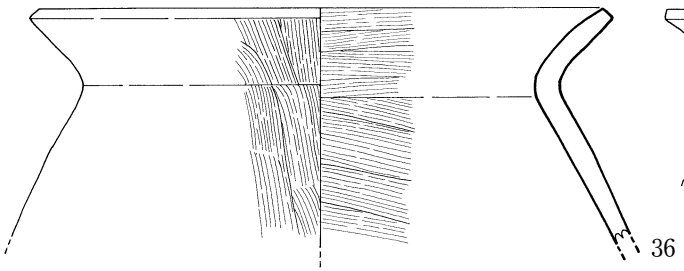
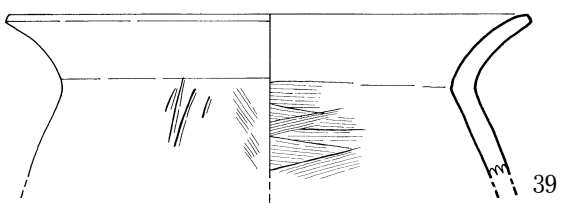
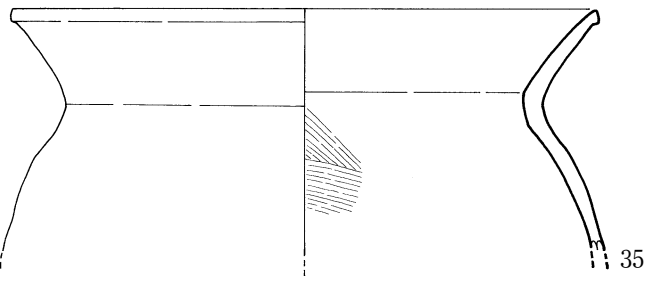
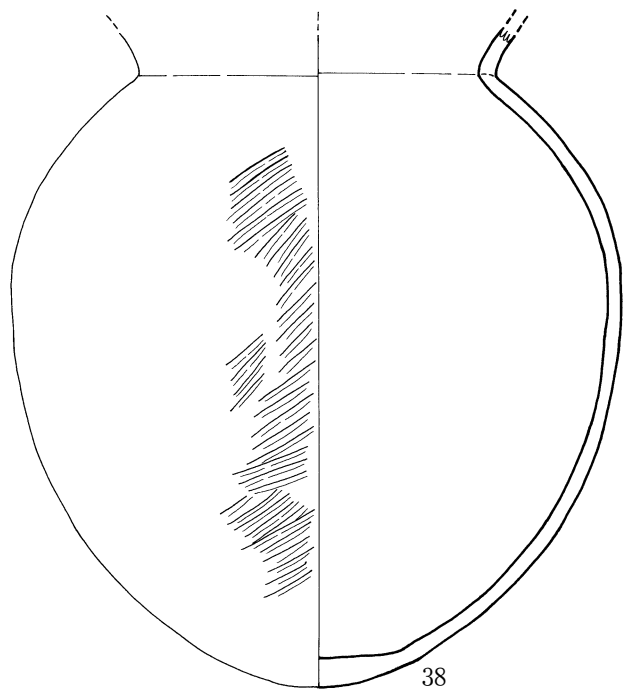
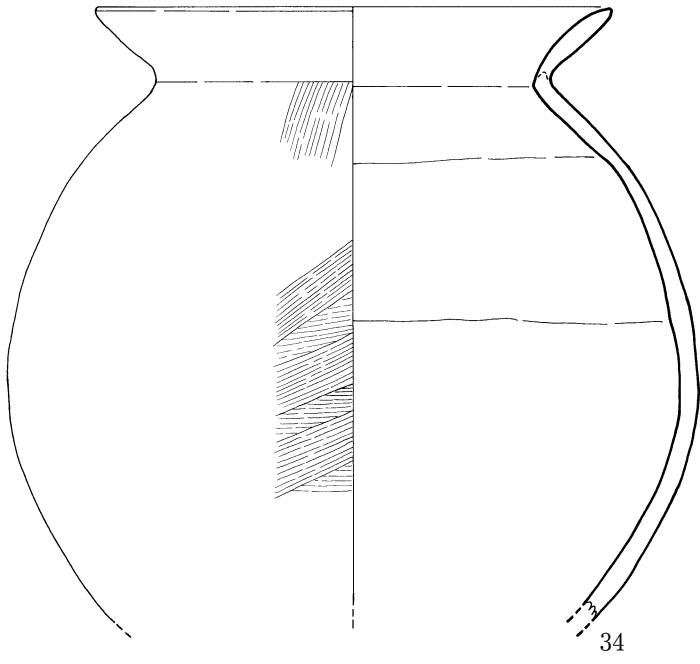
第12図 遺物実測図② (甕)

り気味である。器壁は5mmを超え厚い。6・7は口縁端部を丸く収めず、外側に稜の立つ面を持つ。6は、口縁端部がややね上げぎみで、胴部内面にケズリを施して器壁を薄くしてあり、畿内系土器の影響がうかがわれる。7は胴部外面に右上がりのタタキがある。

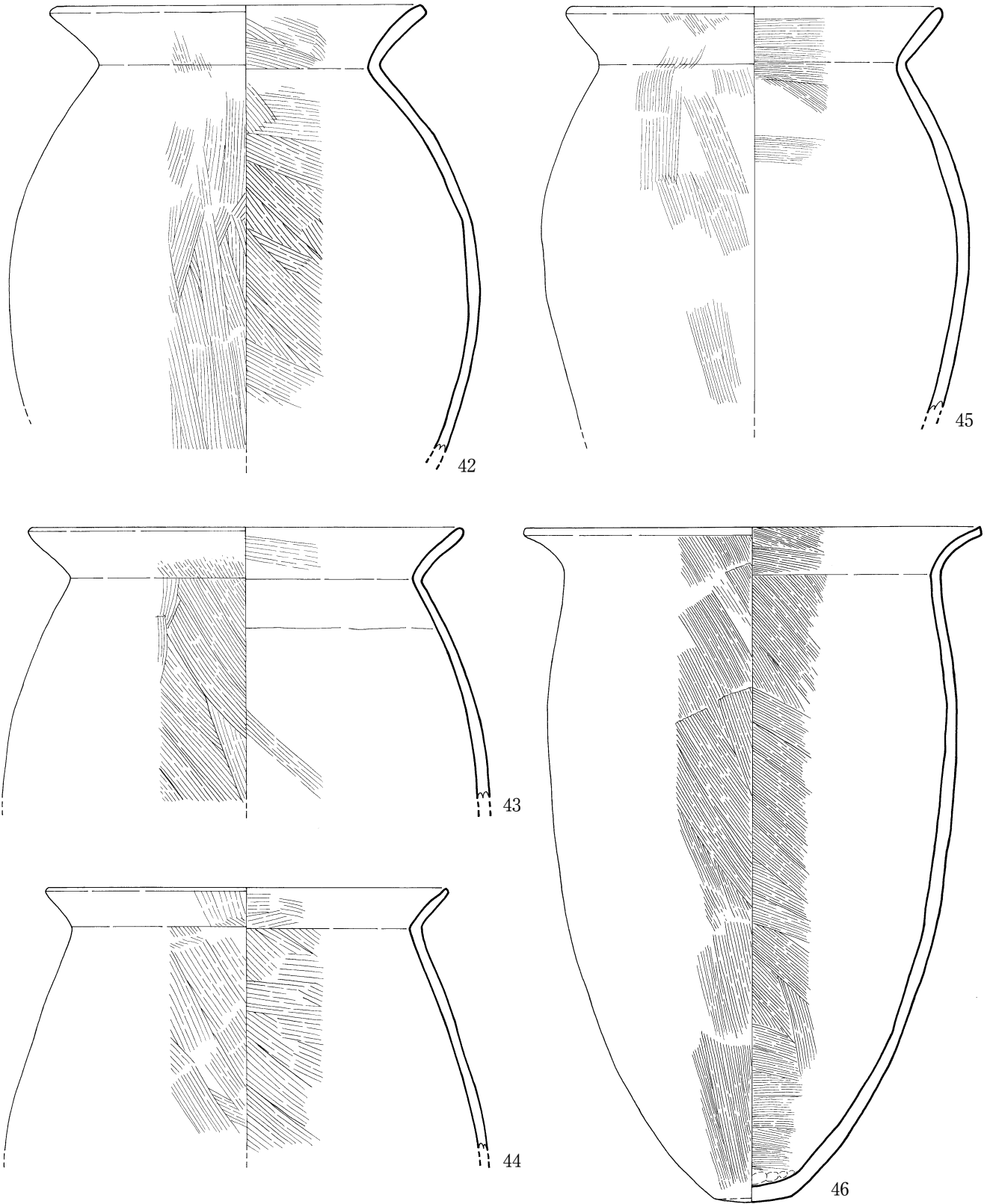
8～12は胴部が余り大きく張らず、口径より器高値が大きく全体の器形が長胴形タイプである。8は最大径が胴部下位にある。口縁端部は尖り気味に丸く収める。9は頸部で「く」の字状に明瞭に屈曲して口縁部がまっすぐ伸び、端部は面を持つ。内面横方向ハケ、外面縦方向ハケ。10は頸部の屈曲が弱く、やや外開きぎみにまっすぐ立ち上がる。11は口径14.3cm、胴径13.4cm、器高18.6cmで、口径が胴径よりも大きく、胴が外に張らない長胴形を呈する。頸部で「く」の字状に屈曲して、口縁部はやや外反ぎみに長くまっすぐ伸び、端部は丸く収める。底径2.0cmで平底から丸底化への傾向がうかがわれる。内面横方向ハケ、外面縦方向ハケ調整。器壁は3mm程度で薄く仕上げられている。12は口径より胴径が小さく胴が張らない器形。



第13図 遺物実測図③ (甕)

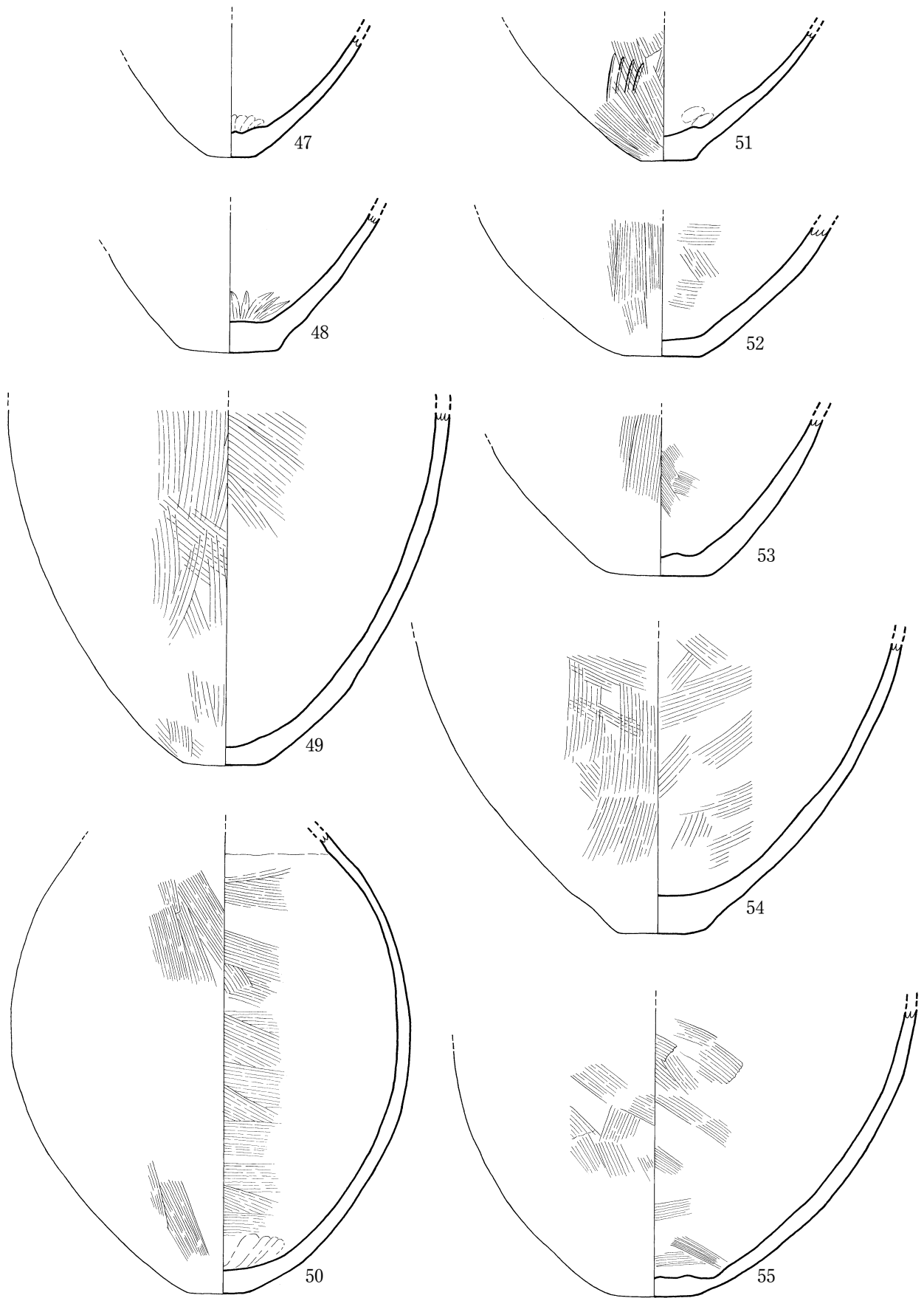


第14図 遺物実測図④ (甕)



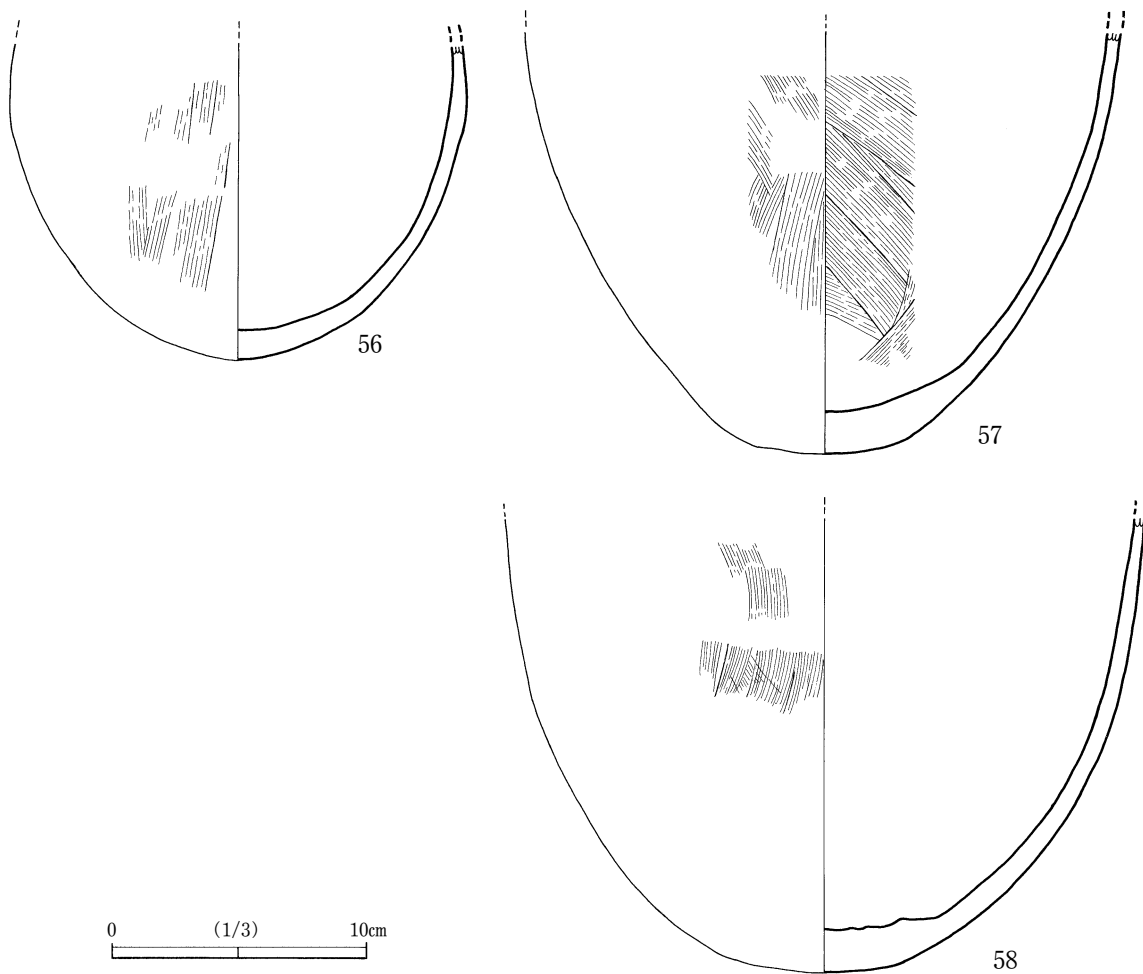
0 (1/3) 10cm

第15図 遺物実測図⑤ (甕)



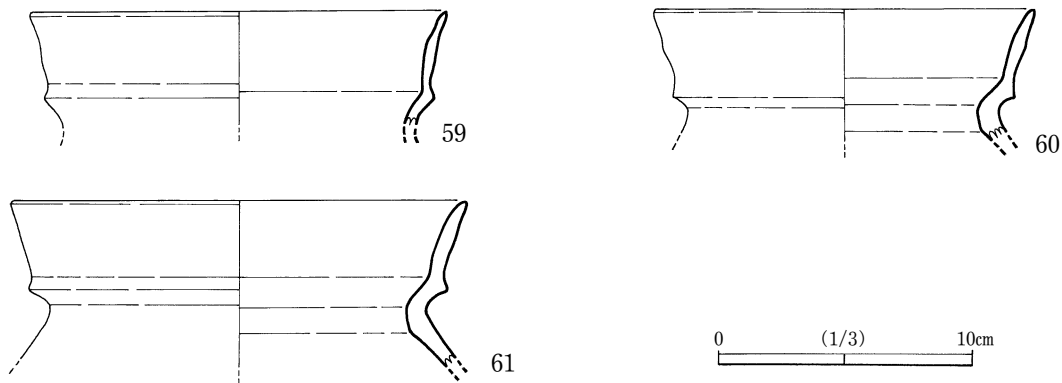
0 (1/3) 10cm

第16図 遺物実測図⑥ (甕)



第17図 遺物実測図⑦（甕）

13～33は、中型に分類した甕である。13は頸部の屈曲角度が鋭く、口縁端部をはね上げぎみに内側につまみあげて仕上げてある。器壁は薄い。14は口縁がまっすぐ立ち上がり、中位から外反し、端部をはね上げぎみに内側につまみあげてある。13・14は庄内式甕の口縁部の影響が見られる。15～19は口縁端部を尖り気味に丸く収めるタイプ。17は胴部外面に右上がりのタタキ痕があり、器壁は薄い。18・19は頸部の屈曲が明瞭で、球形に近い胴部が想定される。19は口縁部が内湾しながら外開きに立ち上がり、布留系甕の要素が見られる。器壁は厚い。内外面ハケ調整。20～27は口縁端部に面を持つ



第18図 遺物実測図⑧（甕）

タイプ。20～23は頸部の屈曲が鋭く明瞭で、球形に近い胴部が想定される。21・23の胴部外面には右上がりのタタキが施されている。25・27は頸部の屈曲がやや緩やかで、長胴形の器形が想定される。28・29は口縁端部を外側につまみ出すように上部・側面に面を持たせて仕上げている。

30～33は球形胴部の甕である。30・31は「く」の字状の口縁に球形胴部、丸底で、布留系甕に近い形態を呈する。内外面はハケ調整。器壁は、比較的薄い。32・33は胴部外面に右上がりのタタキ。

34～46は、大型に分類した甕である。34は口縁部中程が肥厚し、端部は尖りぎみに終わる。胴部は球形で、粘土帯接合痕が観察される。器壁は比較的薄い。35～37は頸部の屈曲角度が鈍く、長胴形の器形が想定される。35では口縁端部をつまみ、明瞭な面を作り出している。器壁は薄い。37・39・40は口縁部が外に湾曲しながら立ち上がる。38はやや長胴ぎみの球形で丸底である。胴部外面に右上がりのタタキが施されている。器壁は薄い。41は頸部の屈曲が緩やかで、わずかに外開きぎみに短く口縁部が立ち上がる。

42～46は、頸部の屈曲が緩やかで、胴部の張り具合が少なく、長胴形の器形を呈する。いずれも胴部内外面はハケ調整。42は口縁端部に面を持つ。46は復元口径23.8cm、器高35.9cm、凸レンズ状の底径3.8cmで、胴部が著しく長い。復元された土器の器形のゆがみが大きく据わりが良くないため、図上で反転復元した。

47～58は、甕の底部と見られるものである。47～55は平底である。47・48・51・54は底部が意識してしっかりと作られ、厚底である。胴部立ち上がり角度が急で、あまり胴の張らない長胴形である。48の底部内面にはへら状工具による成形圧痕が見られる。49・50・52・53・55は底部が薄く、胴部がやや外に張りながら湾曲して立ち上がり、長胴形であるが球胴化の傾向がうかがえる器形である。56はやや小型で丸底。57・58は凸レンズ状に平底の痕跡をやや残し、ほぼ丸底に近い長胴形の中型の甕。

59～61は、山陰系の特徴を持つ甕の口縁部である。本遺跡では、このタイプの土器は出土点数が限られ、全体に占める割合も高くない。

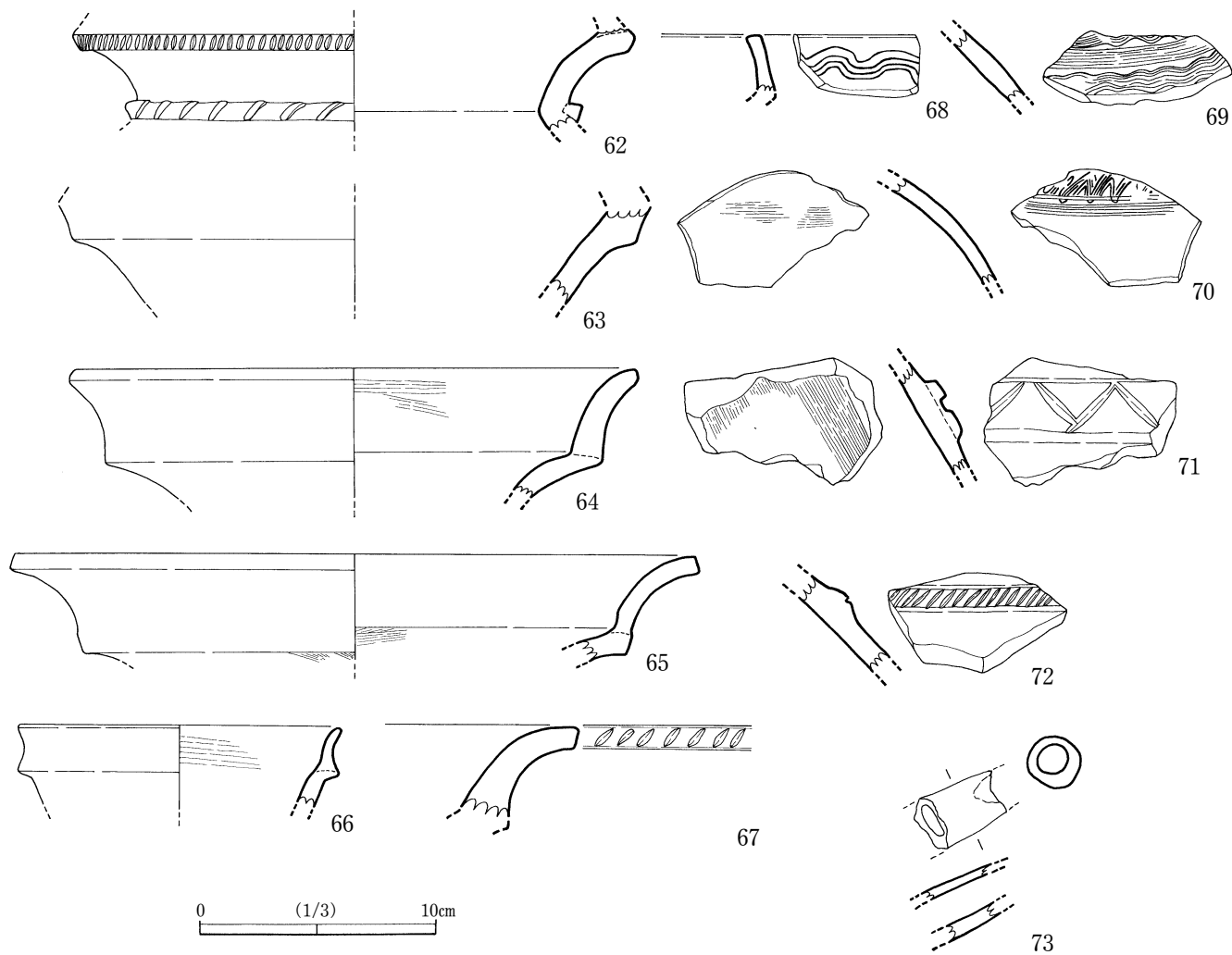
(2) 壺 (第19～21図、図版18～20)

甕に比べて、壺の出土点数は少なく、全体に占める割合も低い。また、器形全体が復元できる資料は限られ、口縁の一部や底部、文様帯部分などの破片資料が多い。このため、細かなタイプの分類は困難であるので、特徴的なものを大まかに分類して掲載する。

62～72は複合口縁壺の一群である。62は複合口縁部の屈曲部からの立ち上がり部が欠損したものである。屈曲部外周に細かい間隔の刻み目文様が施されている。頸部と口縁部の屈曲部外周には粘土突帯が巡り、間隔の広い右上がりの刻み目がある。63は複合口縁部の屈曲部で、上部が欠損していることが確認できる破損面を持つ。内側に屈曲して立ち上がるものとして図上復元したが、外反する可能性もある。64・65・67は、立ち上がり部が外反するタイプの複合口縁で、65・67は反りが著しく、端部は面を持って終わる。67は口縁端部の外側面に右上がりの刻み目が施されている。66は復元口径13.5cmで、他に比べて小型である。68～72は、外面に文様が残る壺の破片と見られる。68は口縁端部外面に4本単位の櫛描きの波状文が巡らされている。69～72は胴部上半から頸部にかけての部位の破片と見られる。69・70は櫛描きの波状文と沈線が施されている。71は幅広い粘土突帯が貼られ、表面に山型の刻み目がある。72は断面三角形の粘土突帯に間隔の狭い右上がりの刻み目が施されている。73は注口

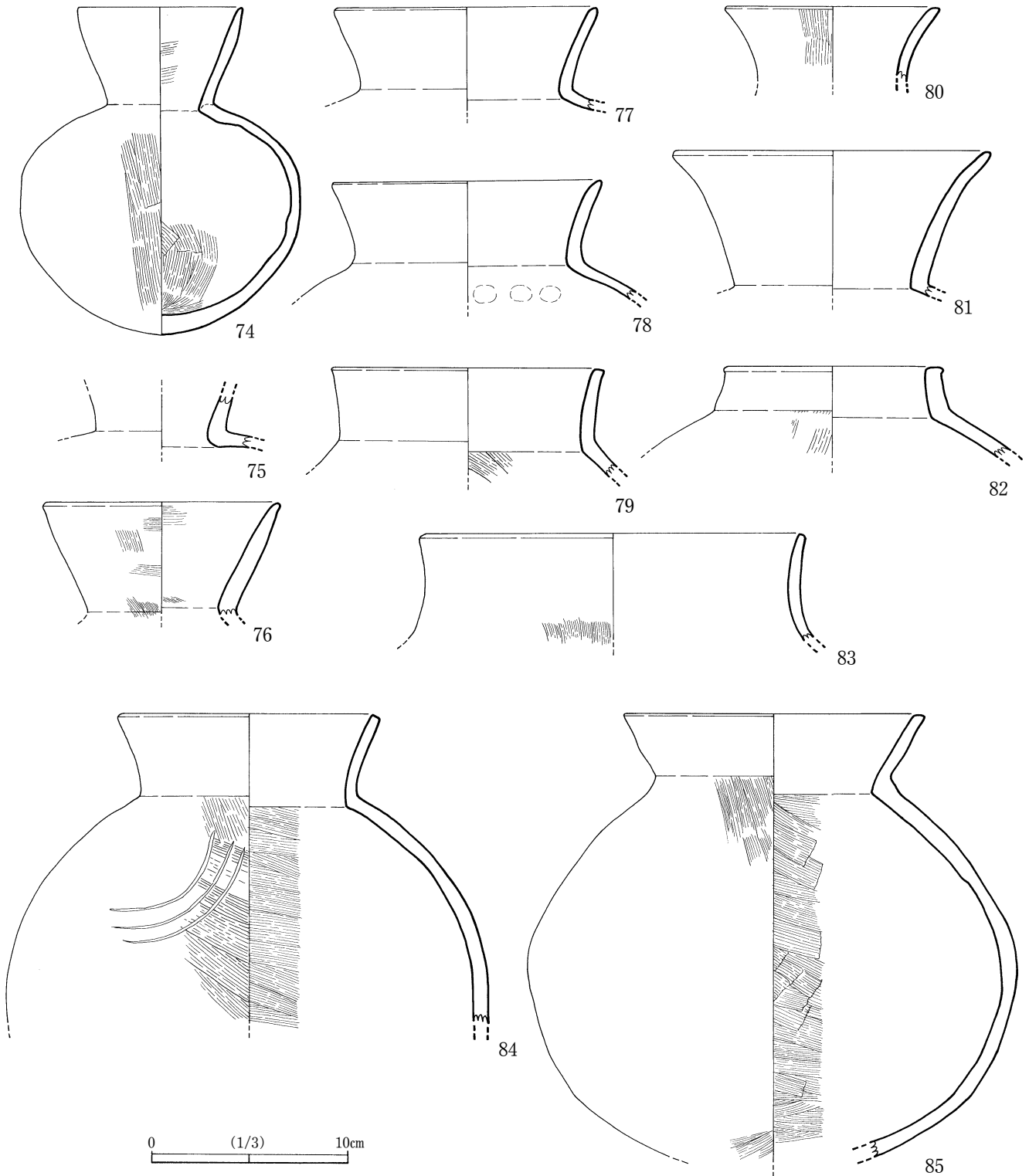
を持つ壺の注口部の破片と見られる。

74~85は直口・広口壺タイプの一群である。74~76は口径が小さく小型で、頸部が細くすぼまり、口縁部が外開きに長くまっすぐ立ち上がり、胴部は球形をなすタイプ。77~79は口径が大きい大型の広口壺。80~81は口縁部が外湾しながら長く立ち上がるタイプで、80は口径が小さい小型の器形、81は口径が大きい大型の器形。82は短頸で口縁部がやや内側にすぼまりながら立ち上がり、大きく張り出す球形の胴部が付属する。83は口径が大きく、ほぼまっすぐ立ち上がる口縁部に胴部がつながる。84・85は広口直口壺。84はハケ調整後の胴部上外面に弓形の半弧状に3本線を線刻した文様が施されている。ヘラ状工具による線刻とみられる。各弧線の両端部を結ぶ長さは向かって左側から直線で7.1cm、7.7cm、8.0cm、となり、左側の線と右側の線との幅は2.0cmで、陰刻線の幅は1mmである。この文様が何を描いたものであるかは、具象性に乏しく象徴的であり、この時期の土器に類例が少ないため、判断が難しい。遺跡が海浜に近い場所に立地する点や、弥生時代の土器に描かれる船に類似すると見られる点などから、ひとつの解釈として船を象徴化したものとも考えられるが、比較対照の類例を待って検討したい。85は胴部下半から底部にかけてやや寸詰まり状の球形胴部をもつ。口径が14.4cmで、口縁部の外開き具合が大きい。86~95は壺の底部とみられる。86~90は平底タイプである。86は底部にドーナツ状の粘土帯を貼り付けたような形状を呈し、指頭圧痕が内外に残る。この形態の底部はこの1点の



第19図 遺物実測図⑨ (壺)

みで、やや特殊なつくりである。87はやや上げ底状になっている。外面に右上がりのタタキ痕が残る。88はやや外張りぎみに内湾して底部から立ち上がり、厚底である。89は底部からの立ち上がりが急角度で、胴部の膨らみが少ない。厚底。90は凸状に底部がしつらえられ、底部外面から内面方向に焼成前の穿孔が施されている。91～95は、平底から丸底へ変わる段階の形態で、ほぼ丸底に近いタイプである。いずれも立ち上がりの角度が緩やかで、球形の胴部を持つと見られる。92は底部外面中央にへ



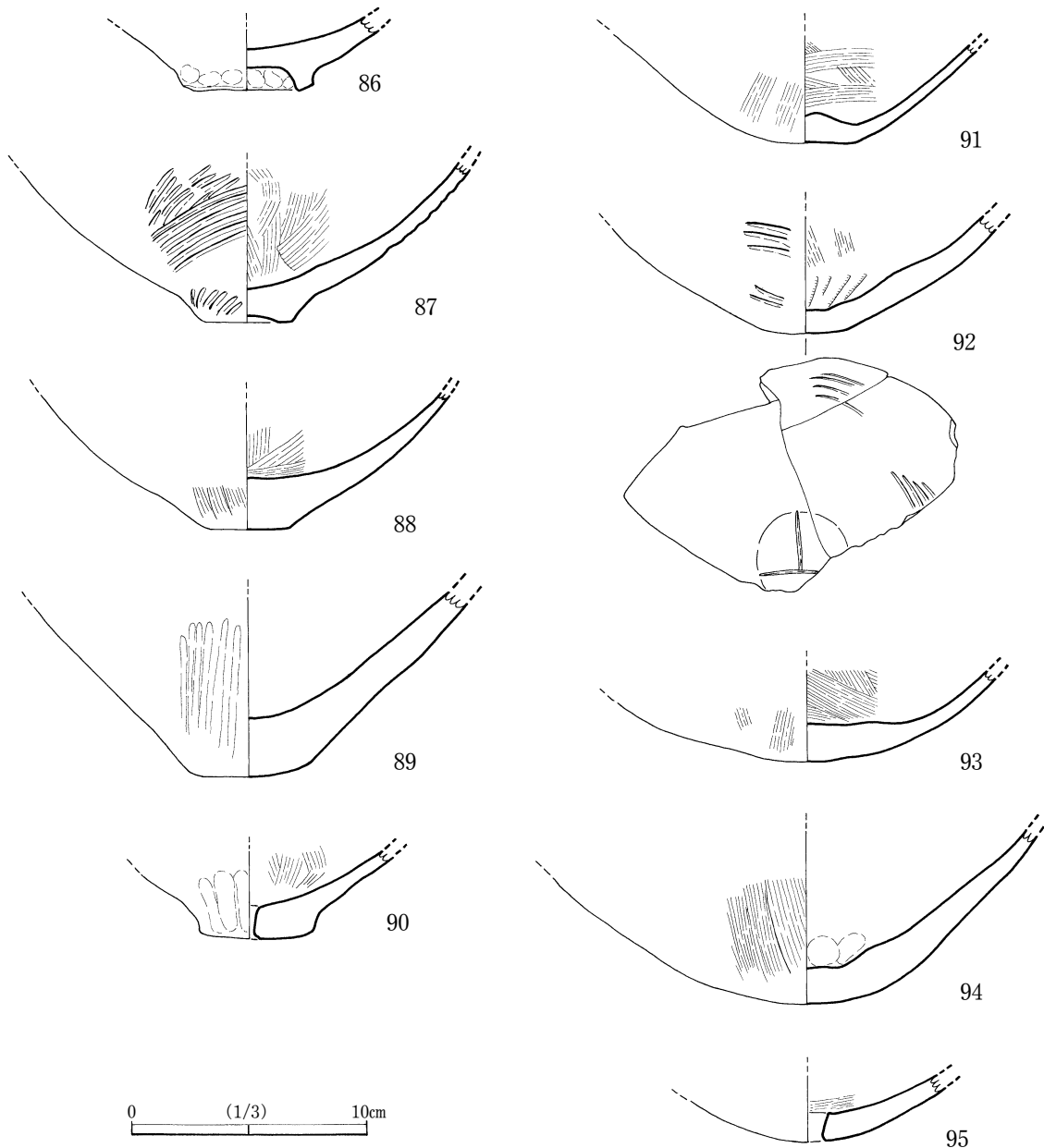
第20図 遺物実測図⑩ (壺)

ラ状工具で、2本の線を直角に「T」字のように線刻した印が施されている。外面はタタキ後、ナデで器面調整されている。底部内面にはハケ工具の端部を押し当てて成形した痕跡が残る。95は底部外面から内面方向に焼成前の穿孔が施されている。なお、90・95は有孔鉢の底部の可能性もあり、祭祀用に使われたものと考えられる。

(3) 高杯 (第22~23図、図版21~23)

高杯の出土点数は比較的多く、割合も高い。器形全体が残るものは限られるので、杯部の残るもの(96~108)と脚部の破片(109~127)にわけて掲載する。なお、128・129は低脚高杯と見られるものである。

杯部の基本形態として、①有稜・有段高杯(96~104)、②椀形高杯(105~108)の2種類がある。96~99は有稜高杯で、稜から先の口縁部が長く外反するタイプ。有稜高杯では、型式変化の上で稜から先の口縁部が長くなる傾向があり、新しい時期の要素がある。100はこのタイプの杯部が付く高杯の



第21図 遺物実測図①(壺)

脚部と見られ、中実である。101～102は稜から先の口縁部が長くまっすぐ伸びるタイプ。101は杯部が深い。102は杯部が浅く、ハの字状に開く低い脚部がつく。透孔4個がある。外面にはミガキが施されている。脚部は中実である。103～104は有段高杯である。口縁端部外面に断面三角形の粘土帯を貼り付けてある。粘土帯外面と口縁端部内面に櫛描きの波状文が施されている。

105は杯部の中程から内湾し、口縁端部がすぼまる。口径16.0cm、杯部最大径21.4cm。口縁端部外面に折り返し状に断面円形の細い粘土帯が巡る。長く円錐状に開く脚部が付く。透孔3個。北九州市高島遺跡や山口県豊浦町吉永遺跡で類例が出土している。

106も同様のタイプである。107～108は椀形の杯部が付くと見られる。

脚部の外部形態により5種類に分けられる。①円筒状の細長い脚部をもち、裾部が円錐状に緩やかに開くもの（109～110）。②長めの脚部が円錐状になだらかに開きながら裾部に至るもの（111～117）。③短い脚部が裾部で明瞭に屈折して開くもの（118～122）。④短い脚部が円錐状になだらかに開きながら裾部に至るもの（123）。⑤短い脚部が杯部からすぐにハの字状に開くもの（125～127）。

脚部の内部形態により、A 中空のもの、B 中実のもの 2種類がある。

透孔は円形で、裾部付近に3または4個を、1段または2段に設けている。

109～110は①タイプで、いずれも中実である。111と116は透孔が、器壁を貫通せず、途中までの穿孔である。112は、粘土を中空の脚部に埋め込むことによって杯底部を形成する充填法によって接合していることがわかる。透孔は2段に設けられている。113も同じ接合法によったと見られるが、充填粘土が欠損した状態である。117は中実の脚部である。118～122は③タイプで中空である。124は③タイプと見られるが、杯部の欠損でつながりが不明なものである。④タイプの125～127は中空である。

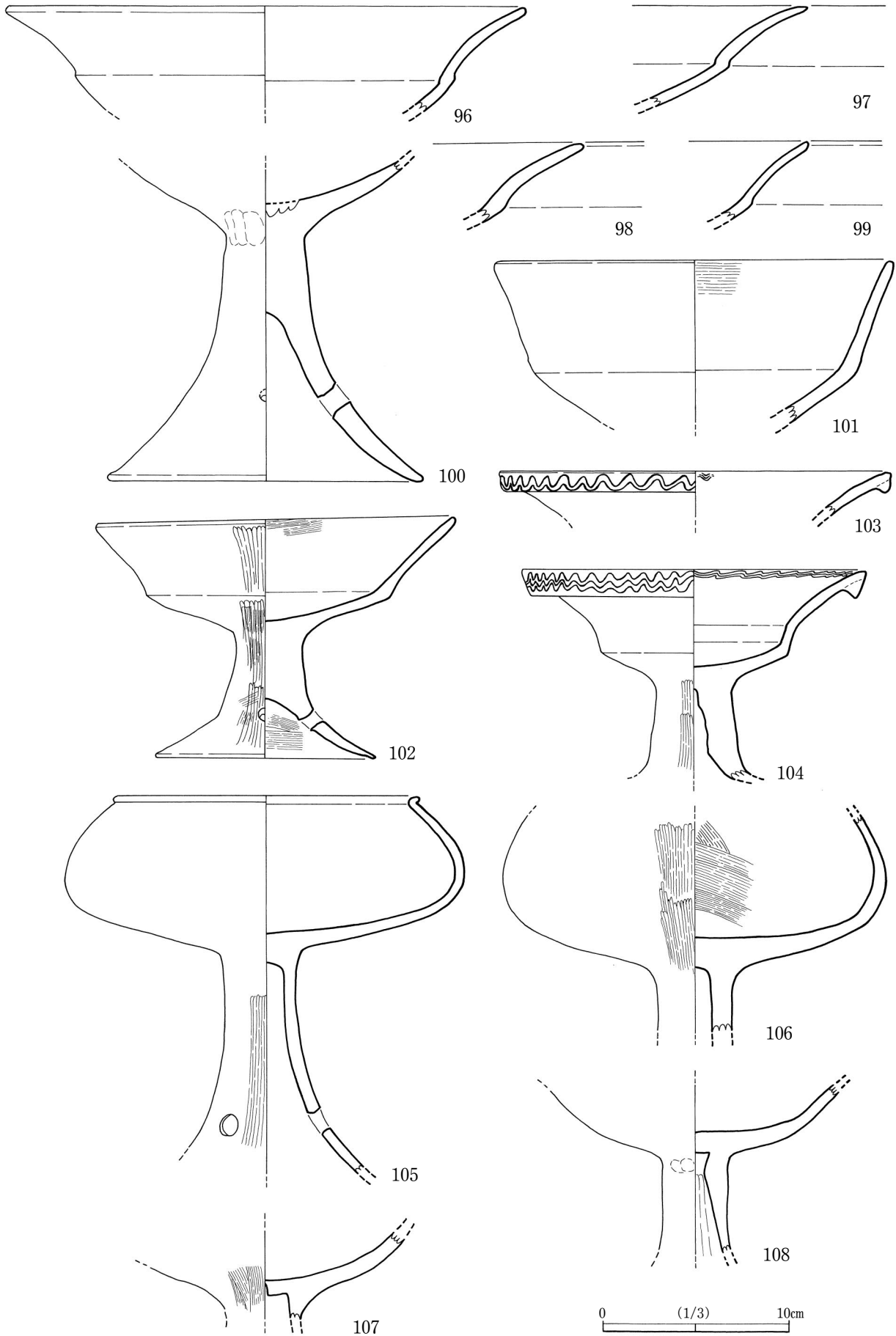
128・129は以上とは形態が異なり、小型で椀形の杯部にハの字に開くごく短い脚部が付く低脚高杯と見られる。

(4) 器台 (第24図、図版23)

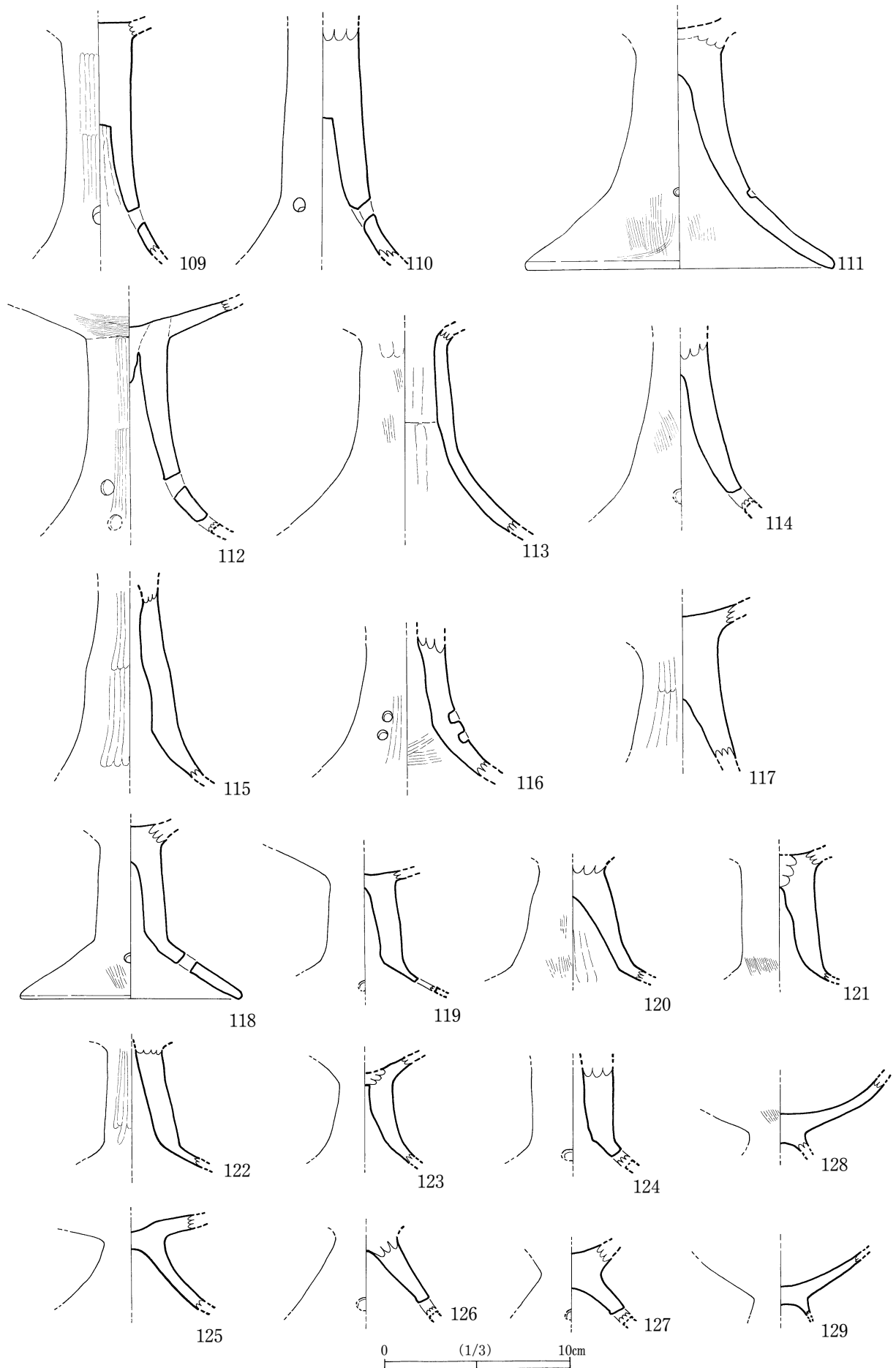
130は受部口径16.6cm、脚部底径15.2cm、器高18.1cmで受部と脚部の径が近く、上下対象に近い。131～133は、受部にえぐりが入っている点に特徴がある器台である。使用方法は不明であるが、豊前地域に類例がある。131は内面横方向ハケ、外面縦方向ハケ調整。132は脚部外面に間隔の広い右上がりのタタキ痕がある。134は器台の受部と考えられる。135・136は器台脚部と考えられる。137は小型器台の脚部とみられ、浅い椀状の受部が付く型式と考えられる。138は山陰系の鼓形器台である。内面はケズリ調整。この器種で復元できる個体はほかになく、甕（59～61）を含めても山陰系の土器の出土点数は少ない。

(5) 鉢 (第25図、図版24)

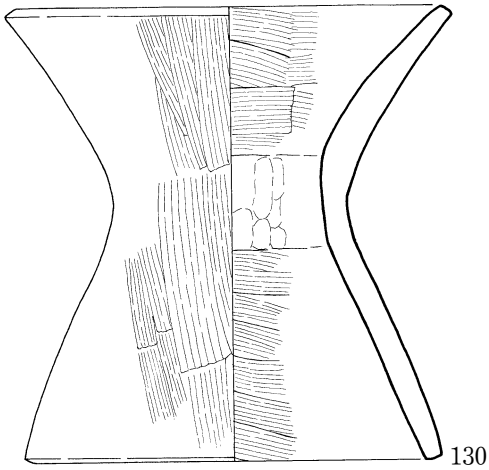
139は口径9.3cm、器高3.3cmの小型の浅い鉢である。140は復元口径9.6cm、残存高6.0cmで椀形の深い鉢と見られる。短い脚が付く可能性もある。141～143は低脚付きの鉢と考えられる。脚部には指頭圧痕がある。144は口径12.8cmで、小型の浅い鉢で厚底。145は口縁端部を内側に縁を持たせるように仕上げてある。146は口縁部がまっすぐに立ち上がる。147は口縁端部に稜が立つ面を持ち、外側に粘土がはみ出したようになっている。復元口径29.6cmの大型の鉢。148～151は小型丸底鉢の系譜を引くものである。148は口径13.8cm、器高11.0cmで、口縁は中程で肥厚し、まっすぐに外に開く丸底の鉢。150は復



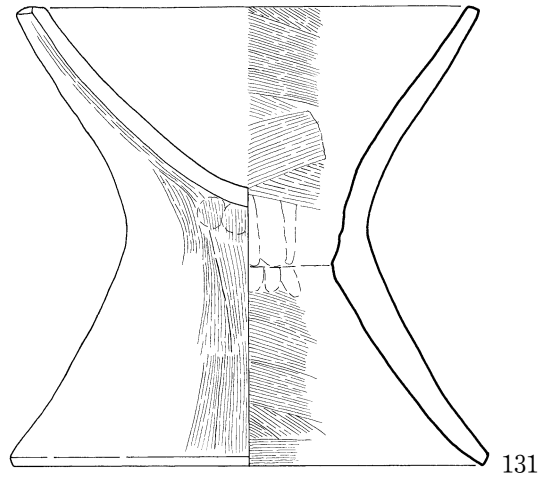
第22図 遺物実測図⑫ (高杯)



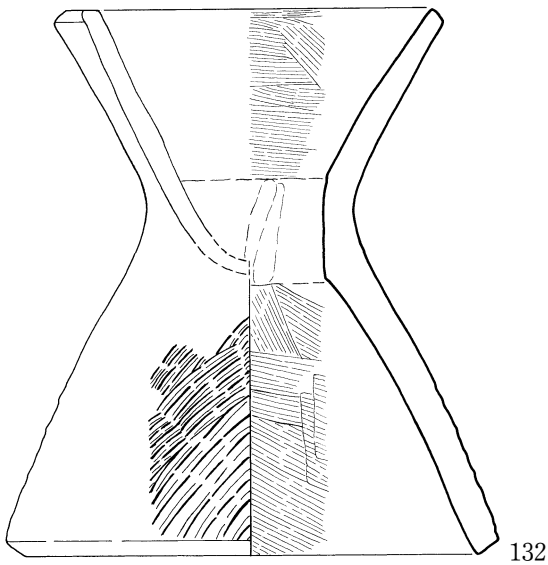
第23図 遺物実測図⑬ (高杯)



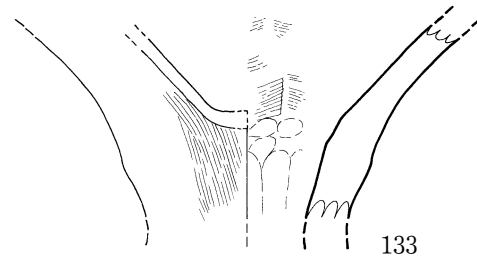
130



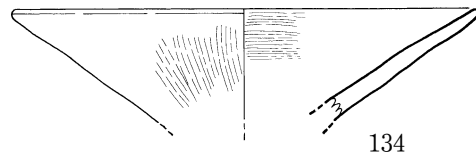
131



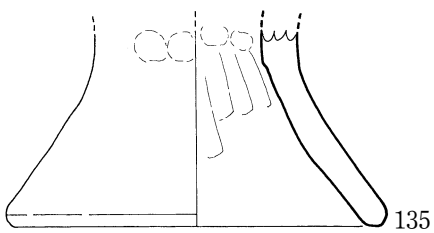
132



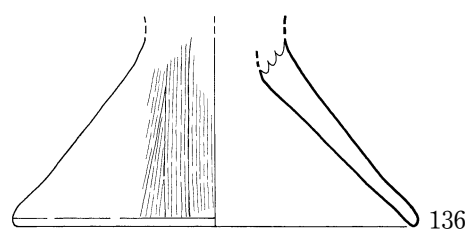
133



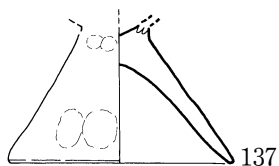
134



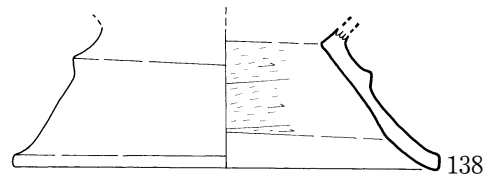
135



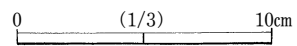
136



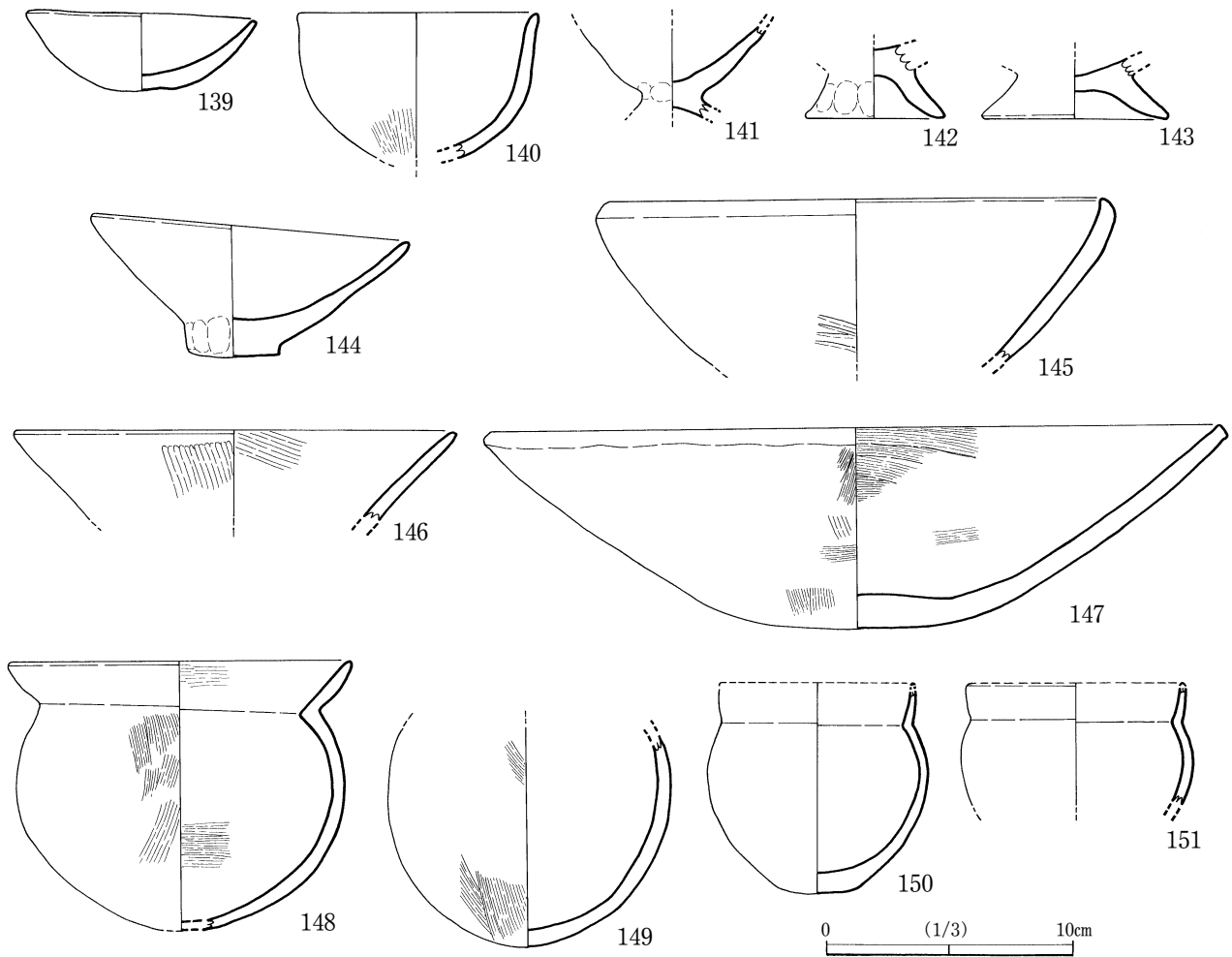
137



138



第24図 遺物実測図⑭ (器台)

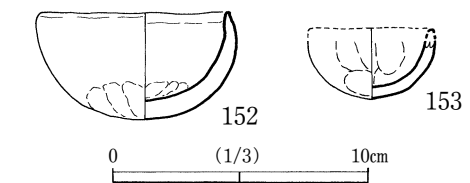


第25図 遺物実測図⑮ (鉢)

元口径8.0cm、器高8.6cm、151は復元口径8.8cmの小型品で、ミニチュア土器の要素があり、祭祀的用途が想定される。器壁は薄く丁寧にナデ仕上げされている。150・151は同一個体の可能性がある。

(6) ミニチュア土器 (第26図、図版24)

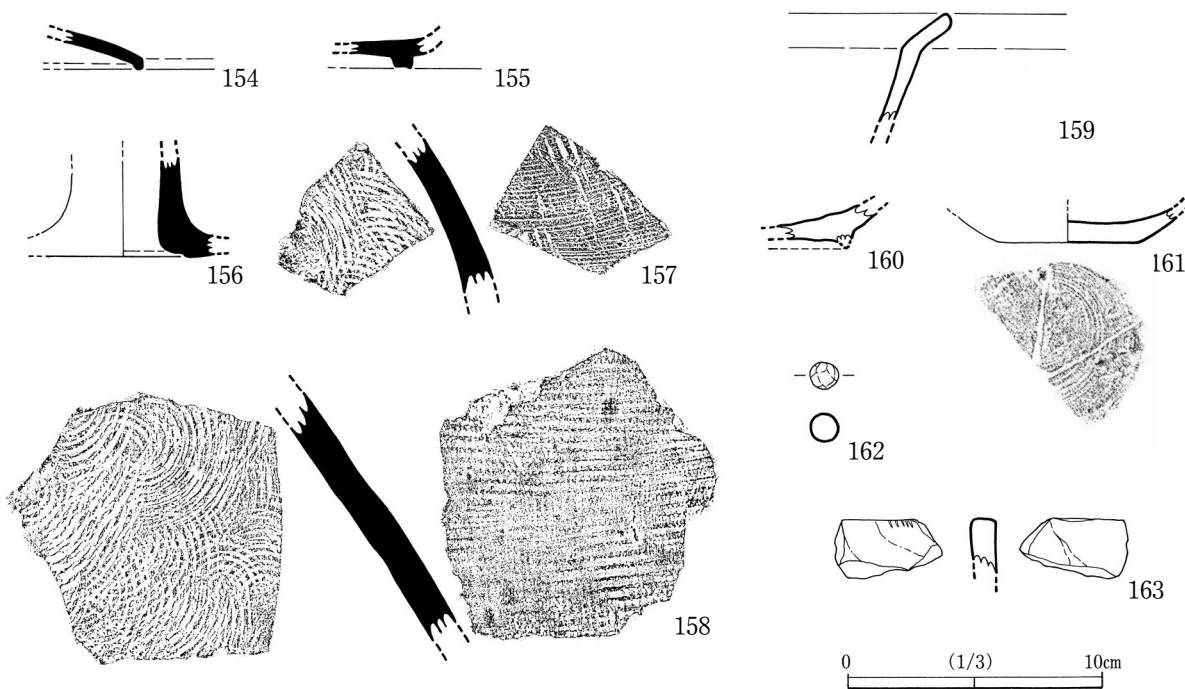
152・153は手づくねのミニチュア土器である。152は口径7.3cm、残存器高4.2cm。153は口径5.0cm、残存器高2.3cm。内外面に指頭圧痕が残る。



第26図 遺物実測図⑯ (ミニチュア土器)

3 2地区灰オリーブ色粘質土層等出土遺物 (第27図、図版25)

154～158は須恵器。154は杯蓋の口縁端部、奈良時代から平安時代。155は杯身の高台部。156は高杯の脚部で、中空である。157・158は甕の胴部破片と見られ、内外面にタタキ痕がある。159は土師器鍋の口縁部。160は土師器碗の底部で、欠損しているが、断面三角形の低い高台が付くタイプと考えられる。161は土師器杯で、底部糸切り痕がある。162は直径1.1cmの土玉で、時期は不明。163は滑石製品で、器面が湾曲し内外面にノミの加工痕がある。小型の石鍋の口縁部と見られる。



第27図 遺物実測図⑱ (須恵器・土師器・土製品・石製品)

第3表 遺物観察一覧表

※ 遺構表示凡例

- A-B区北・・・2地区南西隅土器溜まりトレンチA-B区北側
- A-B区南・・・2地区南西隅土器溜まりトレンチA-B区南側
- B-C区北・・・2地区南西隅土器溜まりトレンチB-C区北側
- B-C区南・・・2地区南西隅土器溜まりトレンチB-C区南側
- C-D区北・・・2地区南西隅土器溜まりトレンチC-D区北側
- C-D区南・・・2地区南西隅土器溜まりトレンチC-D区南側
- 灰オリーブ・・・灰オリーブ色粘質土層

※ 「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土地区	遺構	種類	器種	法量 (cm)				胎土		焼成	色調		調整・備考
					口径	胴径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
1	2	A-B区南	土師器	甕	13.8	14.4	2.2	14.7	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄色	浅黄色	内面横・斜め方向ハケ、外面縦方向ハケ。頸部と口縁部は内面に粘土帯を貼り付けて接合。
2	2	C-D区南	土師器	甕	12.3			残3.4	粗	含砂粒多	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面ともにナデ。
3	2	A-B区南	土師器	甕	復12.7			残5.4	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄橙色	橙色	内面口縁部から頸部横ナデ、頸部から胴部横・斜め方向ハケ後ナデ、外面縦方向ハケ後ナデ。
4	2	C-D区北	土師器	甕	復13.4			残8.9	粗	含砂粒多	やや軟質	灰白色	橙色	内面磨滅により調整不明。外面ハケ後ナデ。
5	2	B-C区北	土師器	甕	復14.8			残6.5	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内面ナデ、外面ハケ後ナデ。
6	2	A-B区南	土師器	甕	復14.4	復16.2		残10.2	密	含細粒多	やや軟質	橙色	にぶい黄橙色	内面ケズリ後横ナデ。外面口縁から頸部横ナデ、肩部は斜め方向、胴部は横方向・斜め方向ハケ。
7	2	A-B区南	土師器	甕	復14.8			残6.6	密	含砂粒少	軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	内面ハケ後ナデ。外面口縁部ナデ、胴部タタキ。
8	2	土器溜まり	土師器	甕	復12.4	復14.0		残10.4	密	含砂粒多	やや軟質	褐灰色	褐灰色	内外面ともハケ。胎土に1~8mm大の砂粒を多く含む。
9	2	C-D区南	土師器	甕	復13.0	復15.6		残15.6	密	含砂粒多	軟質	黄灰色	黄灰色	内面横方向ハケ、外面縦方向ハケ。
10	2	A-B区南	土師器	甕	復14.6	復18.2		残11.4	密	含細粒少	やや軟質	にぶい橙色	橙色	内面口縁部は横方向ハケ、頸部から胴部は斜め方向ハケ。外面斜め方向ハケ。磨滅著しい。
11	2	B-C区南	土師器	甕	復14.3	13.4	2.0	18.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰黄色	灰黄色	内面横方向ハケ、外面縦方向ハケ。凸レンズ状平底。口縁部傾く。
12	2	B-C区南	土師器	甕	復14.8	復13.4		残5.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰褐色	内外面ともハケ後ナデ。
13	2	B-C区南	土師器	甕	復16.7			残4.3	粗	含砂粒多	軟質	浅黄橙色	褐灰色	内外面とも磨耗のため調整不明。
14	2	C-D区北	土師器	甕	復17.0	15.2		残6.7	密	含細粒多	軟質	にぶい橙色	橙色	内面磨滅により調整不明。外面口縁から頸部は横ナデ、肩部は縦方向ハケ。頸部に粘土接合痕あり。

番号	出土地区	遺構	種類	器種	法量 (cm)				胎土		焼成	色調		調整・備考
					口径	胴径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
15	2	土器溜まり	土師器	甕	復16.2			残5.5	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面磨滅により調整不明。外面縦方向ハケ。磨滅著しい。
16	2	B-C区北	土師器	甕	復16.6			残7.3	密	含砂粒多	やや軟質	褐灰色	灰白色	内外面ともにナデ。
17	2	B-C区南	土師器	甕	復17.5			残14.5	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい褐色	内面磨滅にて調整不明。粘土帯接合痕あり。外面タタキ。
18	2	C-D区南	土師器	甕	復16.8	復21.0		残15.2	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	胴部内面に斜め方向の交差したハケ。外面に斜め方向ハケ後ナデ。
19	2	A-B区北	土師器	甕	復19.2	復21.7		残10.2	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	黒色	内面斜め方向ハケ、外面縦方向ハケ。
20	2	A-B区南	土師器	甕	復16.4			残3.9	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	にぶい黄褐色	内外面ともに横ナデ。
21	2	C-D区南	土師器	甕	復18.2			残4.3	密	含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内面横方向ハケ、口縁部の磨滅が著しい。外面口縁部ナデ、胴部にタタキ。
22	2	A-B区南	土師器	甕	復19.0			残5.6	密	含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	にぶい褐色	内面口縁部ナデ、頸部から肩部は斜め方向のハケ。外面縦方向ハケ、全体にやや磨滅。
23	2	B-C区南	土師器	甕	復18.4			残4.9	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	灰褐色	口縁部から頸部内外面とも横ナデ。頸部から胴部内面斜め方向ハケ、外面タタキ。
24	2	C-D区南	土師器	甕	復16.0	復17.8		残5.7	粗	含砂粒多	軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内面ナデ、外面タタキ後ナデ。口縁部はナデ。器厚は薄い。口縁は大きく反する。
25	2	B-C区北	土師器	甕	復19.8			残5.5	粗	含砂粒少	やや軟質	黄褐色	浅黄褐色	内外面とも磨滅により調整不明。
26	2	C-D区北	土師器	甕	復18.4			残9.4	密	含砂粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	内面横方向のハケ、磨滅が激しく調整の詳細不明。外面縦方向ハケ。
27	2	B-C区北	土師器	甕	復19.8			残5.6	密	含砂粒多	軟質	黄灰色	灰黄褐色	内面横方向ハケ、外面縦方向ハケ。頸部に粘土接合痕。外面の磨滅が著しい。
28	2	A-B区南	土師器	甕	復17.0			残3.5	密	含砂粒少	やや軟質	灰黄色	橙色	内面口縁部横方向ハケ後ナデ、肩部斜め方向ハケ、指頭圧痕。外面口縁部ナデ、肩部縦方向ハケ。
29	2	A-B区北	土師器	甕	復19.0			残7.1	密	含砂粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	口縁部内外面ともにナデ。胴部内面横斜め方向ハケ後ナデ、外面縦方向ハケ。
30	2	B-C区北	土師器	甕	復15.6	復24.6		26.4	密	含砂粒多	やや軟質	褐灰色	にぶい黄褐色	内面ハケ。外面口縁部から頸部ハケ後ナデ。頸部から底部ハケ。部分的に磨滅。
31	2	C-D区北	土師器	甕	復17.4	復24.8		残25.9	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内面横方向ナデ、外面縦方向ナデ。
32	2	A-B区南	土師器	甕			21.9	残13.6	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面ハケ、外面タタキ。
33	2	A-B区南	土師器	甕		復20.3		残13.2	密	含砂粒多	やや軟質	灰白色	にぶい黄褐色	内面ハケ、外面タタキ。
34	2	B-C区北	土師器	甕	復20.1	27.2		残24.5	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内面磨滅により調整不明。粘土帯接合痕あり。外面ハケ後ナデ。
35	2	C-D区北	土師器	甕	復23.0	復23.8		残9.5	密	含細粒多	やや軟質	灰黄色	にぶい黄褐色	内面横・斜め方向ハケ後ナデ。外面磨滅により調整不明。
36	2	C-D区北	土師器	甕	復22.4			残9.3	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内面口縁部横方向ハケ、胴部斜め方向ハケ。外面縦方向ハケ。
37	2	A-B区南	土師器	甕	復27.5	復28.8		残12.6	粗	含砂粒多	やや軟質	灰褐色	橙色	内面磨滅のため調整不明。外面ハケ、磨滅著しい。
38	2	B-C区南	土師器	甕		復24.0	復2.4	残26.2	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	内面ナデ、外面右斜め方向タタキ。
39	2	A-B区北	土師器	甕	復20.4			残6.2	密	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	内面口縁部ナデ、胴部ハケ。外面ハケ、タタキ。磨滅著しい。
40	2	B-C区南	土師器	甕	復26.4			残6.6	密	含砂粒少	やや軟質	灰黄褐色	橙色	内外面ともナデ。
41	2	C-D区南	土師器	甕	復20.6			残6.0	密	含細粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	灰白色	内面口縁部から頸部斜め方向ハケ。外面口縁部斜め方向ハケ後ナデ、肩部縦方向ハケ後ナデ。
42	2	C-D区北	土師器	甕	復20.0	復24.9		残23.8	密	含砂粒少	やや軟質	黄灰色	にぶい黄褐色	内外面とも口縁部から頸部ハケ後ナデ、頸部から胴部ハケ。
43	2	C-D区南	土師器	甕	復20.4			残14.5	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	淡赤褐色	内面ハケ、粘土帯接合痕あり。外面ハケ。
44	2	B-C区北	土師器	甕	復21.0	復25.5		残14.0	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	にぶい黄褐色	内外面ともハケ。
45	2	C-D区南	土師器	甕	復20.0	22.5		残22.6	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい褐色	内面横・斜め方向ハケ。外面縦方向ハケ。
46	2	A-B区北	土師器	甕	復23.8	復21.4	3.8	35.9	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄色	にぶい黄褐色	内外面ともにハケ。長胴形を呈す。
47	2	B-C区南	土師器	甕			2.6	残6.6	粗	含砂粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも磨滅により調整不明。1～4mm大の砂粒を非常に多く含む。
48	2	C-D区北	土師器	甕			5.3	残7.6	密	含砂粒多	軟質	灰褐色	灰褐色	内外面とも磨滅により調整不明。
49	2	B-C区北	土師器	甕		23.6	4.2	残19.0	密	含砂粒多	やや軟質	灰黄褐色	褐色	内外面ともにハケ。内面底部に指頭圧痕。
50	2	A-B区南	土師器	甕		21.4	3.8	残14.8	粗	含砂粒多	軟質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	内面横・斜め方向ハケ。外面縦方向ハケ、全体にススが付着。
51	2	B-C区北	土師器	甕			3.2	残7.0	密	含砂粒多	やや軟質	灰白色	にぶい黄褐色	内面ハケ後ナデ、指頭圧痕あり。外面タタキ後に縦方向ハケ。
52	2	B-C区北	土師器	甕			4.0	残7.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	内外面ともハケ後ナデ。外面にスス付着。
53	2	土器溜まり	土師器	甕		復5.2	残8.5	粗	含砂粒多	やや軟質	黄灰色	にぶい黄褐色	器面剥離のため調整不明。	
54	2	C-D区北	土師器	甕		復26.0	4.6	残15.7	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	橙色	内外面ともハケ。底部やや凸レンズ状。

番号	出土地区	遺構	種類	器種	法量 (cm)				胎土		焼成	色調		調整・備考
					口径	胴径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
55	2	B-C区北	土師器	甕		24.3	4.8	残15.5	密	含細粒多	やや軟質	灰黄色	にぶい赤褐色	内面横・斜め方向ハケ、底部指頭圧痕。外面斜め方向ハケ。
56	2	B-C区北	土師器	甕		18.0		残12.5	粗	含砂粒多	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面ともにハケ後ナデ。底部は丸底。
57	2	B-C区北	土師器	甕		23.4		残11.7	粗	含砂粒多	軟質	にぶい黄褐色	赤褐色	内外面ともハケ後ナデ。わずかに平底の痕跡を残す丸底。
58	2	C-D区北	土師器	甕		復25.1		残18.0	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	内面指頭圧痕。外面縦・斜め方向ハケ。磨滅が激しい。ほぼ丸底。
59	2	C-D区北	土師器	甕	復16.4			残4.6	密	含砂粒多	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面とも横ナデ。山陰系複合口縁甕。
60	2	B-C区南	土師器	甕	復15.0			残4.9	密	含砂粒多	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面ともにナデ。山陰系複合口縁甕。
61	2	B-C区北	土師器	甕	復17.8			残6.5	密	含砂粒多	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面ともナデ。山陰系複合口縁甕。
62	2	A-B区北	土師器	壺				残4.0	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面ともナデ。口縁部外面に右上がり刻み目文様。頸部上部に幅8mmの右上がり刻み目のある貼付け突帯。
63	2	A-B区北	土師器	壺				残4.1	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	橙色	内面ハケ後ナデか、外面口縁部横ナデ、頸部ハケ後ナデか。
64	2	A-B区北	土師器	壺	復24.8			残5.5	粗	含砂粒多	軟質	明赤褐色	にぶい黄褐色	内面ハケ後ナデ、外面器面剥離のため不明。
65	2	B-C区北	土師器	壺	復29.0			残4.5	密	含砂粒多	やや軟質	黄灰色	にぶい黄褐色	内外面とも横ナデ。複合口縁壺の口縁部。
66	2	C-D区南	土師器	壺	復13.5			残3.3	粗	含砂粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	内面横方向ハケ後ナデ。外面ナデ。
67	2	B-C区北	土師器	壺				残3.9	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内面ハケ後ナデ、外面ナデ。口縁部外面に右上がりの刻み目か巡る。
68	2	A-B区北	土師器	壺				残2.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内面ハケ後ナデ、外面ナデ。口縁部に櫛描き波状文あり。
69	2	土器跡まり	土師器	壺				残3.1	密	含細粒少	やや軟質	灰白色	にぶい褐色	内面横方向ナデ。外面に櫛描き波状文様あり。
70	2	C-D区南	土師器	壺				残4.7	粗	含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内面ハケ。外面櫛描き波状文様あり。
71	2	B-C区北	土師器	壺				残4.8	粗	含砂粒少	やや軟質	黒褐色	灰白色	内面斜め方向ハケ後ナデ。外面突帯部と口縁部横方向ハケ、突帯下部斜め方向ハケ、横ナデ。突帯にヘラ状工具によると思われる山形文の刻み目あり。
72	2	A-B区北	土師器	壺				残4.2	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	内外面ともにナデ。突帯部に刻み目あり。
73	2	A-B区南	土師器	壺					密	含細粒多	軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	注口最大径・残2.6cm、最大長・残2.3cm
74	2	A-B区南	土師器	壺	復 8.0	復14.2		16.9	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄色	にぶい黄色	内面底部～胴部縦方向ハケ。外面胴部縦方向ハケ。丸底。
75	2	A-B区北	土師器	壺				残2.7	密	含細粒少	やや軟質	灰白色	橙色	内面磨滅により調整不明。外面横方向ナデ。
76	2	C-D区北	土師器	壺	復11.8			残5.8	粗	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面ともハケ後ナデ。内面頸部下部に丁寧なナデ。長頸壺の口縁～頸部。
77	2	B-C区北	土師器	壺	復13.2			残5.3	密	含細粒多	軟質	灰白色	浅黄褐色	内外面とも磨滅により調整不明。
78	2	B-C区南	土師器	壺	復13.6			残6.2	粗	含砂粒多	軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	器面剥落のため調整不明。胴部上方内面に指頭圧痕。
79	2	A-B区南	土師器	壺	復13.0			残5.6	密	含砂粒少	やや軟質	黄褐色	黄褐色	内面口縁部横ナデ、頸部から下ハケ後ナデ。外面横ナデ。
80	2	C-D区北	土師器	壺	復10.8			残4.9	密	含細粒少	やや軟質	灰白色	黄灰色	内面斜め方向のハケ後ナデ。外面縦方向のハケ後ナデ。
81	2	B-C区南	土師器	壺	復15.8			残7.5	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面ともナデ。
82	2	C-D区南	土師器	壺	復10.0			残4.6	密	含砂粒多	やや軟質	赤褐色	赤褐色	内面ナデ。外面口縁部ナデ、頸部から肩部縦方向ハケ後ナデ。
83	2	C-D区北	土師器	壺	復19.0			残5.4	密	含細粒多	やや軟質	にぶい褐色	橙色	内面横ナデ。外面口縁部横ナデ、頸部縦方向ハケ。全体に磨滅が著しく調整の詳細不明。
84	2	A-B区北	土師器	壺	復12.4	24.6		残15.9	密	含砂粒少	やや軟質	灰色	橙色	内面横方向ハケ、外面斜め方向ハケ。外面胴上半部に線刻による船の表現と見られる文様あり。
85	2	A-B区北	土師器	壺	復14.4	復25.0		残22.7	密	含砂粒多	やや軟質	灰黄色	灰黄色	内面横方向ハケ、外面斜め方向ハケ。
86	2	A-B区南	土師器	壺			4.4	残3.2	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄色	灰黄色	内外面ともに指頭圧痕の他は磨滅のため調整不明。底部は高台状になる。
87	2	B-C区南	土師器	壺		残19.2	3.6	残6.9	粗	含砂粒多	軟質	にぶい黄褐色	橙色	内面ハケ、外面タタキ。外面底部は上げ底。
88	2	B-C区北	土師器	壺		復3.2		残5.9	密	含砂粒少	軟質	黄灰色	浅黄褐色	内面多方向ハケ、外面縦方向ハケ。外面底部に被熱痕。底部平底。
89	2	B-C区北	土師器	壺		残18.5	5.1	残7.9	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	内面ナデ、外面ハケ後ナデ後ミガキ。底部やや凸レンズ状。
90	2	B-C区南	土師器	壺		残10.8	4.8	残3.9	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内面ハケ、外面ハケ後ナデ。底部外面から内面へ焼成前の穿孔。
91	2	C-D区北	土師器	壺			3.0	残4.7	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内面胴部横・斜め方向ハケ後ナデ、底部指頭圧痕。外部縦方向ハケ後ナデ。
92	2	C-D区北	土師器	壺			3.6	残5.0	密	含細粒少	やや軟質	灰黄色	にぶい褐色	内面底部横方向ハケ、上方斜め方向ハケ後ナデ。外面タタキ後ナデ。内面底部に工具痕。外面底部にヘラ状工具による「T」字状の線刻あり。

番号	出土地区	遺構	種類	器種	法量 (cm)				胎土		焼成	色調		調整・備考
					口径	胴径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面	
93	2	C-D区北	土師器	壺				残3.9	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	浅黄橙色	内面ハケ、外面ハケ後ナデ。
94	2	C-D区南	土師器	壺				残7.3	密	含砂粒少	やや軟質	にぶ黄橙色	橙色	内面ナデ、外面縦方向ハケ。
95	2	A-B区南	土師器	壺				残2.8	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	褐灰色	内面ハケ後ナデ、外面ナデ。底部外面から内面に焼成前の穿孔。
96	2	B-C区北	土師器	高杯	復27.6			残5.7	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶ黄橙色	にぶ黄橙色	内外面ともにナデ(磨滅激しい)。
97	2	C-D区南	土師器	高杯				残5.5	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面ともナデ。
98	2	C-D区南	土師器	高杯				残4.3	粗	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも磨滅により調整不明。
99	2	B-C区北	土師器	高杯				残4.2	密	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	磨滅により調整不明。
100	2	B-C区南	土師器	高杯	復14.2		復16.6	17.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶ黄橙色	橙色	内外面ともハケ後ナデ。外面からの穿孔4個のうち2個残存。裾部はラッパ状に開く。杯部と脚部の貼り付け痕確認。
101	2	A-B区北	土師器	高杯	復20.8			残8.8	密	含砂粒多	やや軟質	にぶ黄橙色	にぶ黄橙色	内面ナデ、一部横方向ハケ。外面ナデ。
102	2	C-D区北	土師器	高杯	19.0		11.8	13.2	密	含砂粒少	やや軟質	にぶ黄橙色	橙色	内外面ともハケ後ナデ。外面口縁部ミガキ。柱状部と裾部の境に外から内に貫通する円形透孔4個。
103	2	A-B区南	土師器	高杯	復21.0			残2.5	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面ともにナデ。口唇部は肥厚し下方に垂れる。内外面口唇部には櫛描きによる波状文が巡る。
104	2	A-B区北	土師器	高杯	復18.4			残11.4	密	含砂粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	内面杯部ナデ。外面杯部ナデ、脚部ミガキ。内外面口唇部に櫛描き波状文様。
105	2	A-B区北	土師器	高杯	16.0	21.4		残20.5	密	含砂粒多	やや軟質	にぶ黄橙色	にぶ黄橙色	内面杯部ナデ。外面杯部ナデ、脚部ミガキ。北九州市高島遺跡、山口県豊浦町吉永遺跡(平成9年度)類例。透孔3個。
106	2	土器溜まり	土師器	高杯		20.6		残11.8	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	内面杯部斜め方向ハケ。外面杯部横方向ハケ後縦方向ミガキ。北九州市高島遺跡、山口県豊浦町吉永遺跡(平成9年度)類例。
107	2	C-D区南	土師器	高杯				残4.8	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内面磨滅により調整不明。外面縦方向ハケ。
108	2	B-C区南	土師器	高杯				残9.0	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面ともナデ。
109	2	A-B区北	土師器	高杯				残12.8	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内面ヘラ状工具による調整痕。外面ミガキが薄くのこる。柱状部に杯部を貼り付けて成形。
110	2	C-D区南	土師器	高杯				残12.5	密	含砂粒少	やや軟質	にぶ橙色	浅黄橙色	内外面とも磨滅により調整不明。外側からの穿孔による円形透孔が3個。
111	2	C-D区南	土師器	高杯			残16.0	残12.9	粗	含砂粒多	軟質	にぶ黄橙色	にぶ黄橙色	内外面ともハケ後ナデ。柱状部と裾部の境外面に、径6mm、未貫通の円形透孔1個あり。
112	2	B-C区南	土師器	高杯				残12.8	密	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	内面脚部の裾部と外面杯部に横方向ハケ。外面脚部ハケ後ミガキ。円形透孔2段3方向。脚部と杯部は充填法。
113	2	B-C区南	土師器	高杯				残11.0	密	含砂粒少	やや軟質	にぶ黄橙色	にぶ黄橙色	内外面ともハケ後ナデ。内面脚部に上方と下方から指ナデ痕。
114	2	B-C区南	土師器	高杯				残9.2	密	含砂粒少	やや軟質	にぶ橙色	にぶ橙色	内面ナデ、外面ハケ後ナデ。柱状部と裾部の境に外面からの穿孔による円形透孔。下部欠損のため径不明。
115	2	A-B区南	土師器	高杯				残10.4	密	含砂粒少	硬質	灰白色	灰白色	外面ハケ後ミガキ。磨滅により詳しい調整不明。
116	2	C-D区南	土師器	高杯				残7.7	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	内外面ともハケ後ナデ。上下一対の円形透孔(未貫通)が3方向。位置・大きさ不統一。
117	2	C-D区南	土師器	高杯				残8.6	密	含砂粒少	硬質	浅黄橙色	橙色	内面ナデ、外面ハケ後ミガキ。
118	2	C-D区南	土師器	高杯			復11.6	残9.5	密	含砂粒少	やや軟質	黄橙色	黄橙色	内面ナデ。外面脚部ナデ。裾部ハケ後ナデ。裾部に外面からの穿孔による径9.5mmの円形透孔が3個残存。内1個完全、2個欠損。
119	2	B-C区南	土師器	高杯				残6.5	密	含細粒少	やや軟質	橙色	橙色	内面磨滅により調整不明。外面縦方向ハケ後ナデ。磨滅が著しい。
120	2	A-B区南	土師器	高杯				残6.5	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内面ナデ、外面ハケ後ナデ。
121	2	B-C区南	土師器	高杯				残7.1	密	含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	器面剥離のため調整不詳。外面に若干のハケ目残存。柱状部に杯部接合痕。
122	2	A-B区南	土師器	高杯				残6.2	密	含砂粒少	硬質	にぶ黄橙色	にぶ橙色	柱状部外面ハケ後ミガキ。
123	2	B-C区南	土師器	高杯				残5.8	密	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	器面剥離のため調整不明。
124	2	B-C区北	土師器	高杯				残4.9	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	内外面ともナデ。体部裾部の境に径1.2cm(下部欠損のため推定)の円形透孔。
125	2	土器溜まり	土師器	高杯				残5.2	密	含砂粒少	やや軟質	にぶ橙色	にぶ橙色	内外面ともナデ。
126	2	A-B区南	土師器	高杯				残5.0	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面ともにナデ。柱状部と裾部の境に外面からの穿孔による透孔(下部欠損)。
127	2	A-B区北	土師器	高杯				残4.0	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内外面ともナデ。柱状部と裾部の境に外面からの穿孔による円形透孔3個(下部欠損)。
128	2	A-B区南	土師器	高杯				残3.8	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内面ナデ。外面縦方向ハケ後ナデ。低脚高杯。

番号	出土地区	遺構	種類	器種	法量 (cm)				胎土		焼成	色調		調整・備考	
					口径	胴径	底径	器高	粗密	砂粒		内面	外面		
129	2	B-C区南	土師器	高杯				残3.5	密	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	淡黄色	内外面ともにナデ。低脚高杯	
130	2	B-C区北	土師器	器台	復16.6	復9.2	復15.2	18.1	密	含砂粒多	軟質	灰黄色	灰黄色	内面横方向ハケ。外面縦方向ハケ。	
131	2	C-D区北	土師器	器台	復17.4	復9.6	復18.4	18.3	密	含砂粒多	軟質	褐色	褐色	内面受部斜め・縦方向ハケ。脚部斜め方向ハケ。外面縦方向ハケ。受部に口径の1/3程度のえぐり切り取り箇所あり。	
132	2	B-C区北	土師器	器台	復14.4	復8.2	復17.8	21.8	密	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	淡黄色	内面受部脚部とも横方向ハケ。外面脚部右上がり斜め方向タタキ。受部にえぐり切り取り箇所あり。	
133	2	B-C区北	土師器	器台		復8.0		残7.6	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面ともにハケ。内面くびれに近い所に指頭圧痕。受部にえぐり切り取り箇所あり。	
134	2	C-D区北	土師器	器台	復18.2			残4.5	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	内面横方向ハケ。外面縦方向ハケ。磨滅が激しい。	
135	2	B-C区南	土師器	器台		復8.8	復14.8	残12.8	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面ともナデ。胴部に指頭圧痕。内面裾部にヘラケズリ痕。	
136	2	C-D区南	土師器	器台			復15.8	残7.5	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	内面磨滅のため調整不明。外面底部ナデ、他ハケ。	
137	2	B-C区南	土師器	器台			9.8	残5.5	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面ともナデ。外面指頭圧痕。	
138	2	B-C区北	土師器	鼓形器台			16.8	残5.6	密	含砂粒多	やや軟質	淡橙色	淡橙色	内面横方向ケズリ、外面回転ナデ。	
139	2	C-D区北	土師器	鉢	9.3			3.3	密	含砂粒少	やや軟質	灰黄色	灰黄色	内外面ともにナデ。手捏ねによる成形。底部丸底。	
140	2	B-C区南	土師器	鉢	復9.6			残6.0	密	含細粒少	軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面ともハケ後ナデ。	
141	2	B-C区南	土師器	鉢				残3.9	粗	含砂粒多	軟質	にぶい黄褐色	橙色	内外面ともにナデ。外面頸部と脚部の境目に指頭圧痕。低脚付。	
142	2	A-B区南	土師器	鉢			5.7	残3.1	密	含細粒少	やや軟質	灰黄褐色	灰黄褐色	内面横ナデ。外面指押さえ後ナデ。低脚付。	
143	2	A-B区北	土師器	鉢			復7.4	残2.5	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面ともナデ。低脚付。	
144	2	B-C区南	土師器	鉢	12.8			3.9	6.0	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい黄褐色	内面ナデ、外面ハケ後ナデ。外面底部凸レンズ状の底。内面鉄分の付着物多。左右のゆがみ大。
145	2	C-D区南	土師器	鉢	復20.0			残6.7	密	含細粒少	やや軟質	黄灰色	にぶい黄褐色	内面磨滅のため調整不明。外面タタキ痕あり。	
146	2	土器留まり	土師器	鉢	復17.6			残3.7	密	含砂粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	内面斜め方向ハケ後ナデ。外面斜め方向ハケ後ミガキ。	
147	2	C-D区南	土師器	鉢	復29.6		復4.0	残8.2	密	含細粒少	やや軟質	灰白色	にぶい黄褐色	内外面ともにハケ。底部はわずかに平たいが、底部から胴部への立ち上がりが一様でない。口縁部がゆがむ。	
148	2	A-B区南	土師器	鉢	13.8	13.4		11.0	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内面口縁部から胴部横方向ハケ後ナデ。底部指頭圧痕。外面口縁部ナデ、胴部縦・斜め方向ハケ後ナデ。小型丸底鉢。	
149	2	B-C区北	土師器	鉢		10.9		残9.0	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	内面ナデ、外面縦方向ハケ。小型丸底鉢。	
150	2	B-C区南	土師器	鉢	復8.0	復9.0		復8.6	密	含砂粒多	やや軟質	褐灰色	褐灰色	内外面ともナデ。小型丸底鉢。	
151	2	B-C区南	土師器	鉢	復8.8	復9.4		残5.0	粗	含砂粒多	軟質	灰黄色	灰黄色	内外面ともにナデ。器厚は薄い。小型丸底鉢。	
152	2	B-C区北	土師器	ニチア7鉢	復7.3	7.8		4.2	粗	含砂粒多	軟質	橙色	浅黄褐色	内外面ともにナデ。左右のゆがみ大。	
153	2	A-B区南	土師器	ニチア7鉢		復5.0		残2.3	密	含細粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも指頭圧痕あり。	
154	2	灰オーブ	須恵器	杯蓋				残1.5	密	含細粒少	硬質	灰白色	灰白色	内外面ともに回転ナデ。	
155	2	灰オーブ	須恵器	杯身				残1.3	密	含細粒少	硬質	灰色	灰色	内外面ともに回転ナデ。	
156	2	灰オーブ	須恵器	高杯				残4.0	密	含細粒少	硬質	オリーブ灰色	オリーブ灰色	内外面とも回転ナデ。内面粘土接合痕あり。	
157	2	灰オーブ	須恵器	甕				残6.2	密	含細粒少	硬質	灰黄色	灰色	内面同心円文当て具痕、外面タタキ。	
158	2	灰オーブ	須恵器	甕				残9.9	含	細粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面同心円文当て具痕、外面タタキ。	
159	2	灰オーブ	土師器	鍋				残4.2	密	含細粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面磨滅により調整不明。外面口縁部に横方向ナデ。	
160	2	灰オーブ	土師器	皿				残1.3	密	含砂粒少	やや軟質	灰色	にぶい黄褐色	内外面ともにナデ。高台欠損。	
161	2	灰オーブ	土師器	杯		復5.6		残1.4	密	含細粒少	やや軟質	浅黄色	浅黄色	内外面とも回転ナデ。外面底部に回転糸切り痕あり。	
162	2	表採	土製品	土玉					密	含細粒少	やや軟質	褐灰色	褐灰色	直径1.1cm。	
163	2	灰オーブ	石製品	石鍋				残2.2	密		硬質	灰白色	灰白色	内外面ともにノミ加工痕。	

V ま と め

1 調査成果の概要

武久川下流域条里遺跡の発掘調査の結果、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭にかけての型式の土器を伴う一括廃棄と見られる土器溜まりが見つかり、祭祀が行われた後に土器が捨てられたものと考えられ、近隣に集落が営まれていたことをうかがわせる。なお、古代の条里制そのものにかかわる遺構や遺物は確認されなかった。

検出された主な遺構は、土器溜まり1箇所、掘立柱建物跡2棟、土坑3基、溝1条、柱穴・杭穴126個である。出土した主な遺物は、弥生時代後期終末（弥生土器）から古墳時代前期初頭（土師器）の時期（いわゆる庄内式併行期）の土器が中心を占め、その他に古代・中世の須恵器・土師器・土製品・石製品がごく少量出土している。船を象徴化したものではないかと思われる線刻文様を伴う壺1点が見つかり、この時期の土器としては類例が少なく、祭祀とのかかわりなど興味を持たれる資料である。

2 遺構について

今回の調査で確認された中心的遺構としては、2地区南西隅土器溜まりがある（第28図）。遺物の平面的な広がりや状況とブロック状の土器集積ならびに原形を留める土器片が多い点、黒褐色土の10cm程度の厚さの同一層内に、時期を画するような明確な層序差やレベル差を伴わず出土している点などから、さほどの時間的隔たりがない一括性の高い廃棄土器溜まりと判断される。地形的には、南西方向に緩やかに傾斜しながら落ち込んで行く自然地形の斜面に沿うように列状に、北東方向から南西方向に使用後の土器を一括廃棄した状況がうかがわれる。現在の武久川の左岸に隣接しており、土器が廃棄された南西方向に落ち込む地形は、河岸や水辺に連なっていく斜面と考えられる状況にある。2地区のすぐ北側に隣接する地点で、下関市教育委員会によって平成14年4月に民間営業店舗の建て替えに伴う工事立会調査が実施され、その際に古墳時代前期と報告される竪穴住居跡2軒が検出され、土師器が出土している^(註1)。この際の調査所見と今回の調査によると、武久川の東から西への流れに沿って、旧地表面も標高が次第に低くなり（第3図）、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭にかけての遺構の分布も遺物の出土も確認されず、基本的に、2地区以西の低地には集落が広がっていた形跡は確認されていない。2地区の東側は武久川上流方面であり、南東側は丘陵の緩斜面にあたることから、地形的に標高が高い2地区の東側から南東側にかけて集落が立地していたものと推定される。

出土土器についてみると、煮炊き用の甕が半数以上を占めるが、供献用の高杯が比較的多く出土しており、器台や小型の鉢・ミニチュア土器、穿孔土器など祭祀にかかわる器種の割合が高い。また、船を象徴化したとも解釈される線刻文様が施された祭祀用とみられる特殊な壺（84）も相伴している。

さらに、高杯（105・106）は、高島遺跡など北九州市を中心とした豊前地域に多く分布するタイプである。貝元遺跡（大分県豊後高田市）出土のこのタイプの高杯について、周辺地域出土の類例を集成し分析した結果、住居・墓・祭祀遺構などで、1遺構に1個体ずつしか出土しない傾向が見い出され、ほかの高杯に比べて何らかの優位性や遺物自体に祭祀の意味合いが強い点が考察されている^(註2)。こ



第28図 2地区南西隅土器溜まりの土器出土位置図

うした点を踏まえると、2地区土器溜まりの高杯（105・106）は、2世帯または2集団以上のあるいは2回以上の特別の意味合いを持つ祭祀行為が行われたことを想定させる。

以上から、2地区の土器溜まりは、集落辺縁に立地する河川や沼沢・沿岸などの水辺での集落の人々による祭祀に伴って使用された後に土器が一括廃棄された遺構と判断される。山口県内では、この時期の水辺の祭祀に伴う土器溜まりと考えられるものとして、樫野川右岸の旧朝倉川の扇状地に位置する湯田楠木町遺跡^(註3)（山口市）の土器捨て場跡などが知られる。

次に、この土器溜まりでの主な土器の出土位置を、トレンチ区画に分割して示したものが第28図である。土器がブロック状に集積して出土しているトレンチA－B区北、A－B区南では、甕・壺・高杯・鉢などの各器種がセットで共伴している。また他の区画でも、器種ごとに見ると、比較的古い型式要素を持つ土器と新しい型式の土器が共伴している。地域的にも、在地系のほかに、北部九州系^(註4)、山陰系^(註5)、畿内系^(註6)の各地域の特色を反映して在地で製作されたと見られる土器が共伴している。こうした状況は、土器製作に反映された情報源において、時間的にも空間的にも幅と広がりを持つ型式差のある土器群が同時期に相伴って祭祀行為の際に使用されていたことを示すものと考えられる。

異なる位置の土器のブロック状集積が、どのような状況を意味するかについても触れておきたい。可能性としては、①集落内の世帯・親族などの異なる特定単位集団に帰属するものである場合 ②同時祭祀儀礼の中で、それぞれが特定の意味を持つ祭祀行為を反映したものである場合 ③短い期間内の複数回の祭祀行為後、一括で異なる位置に土器が廃棄されたものである場合 などが想定される。

今回の調査では、範囲がごく限られ、集落全体での住居その他の遺構や祭祀場所、広場などとの位置関係が明らかではないため、この廃棄土器溜まりの明確な性格やその背後にある集団の実態、祭祀行為のあり方などの問題を探る上での判断材料を得るまでには至らなかった。今後、より詳しい情報を得られる同時期の類例が加わることにより、この遺構の性格がより明らかになることが望まれる。

3 遺物について

土器溜まり出土土器の器種としては、甕・壺・高杯・器台・鉢・ミニチュア土器などがある。器種構成を見ると、甕が5割以上を占める。ついで壺・高杯が多く、鉢については、口縁部・底部破片であるために壺・甕などの器種判別が難しいものもあるが、数としては少ない傾向にある。供献用の高杯の出土割合が比較的高く、器台や小型の鉢、ミニチュア土器、穿孔土器など祭祀にかかわる器種も一定割合出土している。また、船を象徴化したとも見られる3本の半弧状の線刻文様が胴部に描かれた特殊な壺（84）も共伴しており、全体として、祭祀にかかわる一括廃棄遺物としての傾向がうかがわれる。

各器種別に代表的な型式ごとに分類したのが第29図である。甕は、大きさで小型、中型、大型に分けられる。全体の形態的特徴では、口縁部は、くの字形に外反し、鋭角と鈍角のものがあり、山陰系では複合口縁となる。口縁部立ち上がりは、まっすぐ立ち上がるもの、外湾するもの、内湾するものがある。口縁端部は、丸く収める、面を持つ、はね上げるタイプがある。胴部については、長胴形と球胴形がある。底部については、①厚い平底で、直線的に胴部が立ち上がるタイプ（51・54）、②薄い平底で、やや内湾しながら胴部が立ち上がるタイプ（49・55）、③ほぼ丸底で、やや内湾しながら胴部

が立ち上がるタイプ（57・58）がある。

小型では、長胴形で、わずかに平底が残るタイプ（11）、胴部が張り、球胴形で、ほぼ丸底に近いタイプ（1）がある。

中型では、長胴形タイプと球胴形タイプがあり、上述したような口縁形態の特徴が見られる。なお、13・14は、器壁が薄く、はね上げ口縁の特徴を持ち、庄内式甕の口縁に類似する。30は平底のなごりを痕跡的に残す丸底で、胴部が張った典型的な球形を呈する甕で、布留式甕の形態につながる前段階に位置づけられる在地の甕と考えられる。

大型では、長胴形タイプ（42・45・46）で、在来の伝統的型式を踏襲し、46のように凸レンズ状の平底を有すると見られる。

山陰系の複合口縁甕（60・61）も少量出土している。

甕の型式編年に従えば、長胴形→球胴形、平底→丸底の変化が指摘されているが、こうしたセット関係で出土した中に、形式的には変化の幅がある数型式の甕が併存している点は、注目される。

壺は、複合口縁壺系と直口・広口壺系の2種類がある。複合口縁壺系では、口縁部上半が屈曲部から、内側に折れるものと外反するものがある。頸部や肩部に粘土突帯を貼り付けたものや口縁部・肩部・粘土突帯に櫛描き文様や刻み目文様を施したものがある。これらは、弥生時代後期の土器の特徴を継承残存させている。直口壺（74）の底部は丸底である。底部については、厚い平底（87・88・89）とやや平底の痕跡を残す丸底（92・94・93）がある。

高杯は、有稜高杯（96・101・102）、有段高杯（104）、椀形高杯（105）がある。有稜高杯は、稜から先の口縁部が長く外反するタイプで、時期が下るものである。真っ直ぐ立ち上がるタイプ（101・102）は短脚で、有段高杯は畿内系をモデルにしたものである。椀形高杯は、豊前など北部九州で多く出土しているタイプである。山口県内では、響灘沿岸の吉永遺跡^(註7)や川棚条里跡^(註8)（大浦・台地区^(註9)）での出土がある程度で、類例が少ない。脚部については、長脚から短脚まであり、中空と中実の両タイプが見られる。畿内系の影響が見られるものがある。128のような低脚高杯も見られる。

器台は、豊前地域に多く出土するえぐり入りタイプがある（131・132）。低い杯部が上に付く小型の器台（137）や山陰系の鼓形器台（138）もある。

鉢は、大型品（147）の出土は少なく、小型品が少量出土している。器高の低い浅鉢や畿内系の小型丸底鉢の形態を有するもの（148）や祭祀用を思わせる器壁の薄い小型品（150）がある。小型の低脚付鉢（141・142）もある。

ミニチュア土器（152・153）は手づくねの鉢形を呈するタイプである。

製作・調整技法の特徴的傾向としては、各器種とも器壁内外面にハケ調整を施したものが多くを占める。ナデ仕上げは、全般を通じて広く行われている。タタキは、甕・壺・器台などの器壁外面に施されているものがあるが、割合は少ない。器壁の厚いものが多く、ケズリは、甕や器台（鼓形器台）の器壁内面に一部施されているものの、割合は低い。ミガキは、高杯を中心に、一部の壺などに施されている。これらのことから、基本的には、在来のハケやナデ調整技法が踏襲され、タタキやケズリなどの調整技法の導入割合が低いことがわかる。

地域間交流については、上述したように在来的要素を主体とする土器様相に、畿内的要素を中心に、

北部九州や山陰系の要素が入ってきつつある状況がうかがわれ、他地域との交流の実態が土器に反映されている。ただし、搬入品そのものと見られる個体はなく、他地域の土器様相の一部を取り入れてあくまでも在地で製作された土器が主体を占める。

今回の一括廃棄資料の特徴と意義をまとめると、上述のように、型式学的には、弥生時代後期終末の古い様相を持つタイプから古墳時代前期初頭の新しい様相を持つタイプまでの数種類に分類できるバリエーションのある土器群がほぼ同時期と見られる一括資料として出土した点である。土器分類と編年において、個別の細分化された土器型式と時間軸をダイレクトに結びつける傾向に陥りがちである。しかし、今回の資料から見ると土器型式の変化と編年においては、集団内構成員間の世代間ギャップや集団の閉鎖性、同一地域内・近隣地域・畿内地域などの他集団との情報交換のタイムラグなどのさまざまな要因で、同時期に古い様相の土器型式と新しい様相の土器型式が併存して使用され、廃棄される状況も十分考慮しておく必要があることを提起している。ただし、今回の資料は、あくまでも「廃棄」時の一括資料であり、「使用」時の一括資料と異なり、取り扱い・解釈には慎重を要することはいうまでもない。

山口県内における弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭のいわゆる庄内式併行期の土器の型式分類や編年については、これまでさまざまな案が出されている。^(註10)

この時期の指標となる土器を出土した遺跡としては、山口県東部（周防）では、吹越遺跡^(註11)、湯田楠木町遺跡^(註12)、吉田遺跡^(註13)、朝田墳墓群^(註14)、下右田遺跡^(註15)などが挙げられる。山口県西部（長門）では、土井ヶ浜遺跡^(註16)、吉永遺跡（Ⅲ一東地区）^(註17)、川棚条里跡^(註18)、柳瀬遺跡^(註19)、秋根遺跡^(註20)、下七見遺跡^(註21)などがある。武久川下流域条里遺跡の土器溜まりの一括廃棄土器資料は、これらの時期と重なり、その間隙を埋める様相を持つ資料ともいえる。

今回の出土土器が一括性の高いセット資料として、この遺跡の特性を踏まえながら、山口県西部（長門地域）での編年作業や山口県東部（周防地域）とのかかわり、さらには、北部九州、山陰、畿内地域の資料との比較検討の上で有効に活用されるとともに、それによって今後、武久川下流域条里遺跡の性格やこの地域の歴史の中での位置づけが、より明らかになることが期待される。

（補註）土器の時期認識について

土器様相を通じての時期認識としては、今回出土した土器溜まりの土器群は、庄内式土器を土師器として認識する立場にたつと、先進地域の畿内が古墳時代を迎えた段階に、この地域においては、あくまでも在来の伝統的弥生社会の土器様式（弥生土器）を主体とする枠組みにありながら、先進畿内地域の要素・情報を受け入れつつある段階の土器様相として理解しておきたい。すなわち、絶対年代としては、畿内で庄内式土師器の段階に入った時期にありながらも、この地域の枠内で考えた場合には、あくまでも伝統的弥生社会の土器様式に収まる土器、いまだ古墳時代的土器様相がセット関係の主体をなすに至らない段階の土器、すなわちローカルな範囲内での土器様式としては弥生土器の範疇で捉えられる最終段階に位置づけられる土器として理解しておきたい。すなわち中央の畿内を時間軸の中心に据えて見た場合は、「土師器」として、西部長門地域の範囲内を時間軸の中心に据えて見た場合は、「弥生土器」として捉えられるものと考えたい。

なお、「第3表 遺物観察一覧表」では、土器溜まり一括出土土器を「土師器」として表記している。これは、土器様相に弥生土器的な古い要素とともに、土師器的な新しい要素の導入が認められる点を積極的に評価する点や畿内の土器編年との絶対年代上の整合性などを勘案した上での判断であるが、上述の時期認識を踏まえての表記である点に留意していただきたい。

註記

- (註1) 立会調査の調査内容、資料、出土遺物等については、下関市教育委員会の松永博明氏よりご教示いただいた。
- (註2) 吉田 和彦 『貝元遺跡出土の「無頸脚付壺」について』(豊後高田市教育委員会 『高宇田条里遺跡 高宇田条里遺跡貝元地区』 2000年)
- (註3) 内田 悟編 『山口市字楠木町 湯田中学校造成地湯田楠木町第Ⅰ地区遺跡発掘調査概報』 山口市教育委員会1975年
田畑 直彦 「村篇Ⅲ 山口市湯田楠木町遺跡出土の古式土師器」(山口大学埋蔵文化財資料館 『山口大学構内遺跡調査研究年報XIV』 2000年)
- (註4) 久住 猛雄 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」(庄内式土器研究会 『庄内式土器研究XIX』 1999年)
- (註5) 花谷めぐむ 「山陰古式土師器の型式学的研究—島根県内の資料を中心に—」(島根考古学会 『島根考古学会誌』 4 1987年)
- (註6) 奈良県立橿原考古学研究所 『矢部遺跡』 奈良県教育委員会 1986年
一瀬 和夫 「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」(『大阪文化財論集—財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集—』1989年)
杉本 厚典 「河内における弥生時代中期末から古墳時代初頭にかけての土器の型式編年と様式」(財団法人大阪市文化財協会 『大阪市文化財協会研究紀要』第4号 2001年)
財団法人八尾市文化財調査研究会 『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書』 2003年
大阪府文化財センター 『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』 2003年
- (註7) 註2に同じ。
- (註8) 藤川 貴和編 『吉永遺跡—平成9年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—』 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 1998年
- (註9) 藤本 有紀編 『川棚条里跡1(大浦・台地区)』 豊浦町教育委員会 2000年
- (註10) 山本 一朗 『山口県の土師器・須恵器—集成と編年—』 周陽考古学研究所 1981年
濱崎 真二編 『柳瀬遺跡』 下関市教育委員会 1997年
石井 龍彦 「山口県西部の弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器について」(財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 『陶埴』第13号 2000年)
田畑 直彦 「周防・長門における庄内式併行期の土器様相」(庄内式土器研究会 『庄内式土器研究XXV』 2001年)
- (註11) 小野 忠熙・山本 一朗・乗安 和二三 『吹越遺跡第2次調査概報』 平生町教育委員会 1972年
- (註12) 註3に同じ。
- (註13) 河村 吉行 「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」(山口大学埋蔵文化財資料館 『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』 1990年)
- (註14) 山口県教育委員会 『朝田墳墓群Ⅳ・糸米遺跡』 1979年
山口県教育委員会 『朝田墳墓群Ⅶ』 1986年
- (註15) 原田 光朗他編 『下右田遺跡第9・10・13・14・15・17次発掘調査概報』 防府市教育委員会 1999年
- (註16) 金関 丈夫・坪井 清足・金関 恕 「山口県土井ヶ浜遺跡」(日本考古学協会編 『日本農耕文化の生成』第1冊 本文篇』 東京堂 1961年)
- (註17) 西田 宏編 『吉永遺跡(Ⅲ—東地区)』 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 1999年
- (註18) 藤本 有紀編 『川棚条里跡1(大浦・台地区)』 豊浦町教育委員会 2000年
鈴木 卓編 『川棚条里跡(木舟地区・田尻地区)』 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 2001年
- (註19) 濱崎 真二編 『柳瀬遺跡』 下関市教育委員会 1997年
- (註20) 伊東 照雄・山内 紀嗣編 『秋根遺跡』 下関市教育委員会 1977年
- (註21) 村岡 和雄編 『下七見遺跡Ⅰ』 菊川町教育委員会 1989年

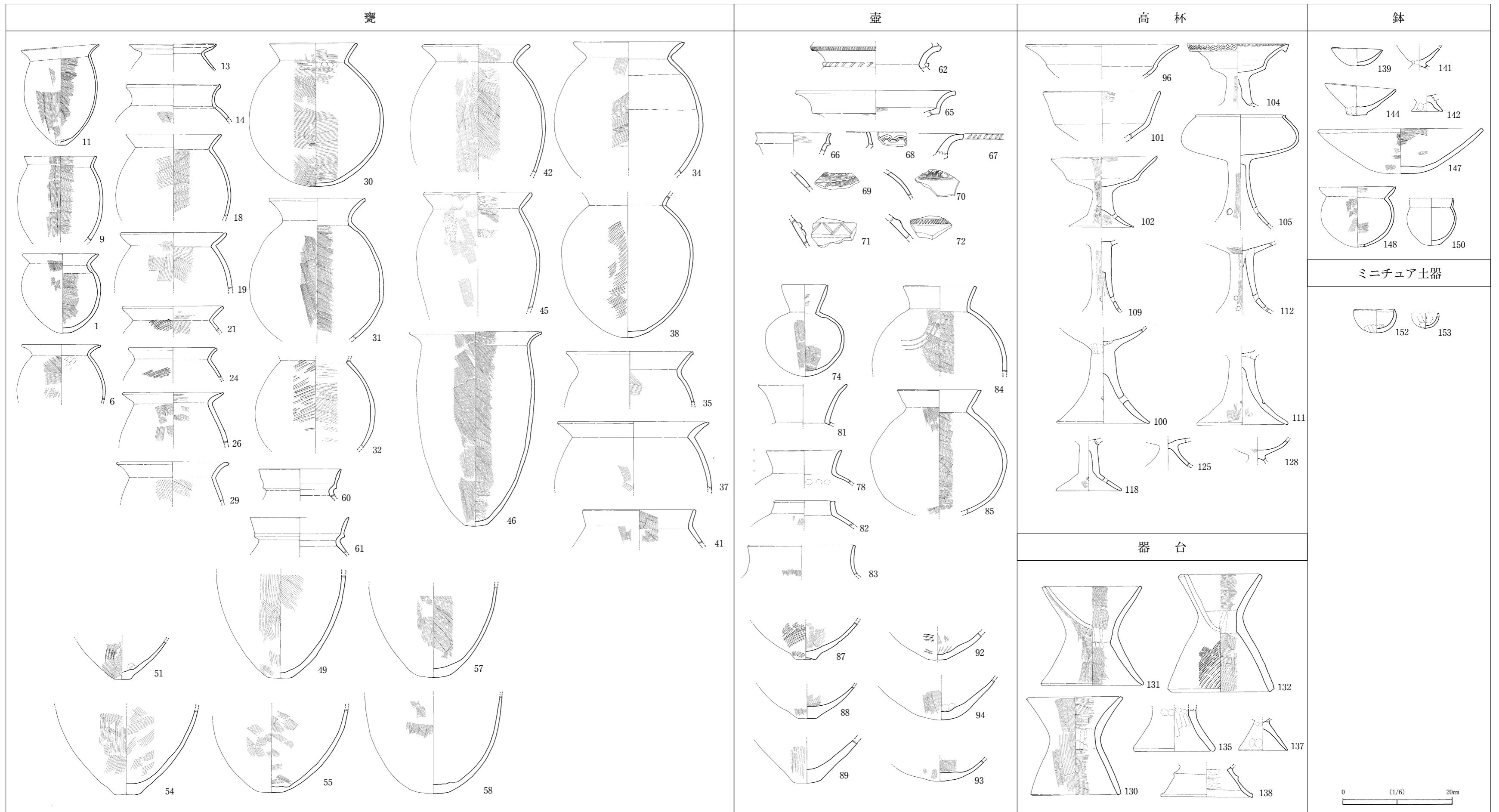


図 版

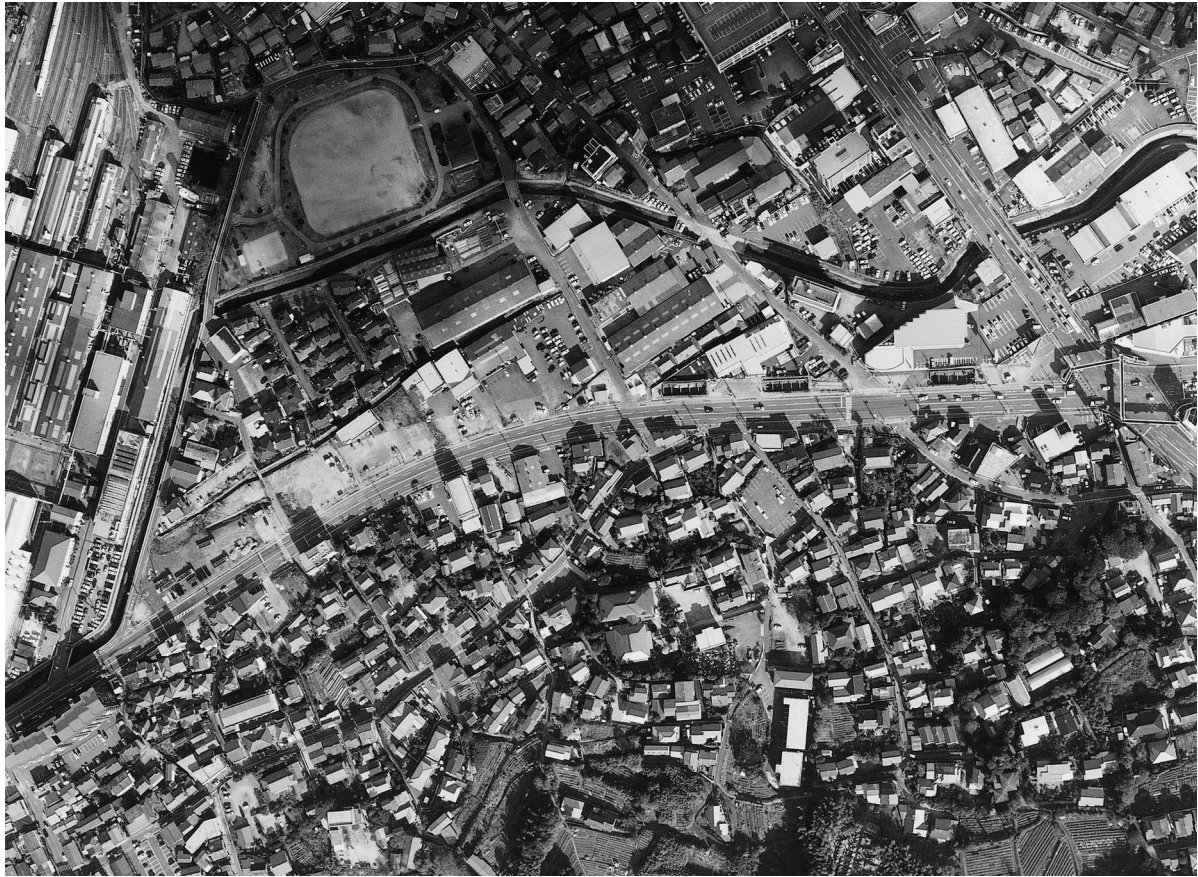


1 調査区遠景①（北西から）



2 調査区遠景②（西から）

図版 2



1 調査区全景①



2 調査区全景②



1 1地区発掘状況（南から）



2 1地区遺構検出状況（南から）

図版 4



1 3地区発掘状況（東から）



2 3地区遺構検出状況（東から）



1 4地区全景（西から）



2 4地区全景（東から）



3 4地区遺構検出状況（西から）



4 4地区遺構検出状況（北西から）



5 4地区掘立柱建物跡 SB401（西から）

図版 6



1 5地区全景（西から）



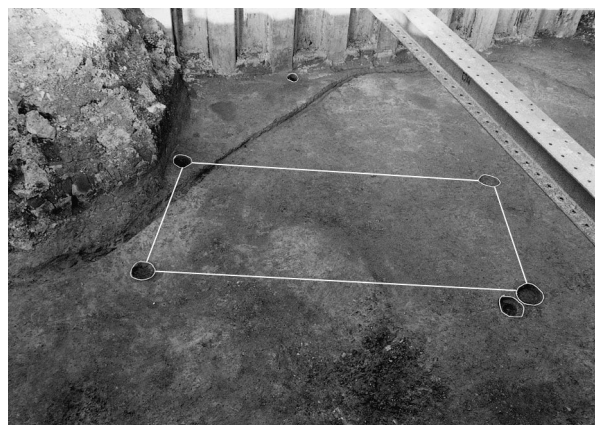
2 5地区遺構検出状況（西から）



3 5地区遺構検出状況（北から）



4 5地区遺構検出状況（東から）



5 5地区掘立柱建物跡 SB501（南から）



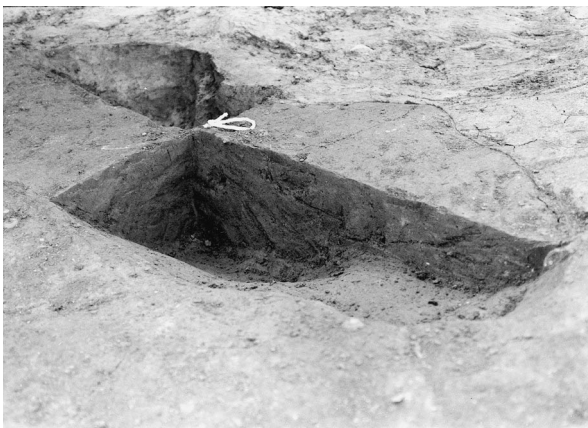
1 2地区全景（西から）



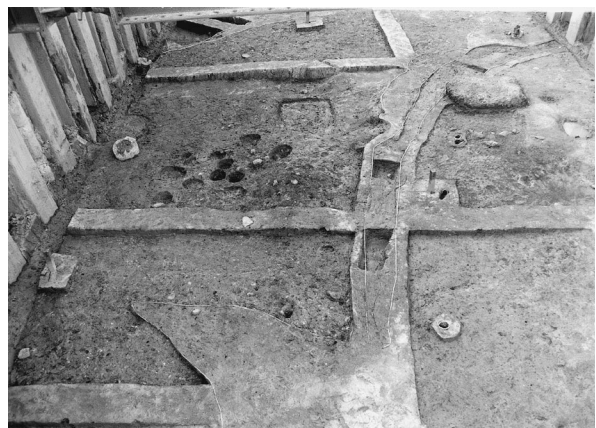
2 2地区全景（東から）



3 2地区遺構検出状況（東から）



4 2地区土坑 SK225（北東から）



5 2地区遺構検出状況（東から）

図版 8



1 2地区南西隅土器溜まりの全体出土状況（東から）



2 2地区南西隅土器溜まりの全体出土状況（北西から）



1 2地区南西隅土器溜まりの全体出土状況（北から）



2 2地区南西隅土器溜まりのトレンチ A - B 区出土状況（西から）

図版10



1 2地区南西隅土器溜まりのトレンチ A - B 区出土状況（南から）



2 2地区南西隅土器溜まりのトレンチ A - B 区出土状況（北から）

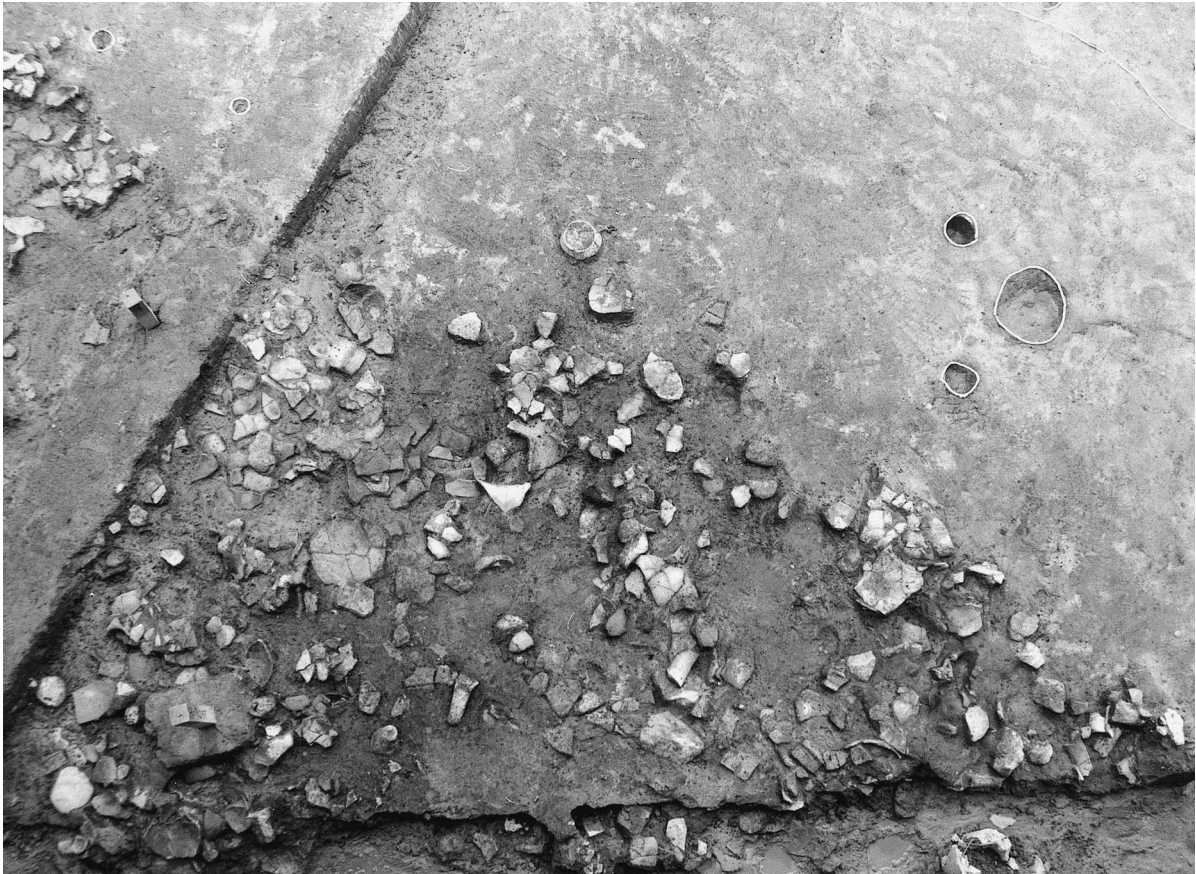


1 2地区南西隅土器溜まりのトレンチ A-B区およびB-C区出土状況（南から）

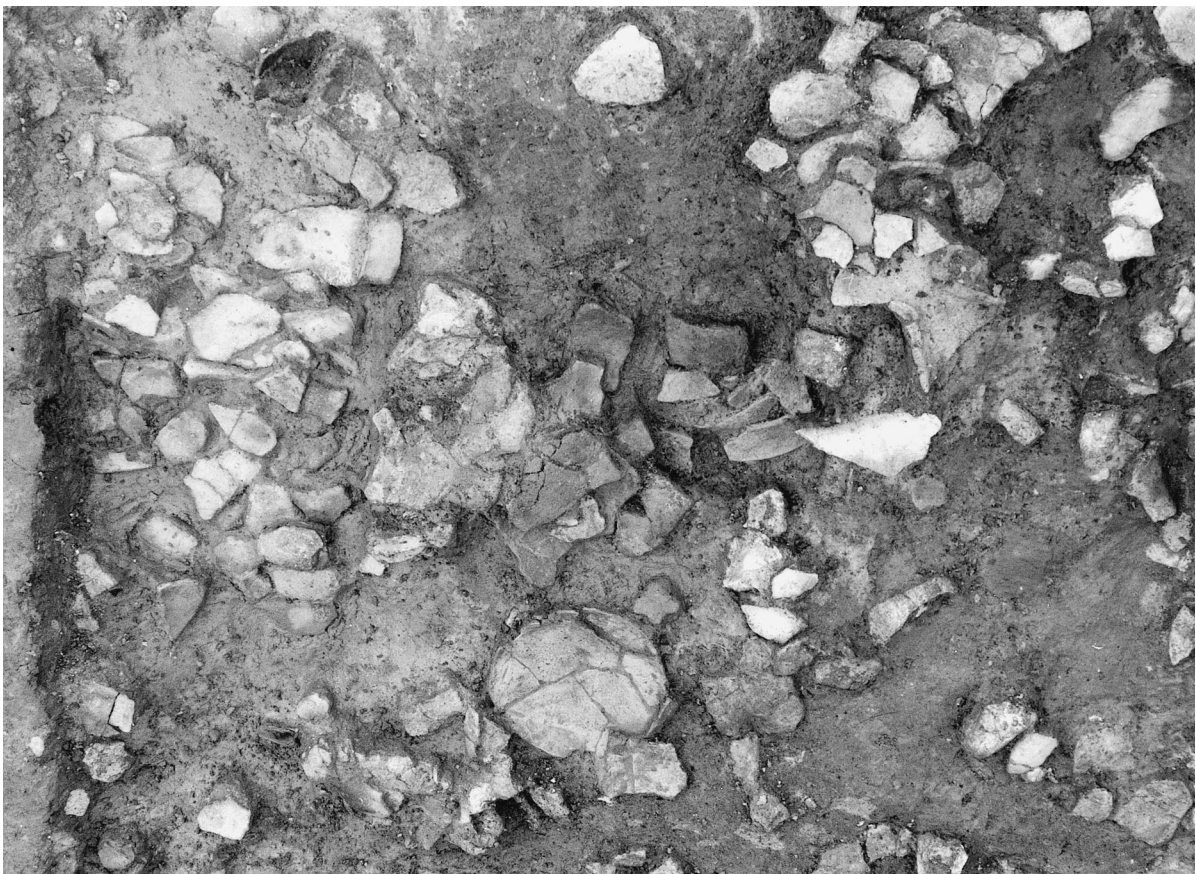


2 2地区南西隅土器溜まりのトレンチ A-B区南側出土状況（北から）

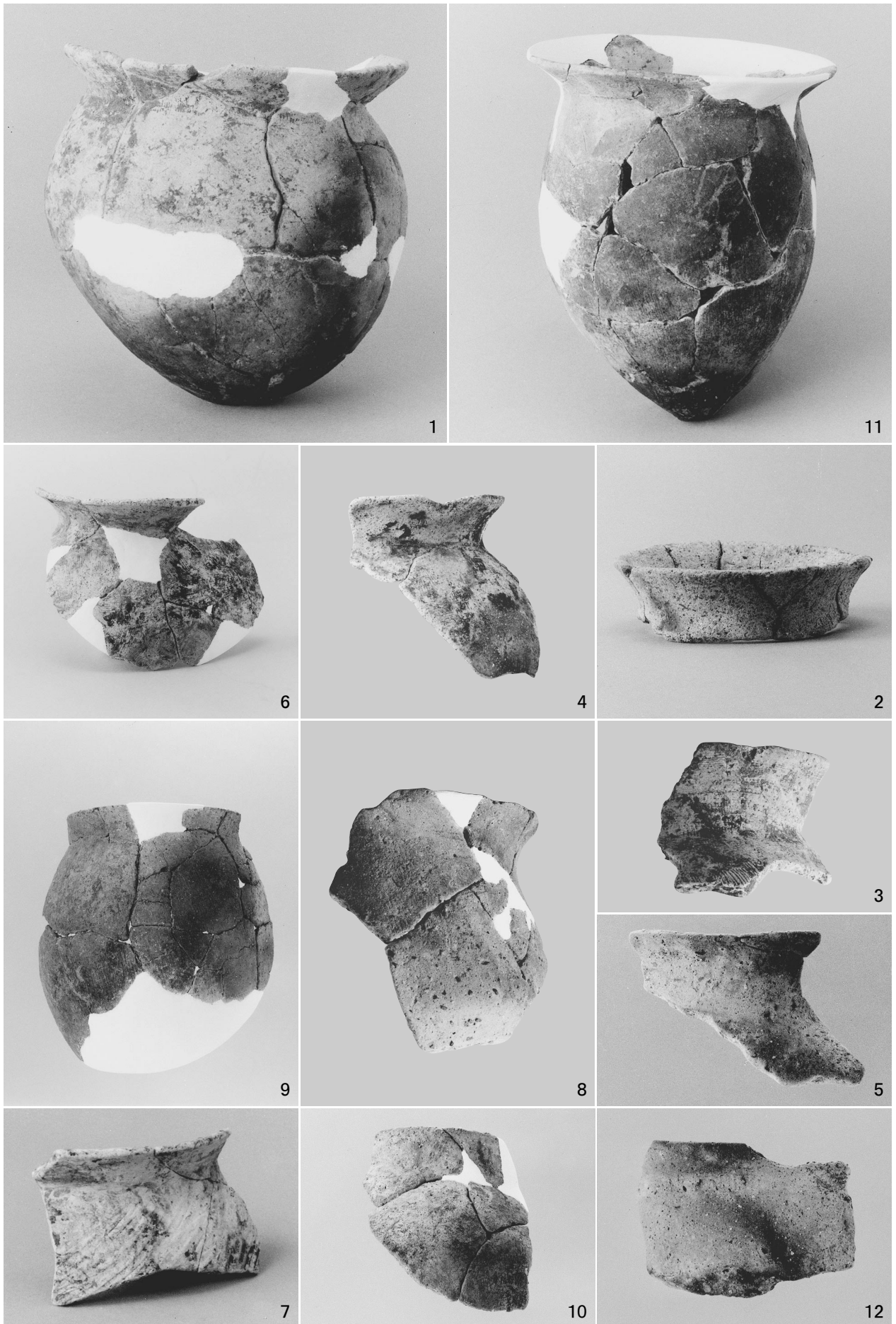
図版12



1 2地区南西隅土器溜まりのトレンチC-D区出土状況（南から）

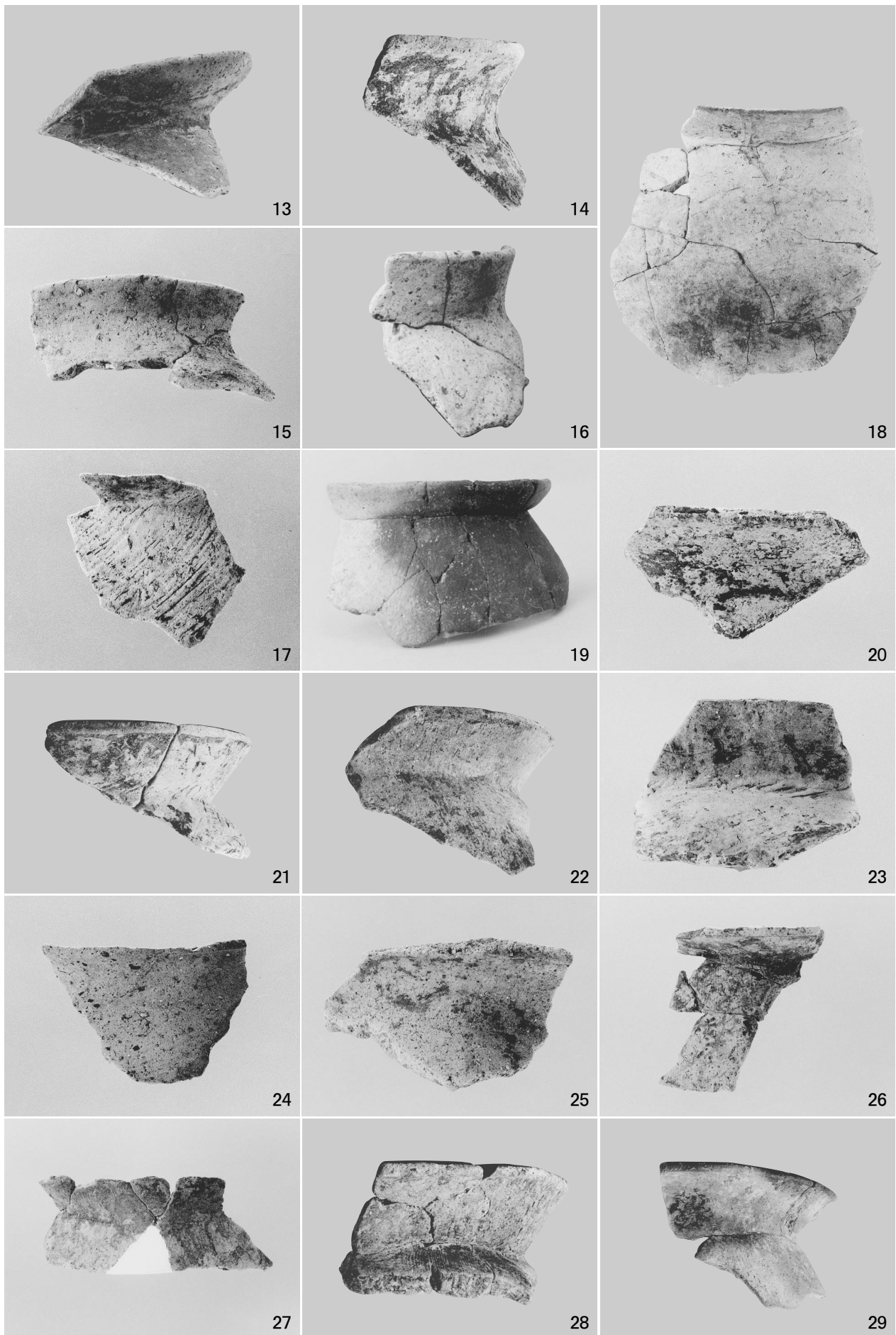


2 2地区南西隅土器溜まりのトレンチC-D区南側出土状況（南から）

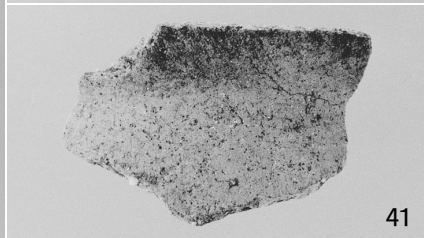
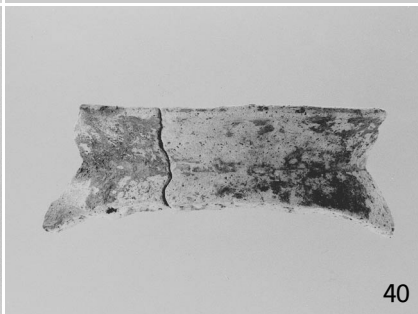
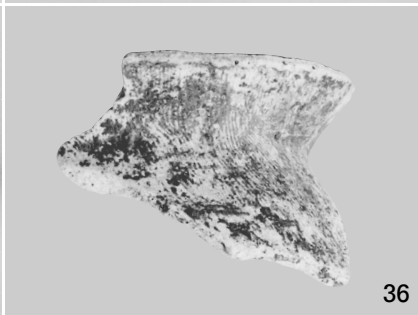
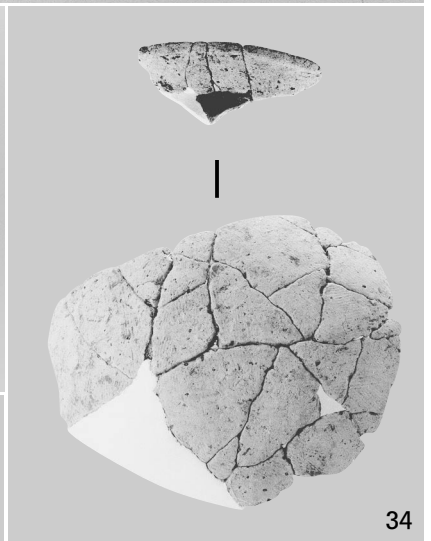
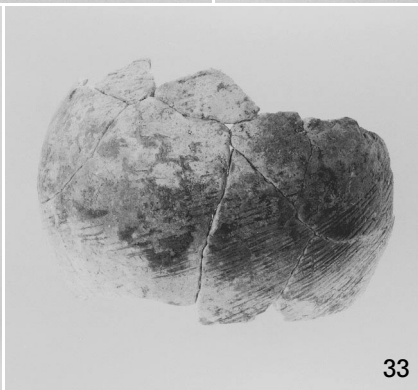
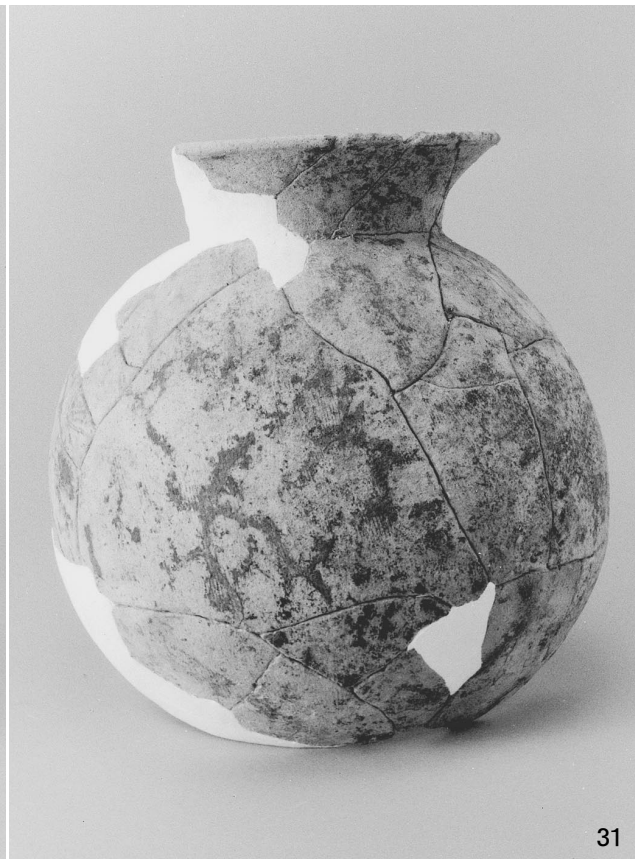


出土遺物①（甕）

図版14

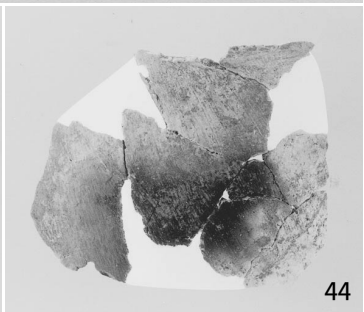
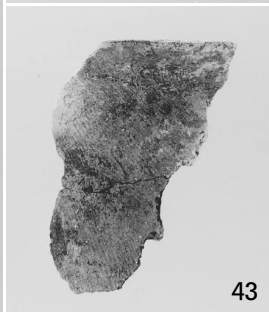


出土遺物②（甕）

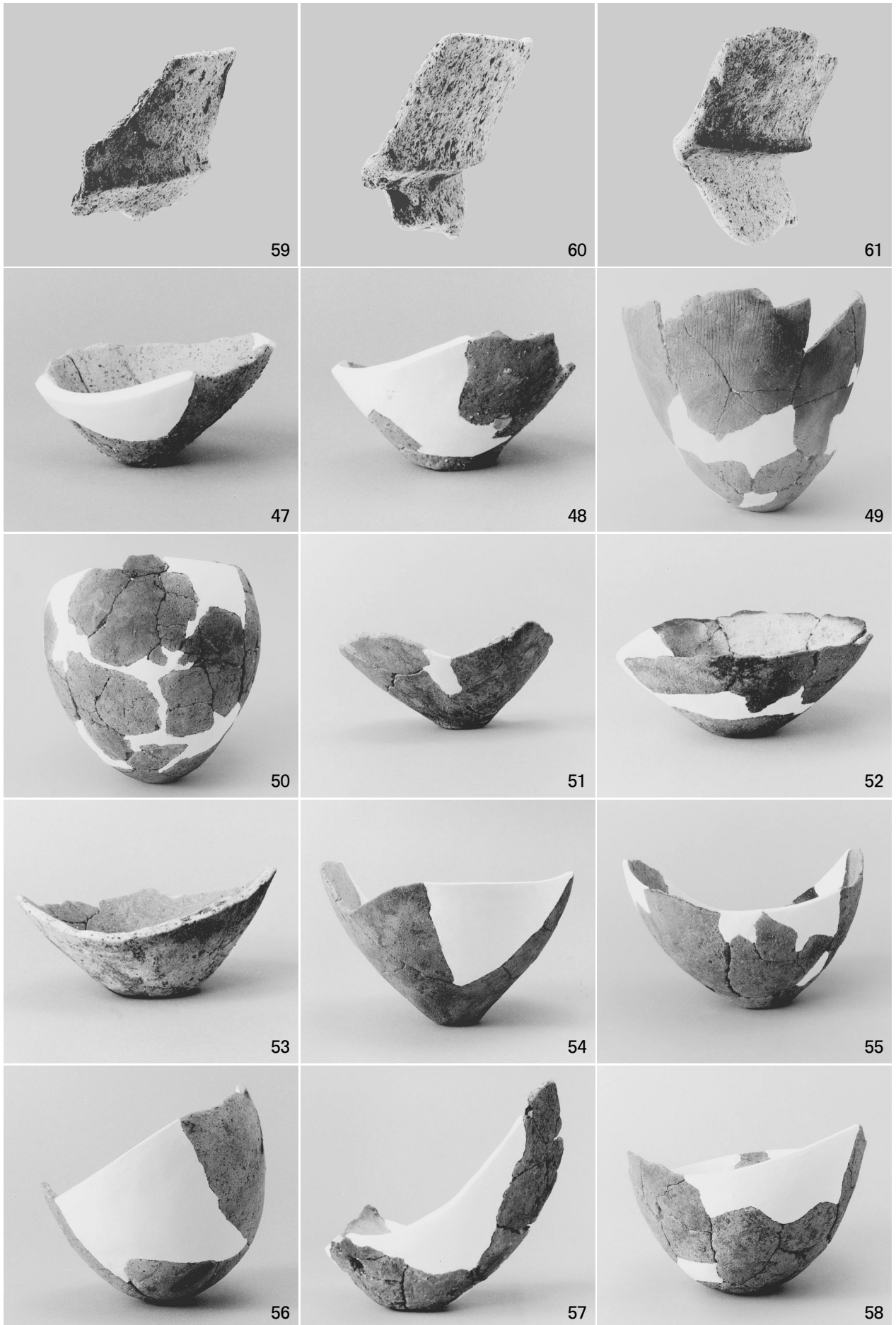


出土遺物③（甕）

図版16

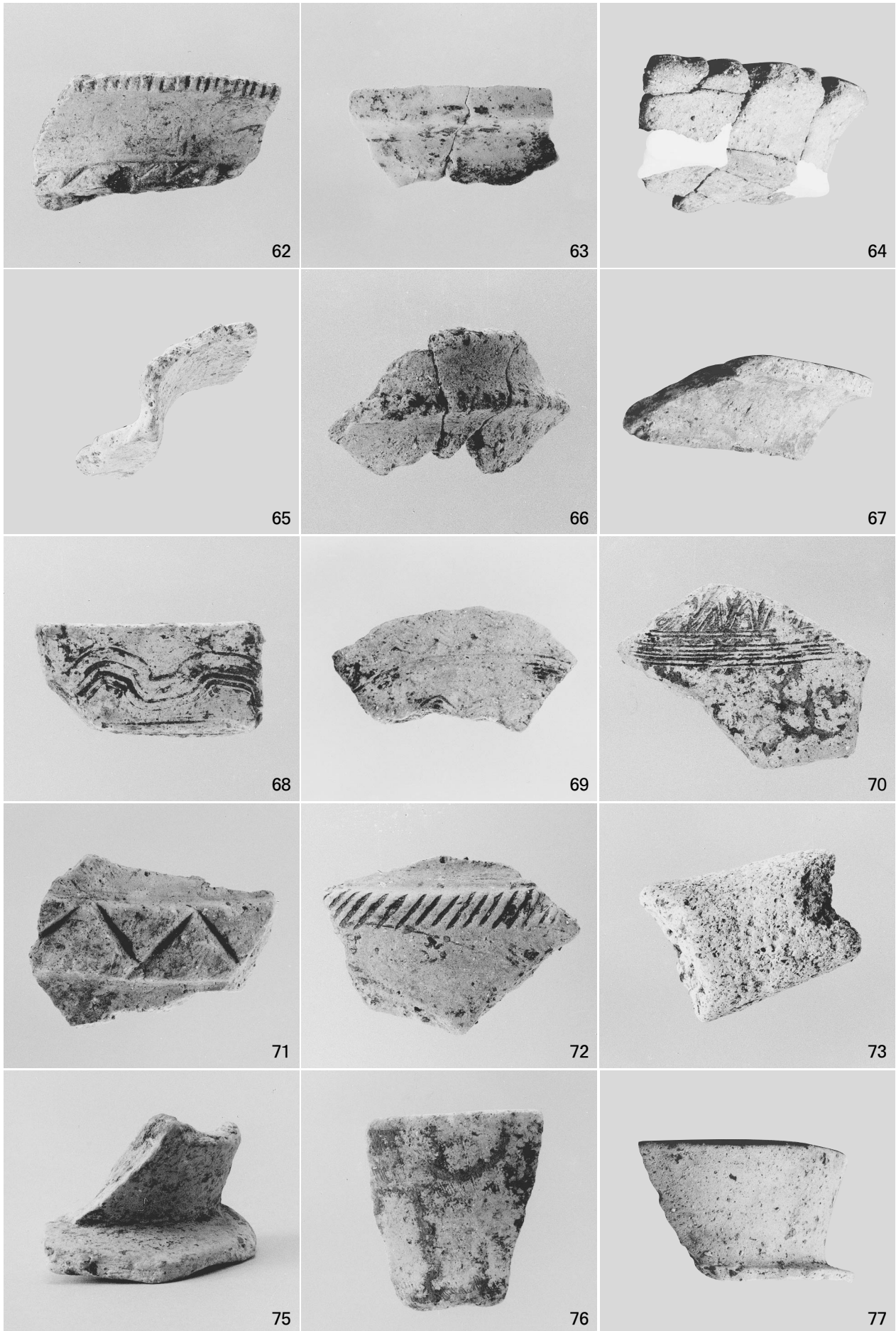


出土遺物④ (甕)



出土遺物⑤（甕）

図版18



出土遺物⑥（壺）



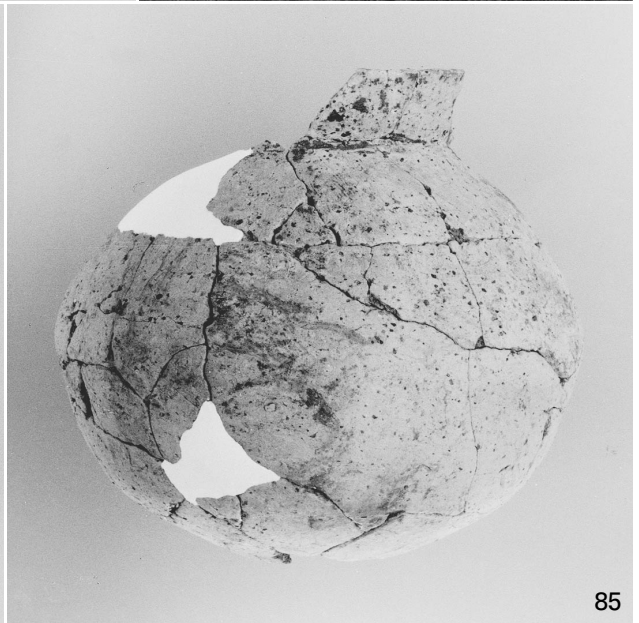
84



84



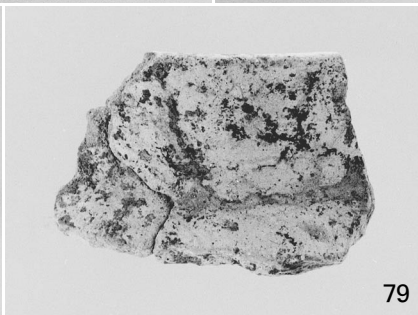
74



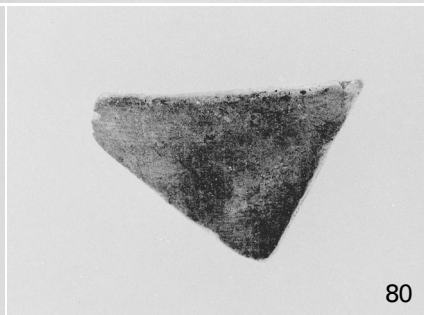
85



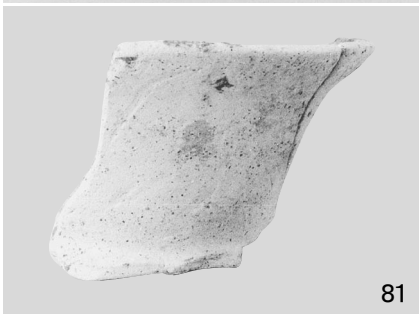
78



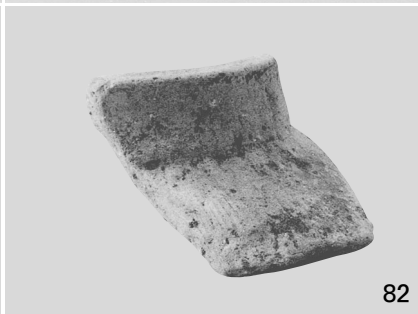
79



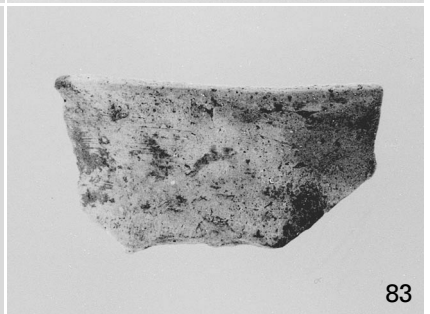
80



81

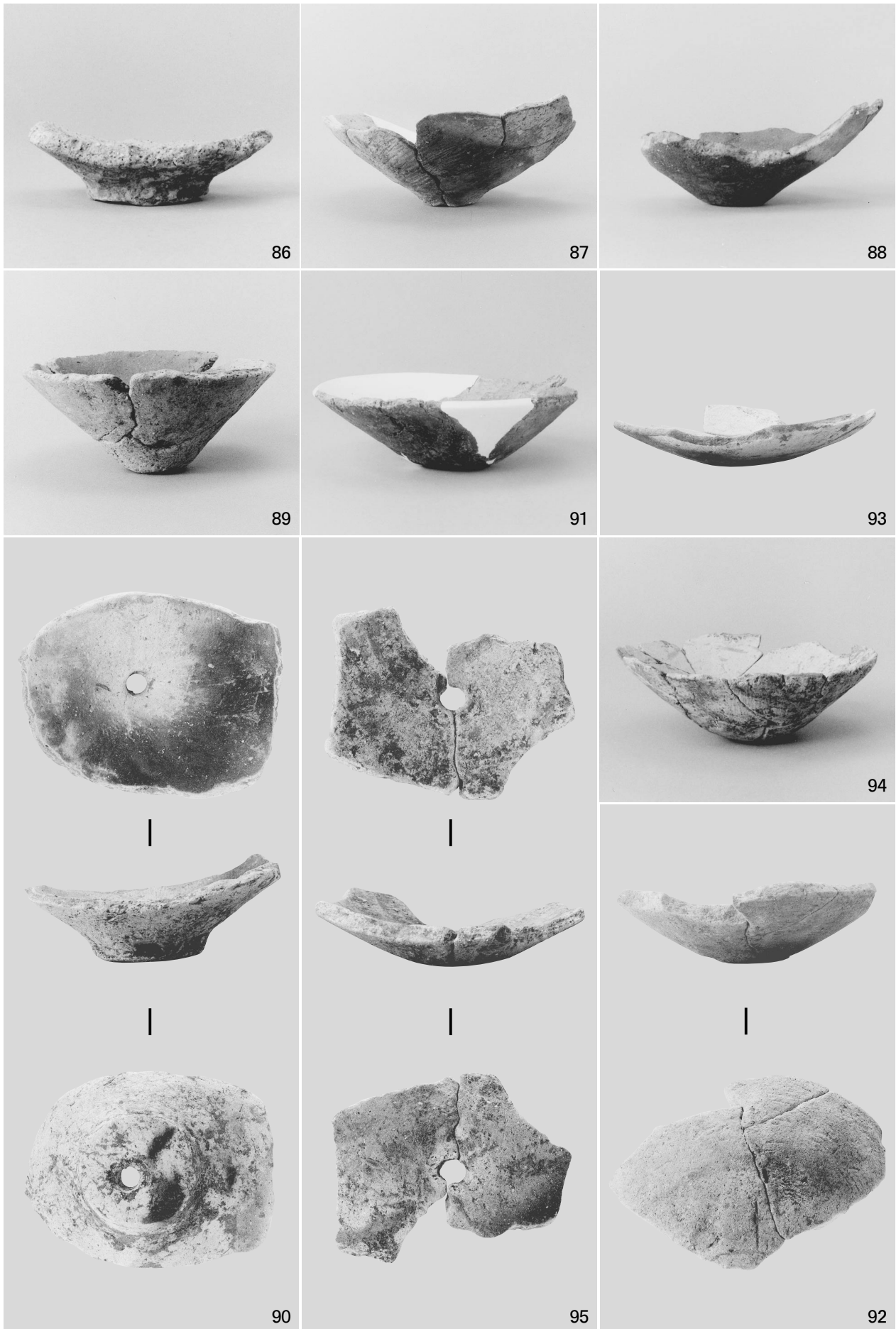


82

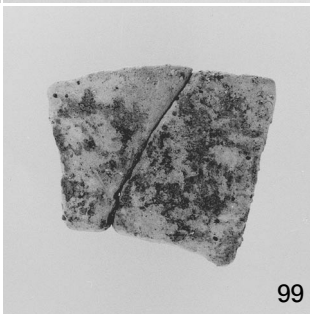
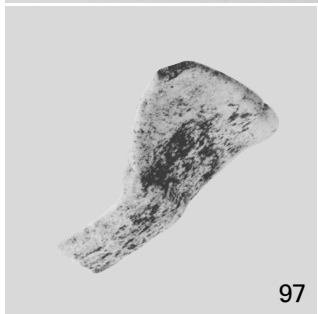
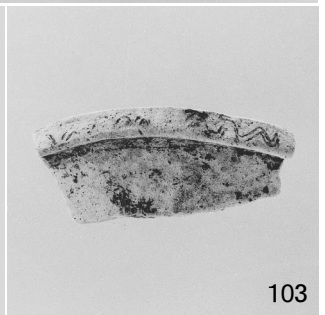
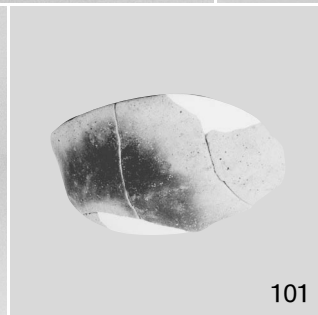
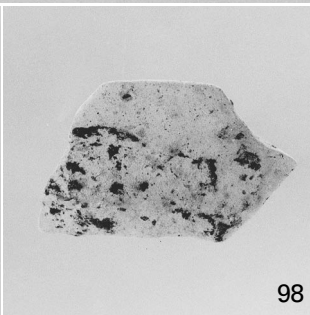


83

図版20

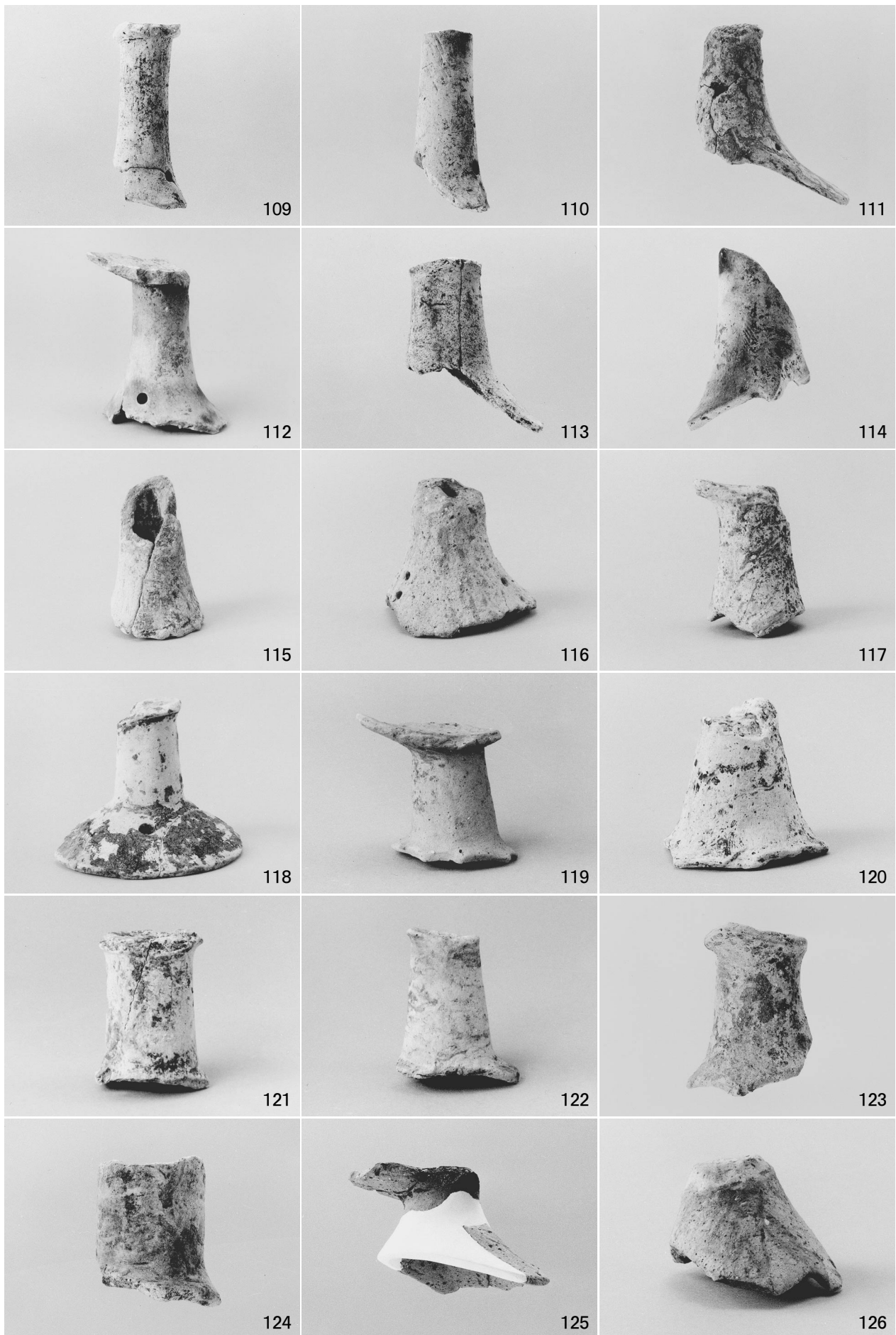


出土遺物⑧(壺)

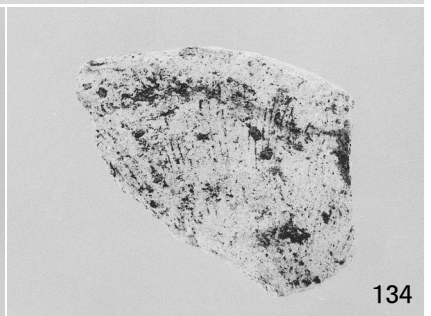
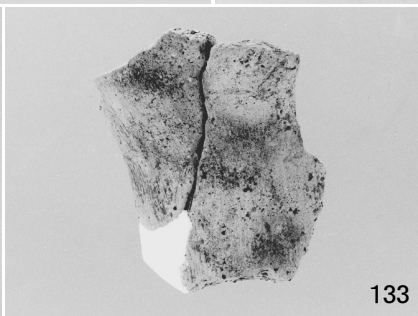


出土遺物⑨（高杯）

図版22

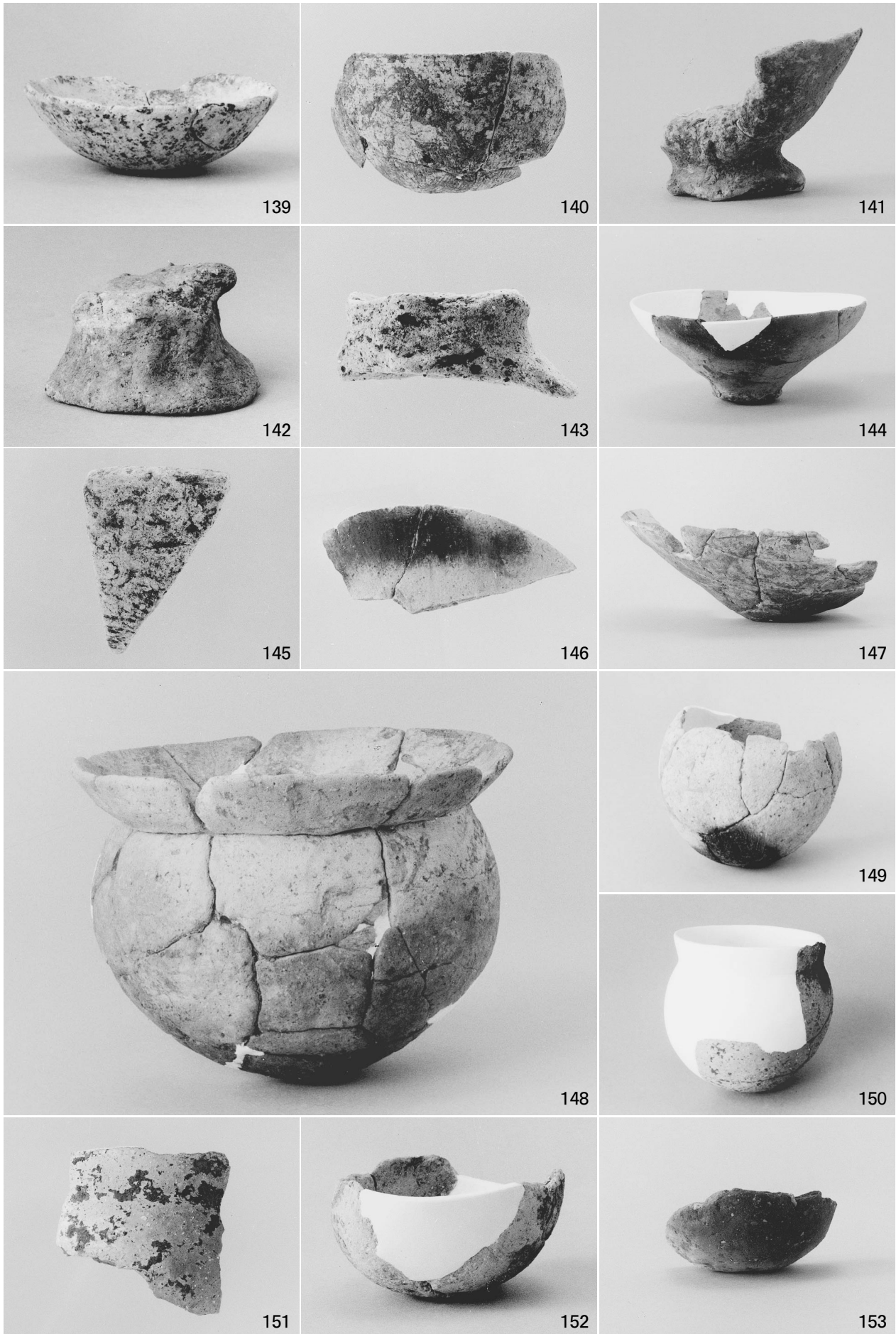


出土遺物⑩（高杯）

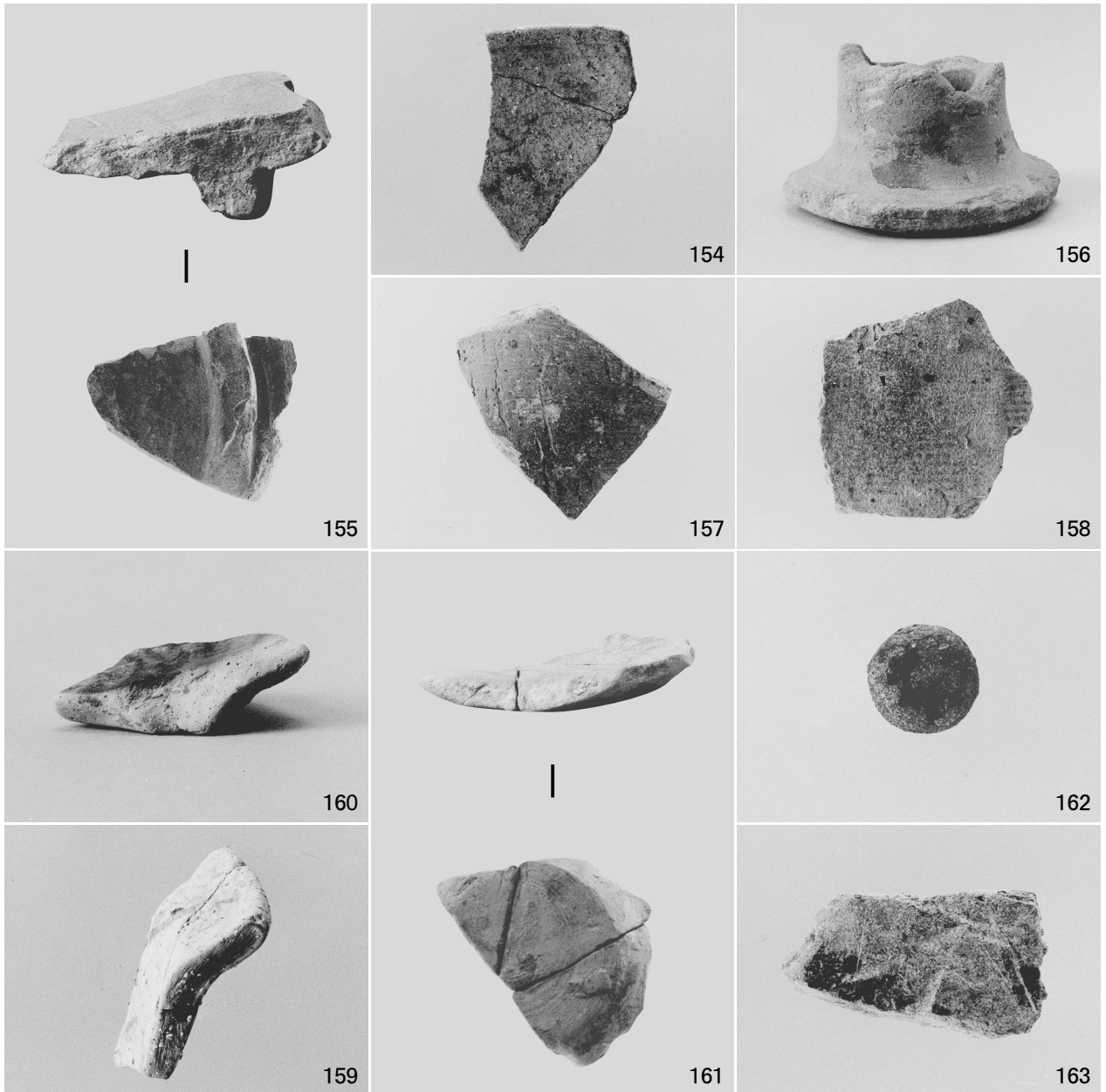


出土遺物⑪ (器台・高杯)

図版24



出土遺物⑫ (鉢・ミニチュア土器)



報告書抄録

ふりがな	たけひさがわかりゅういきじょうりいせき
書名	武久川下流域条里遺跡
福書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第42集
編集著者名	上山 佳彦 西尾 健司 城島 史朗
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2004年3月26日（平成16年3月26日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけひさがわ かりゅういき 武久川下流域 じょうりいせき 条里遺跡	やまぐちけん 山口県 しものせきし 下関市 はたぶみや したちよう 幡生宮の下町	35201		33° 59′ 16″	130° 55′ 45″	20031007 ∩ 20031224	1,600	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武久川下流域 条里遺跡	集落跡	弥生時代終末 ∩ 古墳時代初頭	土器溜まり 1箇所 掘立柱建物跡 2棟 土坑 3基 溝 1条 柱穴・杭穴 126個	弥生土器 土師器 須恵器 土製品 石製品	弥生時代終末～ 古墳時代初頭の時期の祭祀後一括廃棄されたと考えられる良好な土器資料を検出した。 船を象徴化したと見られる線刻文様が施された壺1点が出土した。